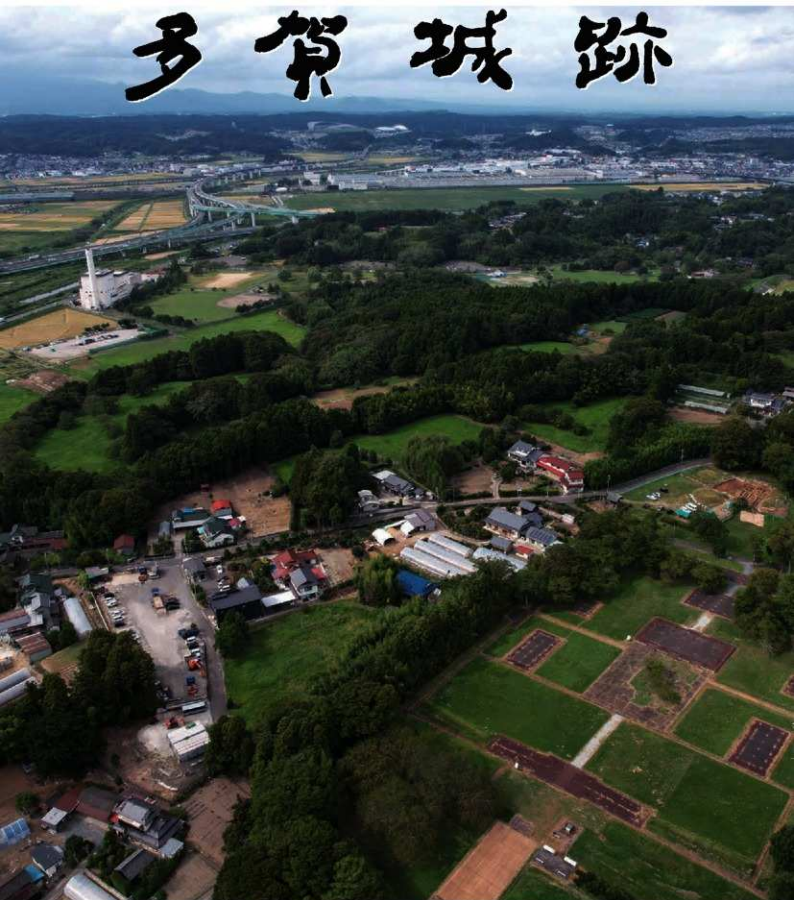


宮城県多賀城跡調査研究所年報 2023

# 多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所



## 序 文

多賀城跡調査研究所は、昭和44（1969）年の設立以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を解明し、その成果をもとに環境整備事業を実施することで、特別史跡多賀城跡附寺跡が多くの来訪者にとって親しみやすい憩いの場となる史跡公園を目指しています。

発掘調査事業は、第11次5ヵ年計画5年目の調査として2地点の調査を実施しました。1地点目は新西久保地区において、外郭西辺の構造と変遷の解明を目的とする第98次調査を実施しました。その結果、政庁第Ⅲ期から第Ⅳ期の区画施設である材木堀とそれに伴う整地に3時期の変遷があり、一番新しい材木堀は灰白色火山灰降下後に構築されたことを確認しました。過去の調査と合わせて、西辺の解明を進めるための貴重な成果が得られました。

2地点目は、多賀城政庁地区北方において、昨年度に引き続き遺構の構成と時期の把握を目的とする第99次調査を実施しました。その結果、第Ⅲ期の大型掘立柱建物の全体像が明らかになるとともに、その廃絶後には堅穴遺構に作り替えて、大規模な鍛冶工房が営まれていたことが判明しました。政庁北側の使われ方を解明するうえで貴重な成果となりました。

環境整備事業は、宮城県の総合計画『宮城の将来ビジョン・震災復興・地方創生実施計画』の重点事業に位置付けられ、「多賀城創建1300年記念重点事業」として実施しています。政庁南面地区を対象とした第11次5ヵ年計画4年目の事業としても位置付けており、城前官衙における説明板設置や張芝等を行っております。多賀城創建1300年の記念の年にあたる令和6（2024）年を迎え、まもなく全面供用を開始する見通しです。今後も、管理団体である多賀城市と連携し、推進していきたいと考えています。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導いただいています多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対してご支援いただきました皆様方に対し、所員一同深く感謝を申し上げます。

令和6年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 吉野 武

# 目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第98次調査	3
1. 調査の目的と経過	3
2. 調査成果	6
3. 多賀城跡第98次調査の花粉化石群と樹種同定	17
III. 第99次調査	22
1. 調査の目的と経過	22
2. 調査成果	29
3. 総括	61
IV. 第11次5カ年計画の総括	68
V. 付章	71
1. 関連研究・普及活動	71
2. 組織と職員	76
3. 沿革と実績	77

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真：南東より撮影〔登録番号：Z10433〕、裏表紙写真〔登録番号：Z10551〕】

## 図版目次

図版1	第98・99次調査区的位置	2	図版24	SX3495・3497～3499・3502戸、SK3486～3489土坑、SD3490・3493・3494溝断面図	44
図版2	外郭西辺の調査	4	図版25	第99次調査区東半全景写真	45
図版3	第10・98次調査区	8	図版26	SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3500竪穴遺構、SD3501溝写真	46
図版4	第98次調査区平面・断面図・写真(1)	10	図版27	SB3465掘立柱建物柱穴写真	47
図版5	第98次調査区平面・断面図・写真(2)	11	図版28	SB3465掘立柱建物柱穴、SK3486～3489土坑写真	48
図版6	第98次調査出土遺物・写真	13	図版29	SK3487土坑、SD3492～3494溝、SX3495～3499・3502戸写真	49
図版7	第47次と第10・98次調査の比較	14	図版30	SB3465掘立柱建物出土遺物	50
図版8	第10・47・98次調査の主な遺構	15	図版31	SX3467整地層出土遺物	51
図版9	多賀城跡第98次調査区的主要花粉分布図	19	図版32	SX3500竪穴遺構出土遺物(1)	52
図版10	多賀城跡出土杭材の顕微鏡写真	19	図版33	SX3500竪穴遺構出土遺物(2)	53
図版11	多賀城跡第98次調査区から産出した花粉化石	21	図版34	SX3500竪穴遺構出土遺物写真(1)	54
図版12	第99次調査区と周辺の調査	23	図版35	SX3500竪穴遺構出土遺物写真(2)	55
図版13	政庁地区北方の調査	24	図版36	SD3481溝、基本層出土遺物	57
図版14	第99次調査区遠景写真	26	図版37	基本層出土遺物写真	58
図版15	第99次調査・公園の様子	27	図版38	SB3465掘立柱建物とSX3466切土・3467整地層	62
図版16	第99次調査区全景	28	図版39	SX3500竪穴遺構と竪治遺構の変遷	64
図版17	遺構配置図	30	図版40	竪治関連遺物の集計	65
図版18	SB3465掘立柱建物模式図	33	図版41	遺構・層の変遷	66
図版19	第99次調査区東半平面図	36	図版42	多賀城跡発掘調査事業第11次5ヵ年計画発掘調査区的位置	70
図版20	SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層・3500竪穴遺構ほか断面図	37			
図版21	SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層・3500竪穴遺構ほか断面図	38			
図版22	SB3465掘立柱建物柱穴断面図	39			
図版23	SX3495～3500・3502戸、SK3486～3489土坑、SD3485・3490～3494・3501・3503溝平面図・写真	43			

## 表目次

第1表	多賀城跡調査研究委員会委員	1	第10表	SB3465掘立柱建物柱穴一覧	33
第2表	多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画(実績)	1	第11表	SX3495～3499戸一覧	41
第3表	第10・47・98次調査における遺構解釈の変更点	7	第12表	SD3490～3494溝一覧	42
第4表	分析試料の堆積物の特性	17	第13表	第99次調査出土土器・陶磁器類の破片集計	59
第5表	多賀城跡第98次調査から産出した花粉化石の一覧表	18	第14表	第99次調査出土竪治関連遺物重量集計	59
第6表	第99次調査遺物写真の登録番号一覧	26	第15表	第99次調査出土軒丸・軒平瓦の集計	59
第7表	第99次調査検出遺構・登録遺構番号一覧	28	第16表	第99次調査出土丸・平瓦の点数・重量集計	60
第8表	第99次と第95・96次の順序の対応	29	第17表	多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画	69
第9表	第99次調査の検出面と遺構	31	第18表	多賀城跡環境整備事業第10・11次5ヵ年計画	71
			第19表	令和5年度現状変更一覧	72

# 例 言

1. 本書は、令和5年度に実施した多賀城跡第98・99次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、多賀城関連遺跡発掘調査事業、関連研究事業、普及活動の概要等を取録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業については、多賀城跡調査研究委員会における審議と承認に基づいて実施している。
3. 測量原点については政庁正殿身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ1°04'東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標(第X系)の座標値は、東日本大震災後(平成24年)に実施した再測量の成果から以下のとおりである。  
正殿 世界測地系 X座標:-187968.3530m、Y座標:13560.4850m、標高:32.964m  
南門 世界測地系 X座標:-188037.4930m、Y座標:13559.3150m、標高:29.799m
4. 本書における遺構の位置の表記については、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離(m)で示している。  
例:W5 = 原点から西に5m、S3 = 原点から南に3m
5. 本書で使った遺構記号は、SB:掘立柱建物、SI:竪穴建物、SK:土坑、SD:溝、SX:切土・整地層・竪穴遺構・炉、P:柱穴・ピットである。
6. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖17版』日本色研事業株式会社(1996年)にもとづく。
7. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
8. 白磁の分類・年代観については、宮城県教育庁文化財課の高橋透氏、厳治の調査に際しては、(公財)福島県文化振興財団の能登谷宣康氏にご教示頂いた。
9. 当研究所の刊行物については、『多賀城跡 政庁跡 本文編』『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』を『補遺編』、『多賀城跡 外郭跡Ⅰ-南門地区』を『外郭Ⅰ』、『多賀城跡 政庁南門地区-城前官街遺構・遺物編』を『南門Ⅰ』、『多賀城跡 政庁南門地区Ⅱ-城前官街総括編』を『南門Ⅱ』、『多賀城跡 政庁南門地区Ⅲ-政庁南門大路-南北大路』を『南門Ⅲ』、『多賀城跡 施軸陶磁器』を『施軸陶磁器』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報2022』と記し、複数の年報の場合は『年報1972・2019』と記す。
10. 本調査で得た資料については、宮城県教育委員会が保管している。
11. 本書の内容の一部については、『第99次調査現地説明会資料』、『令和5年度宮城県遺跡調査成果発表会資料集』、『第50回古代権官街遺跡検討会資料集』で紹介しているが、本書の内容が優先する。
12. 本書の整理は、遺物を、初鹿野博之・村田兎一・鈴木貴生・柴田とみ子・菊池摩耶、遺構を、初鹿野・鈴木・菊池が担当した。
13. 本書のうち、Ⅱの3は古代の森研究舎の吉川昌伸氏・吉川順子氏に執筆いただいた。他は所員で討議と検討を行い、Ⅰ・Ⅱの1と2およびⅢを初鹿野・鈴木、Ⅳを鈴木、Ⅴを全所員が執筆し、関口重樹・初鹿野・鈴木が編集した。

## 調査要項

多賀城跡第98・99次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記の通りである。

調査主体	宮城県教育委員会(教育長 佐藤靖彦)
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所(所長 吉野 武)
調査員	初鹿野博之・古田和誠・村田兎一・鈴木貴生・矢内雅之
調査期間	第98次:令和5年5月15日~令和5年11月30日 第99次:令和5年7月3日~令和5年11月28日
調査面積	第98次:約330㎡ 第99次:約300㎡
調査参加者	市川昌曉・伊藤竜子・氏家雅夫・岡本敦子・興 清志・佐藤有佳利・鈴木幸夫・升 孝司・三浦早苗 (多賀城跡調査研究所会計年度任用職員) 佐々木晴・鈴木詩織・高野征人・楳野智之・樋口陽太・呂恒盛(東北大学)
整理参加者	柴田とみ子・菊池摩耶(多賀城跡調査研究所会計年度任用職員)

## I. 調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認のもとで5ヵ年計画を立案して行っている（第1表）。

令和5年度は、多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画5年次目の事業として、外郭西辺の新西久保地区を対象に第98次調査、政庁北側の政庁地区北方を対象に第99次調査を実施した（図版1、第2表）。また、環境整備第11次5ヵ年計画4年次目の事業として政庁南面地区の説明板設置や張芝工等を、多賀城関連遺跡発掘調査第8次5ヵ年計画5年次目の事業として大崎市大古山瓦窯跡の第3次調査を実施した。

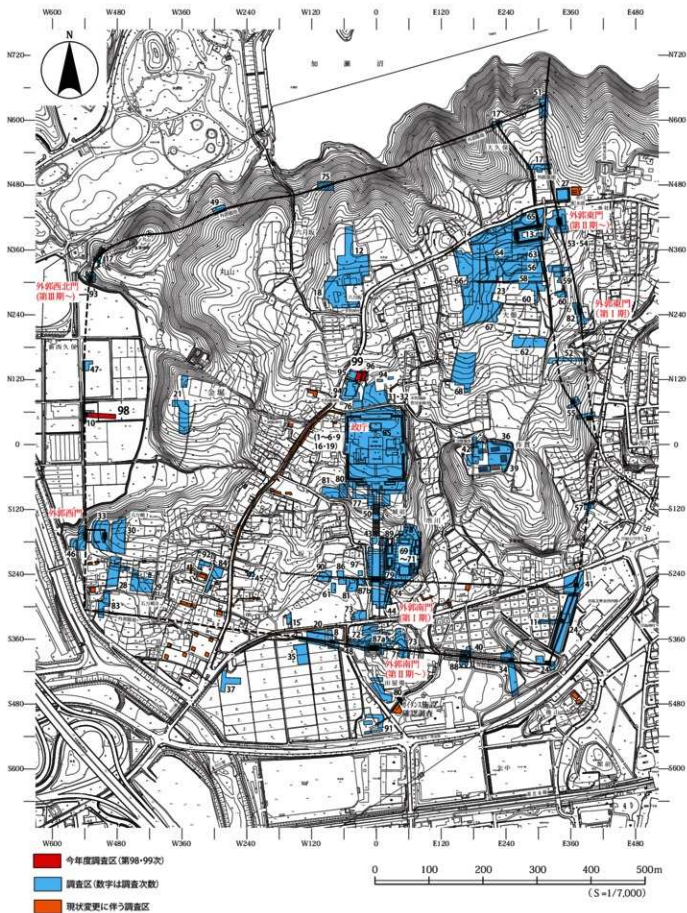
以下、本書では主に多賀城跡第98・99次調査の内容を記し、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

氏名	所属	専門分野
委員長 佐藤 信	東京大学名誉教授	古代史学
副委員長 藤澤 敦	東北大学学術資源研究公開センター長・総合学術博物館教授	考古学
委員 小野 健吉	大阪観光大学教授	庭園史学
委員 黒田 乃生	筑波大学教授	造園学
委員 櫻井 一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委員 佐々木由香	金沢大学古代文明・文化資源学研究所特任准教授	植物学
委員 藤井 恵介	東京大学名誉教授	建築史学
委員 古瀬奈津子	お茶の水女子大学名誉教授	古代史学
委員 堀 裕	東北大学大学院教授	古代史学
委員 本中 眞	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	造園学

第1表 多賀城跡調査研究委員会委員（任期：令和5年4月1日～令和7年3月31日）

年度	回数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成31 / 令和元年	93次	外郭北西隅（丸山・新西久保地区）	300㎡	外郭北西隅の区画施設と付属施設の確認
令和2年	94次	政庁地区北方	600㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和3年	95次	政庁地区北方	700㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和4年	96次	政庁地区北方	280㎡	政庁北・北西側の沢状地形における遺構の確認
	97次	外郭南辺（坂下地区）	150㎡	第1期外郭南門西側の区画施設の確認
令和5年	98次	外郭西辺中央部（新西久保地区）	330㎡	外郭西辺区画施設の確認
	99次	政庁地区北方	300㎡	政庁北・北西側の沢状地形における遺構の確認

第2表 多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画（実績）



図版1 第98・99次調査区の位置



## II. 第98次調査

### 1. 調査の目的と経過

#### (1) 目的

外郭西辺の区画施設における調査資料の蓄積を目的として、外郭西辺の新西久保地区を調査対象地とした(図版1)。外郭西辺を対象とした調査には、第10・17・33・46・47・93次調査がある(図版2)。これらは、西辺北端部の丘陵を調査した第17・93次調査、西辺中央部の低湿地を対象とした第10・47次調査、西辺南部の丘陵を対象とした第33・46次調査に分かれる。

**【第17・93次調査】** 西辺北端の丘陵では、3時期の築地塼(第17次:SF220A→B→C、第93次:SF220a→b→c)を検出した(『年報1972・2019』)。重複関係等から、第93次SF220aは第17次SF220Bに、第93次SF220b・cは第17次SF220Cに対応する。年代は、重複関係や出土遺物等からSF220Aが第三期以前、SF220B(SF220a)が第三期、SF220C(SF220b・c)が第四期と考えられる。

第93次調査では、区画施設に伴う遺構として、新たに外郭西北門(SB3400)を検出した。門は八脚門で、2時期の変遷があり、掘立式(SB3400A)から礎石式(SB3400B)に建て替えられている。時期はSB3400Aが第三期、SB3400Bが第四期と考えられる。これにより、第三期以降の多賀城の外郭西辺には、後述する西門と西北門の南北2箇所に門が設置されていたことが判明した。

これらのほか、第二期以前の可能性があるSX3385整地層、第三期の外郭区画施設と考えられるSA3401材木塼とそれに伴うSX3386整地層、第三・IV期で築地塼を切り通すSX3389切り通し状遺構などを検出している。SX3389は築地塼を切り通す遺構で、第三期終盤から第四期の古い段階に限定できる。切り通しの契機としては貞観11(869)年の陸奥国大地震が想定され、SX3389はその被害に対する城内の復旧・復興のために設けられた仮設の通路と推定した。

**【第10・47次調査】** 西辺中央部の低湿地では、第10次調査で「築地塼」とそれに伴う土留めの丸太列や寄柱を3時期(SF220A～C)検出した(『年報1970』)。約100m北に位置する第47次調査では、材木列自体を外郭区画施設の「材木塼」とみとうえて、SA1513A～Cの3時期の変遷を確認するとともに、第10次調査の再検討を行い、整地層を中心とした重複関係、材の径や底面の礎板の有無等から、SF220A丸太列をSA1513B材木塼、SF220C丸太列をSA1513C材木塼に対応させ、SF220B築地寄柱については東西1間×南北1間のSB1530掘立柱建物とした(『年報1984』)。また、第10次ではSF220C丸太列の掘方埋土に灰白色火山灰(当時は「灰白色土」)が含まれるとしていたが、第47次ではSA1513Cの掘方埋土には含まれず、切取溝の埋土に含まれるとした。

年代は、灰白色火山灰の降下年代と、想定される材木塼の耐久性から、SA1513AとSA1513Bがともに9世紀代、SA1513Cが9世紀末～10世紀前半の構築で、10世紀前半～中頃の廃絶と考えられる。

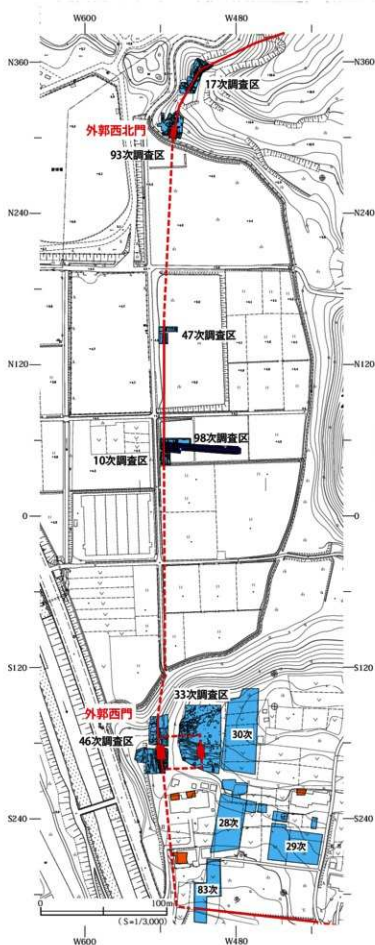
その後、2016年に第10次調査のSA1513B・C(SF220A・C)の材を対象に、年輪酸素同位体比分析を行った結果、SA1513Bの材4点は790～837年、SA1513Cの材4点は910～917年という年代値が得られた(『年報2017』)。最外年輪が失われていることも考慮すれば、前者は9世紀中頃、後者は917年を上限として920年を大きく下らない時期に伐採・構築された可能性が指摘され、灰白色火山灰の降下が915年とする説と第47次の年代観には齟齬が生じている(註1)。

**【第33・46次調査】** 西辺南部の丘陵では、第33次調査で4時期の築地塼や基礎整地層、第46次調査で

は3時期の築地塼(SF1471A→B→C)を検出した(『年報1978・1985』)。SF1471Aは基礎整地層と本体であり、SF1471BはSF1471A東側の嵩上げ整地、SF1471CはSF1471A西側の自然堆積層の上面に行われた嵩上げ整地から推定したもので、それぞれSB1095A・B・C外郭西門に伴う。

時期は、遺構の重複関係と出土遺物から、SF1471Aが8世紀後半～末頃で第Ⅱ期、SF1471Bが8世紀末頃～9世紀中頃で第Ⅲ期、SF1077・1089基底部が9世紀中頃～後半で第Ⅲ～Ⅳ期、SF1471Cが9世紀末頃～10世紀前半で第Ⅳ期以降としたが、外郭西門の変遷にほかの門との齟齬があるため、再検討中である(『外郭Ⅰ』)。

以上、外郭西辺では北西隅以外の広範囲にわたり、第Ⅲ期以降ほぼ同位置で2度の改修が行われ、直線的な外郭区画施設が形成されていたことが明らかとなってきた(図版2)。一方で、第Ⅱ期以前の区画施設が第46次調査以外検出されておらず、第Ⅰ期・第Ⅱ期の外郭西辺の様相は不明な点が多い。また、第Ⅳ期における灰白色火山灰との関係も、第47次調査および同調査で見解を改めた第10次調査の所見が、自然科学分析の結果と齟齬を生じており、再検討の必要があった。そこで第98次調査では、未解明の第Ⅰ・Ⅱ期の区画施設を把握すること、第Ⅲ・Ⅳ期の外郭西辺区画施設の構造・年代等を再検討することを目的として、新西久保地区で調査を実施した(第2表、図版1・2)。



図版2 外郭西辺の調査

## (2) 調査の経過と方法

**〔調査区の設定と表土除去〕** 調査区は、政府正殿の測量原点から北へ49～59m、西へ477～539mの範囲に位置する（図版2・3）。第10次調査区の一部を再検出しつつ、さらに東側の遺構の有無を確認するため、調査区は第10次北区の南壁に沿って、東側に延長する形で東西方向に長く設定した。調査は5月15・16日に重機による表土除去を行い、安全確保のため調査区は階段状に掘り下げ、西半では第10次調査時の遺構検出面まで掘削した。東半は耕作土第1層の下に、スクモと粘土が互層状に自然堆積する第Ⅱ～Ⅳ層があり、第Ⅳ層下の灰白色火山灰ブロックを含む第Ⅴ層上面まで掘削した。

**〔遺構の調査〕** 5月23日から人力による遺構検出に着手した。排水用のサブトレンチを設けて水中ポンプにより常時排水しながら作業を行った。西半では、第10次調査で確認した材木塀・掘立柱建物・杭列を再検出した。6月1日、第10次調査の平面図に記された掘立柱建物柱穴の位置と、再検出した柱穴の位置とが合わず、第10次調査の座標が現座標に対し北方向に約1mずれていることが明らかとなった。このため、6月14日に調査区西端部を南側へ重機で拡張して、改めて第10次調査北区の南辺を検出し、南壁断面の再検討などを行った。

東半では、第Ⅴ層上面の精査を行なったが、遺物がほとんど出土せず、微地形の変化も観察されなかったことから、区画施設等の遺構が存在する可能性は低いと判断し、調査区南壁際を幅40～170cmのサブトレンチ状に掘り下げることとした。結果、第Ⅴ層以下50cmほどで地山（第Ⅹ層）に到達し、遺構は検出されなかった。

調査は7月6日に南壁西半部の断面図を作成した後、一旦中断し、第99次調査に移行した。調査研究委員会を控えた9月28日から再開し、10月25～27日にかけて全体の平面図・断面図の作成を行った。10月31日には器材を撤収し、11月29・30日に重機により調査区を埋め戻して野外調査を終了した。なお、材木塀等が遺存している範囲については、砂で20cm程覆ってから埋め戻しを行った。

**〔調査成果の検討・公開等〕** 調査期間中の10月4・5日には、多賀城跡調査研究委員会による現場視察を受けるとともに調査内容を報告し、その審議を経て成果に関する指導と承認を受けた。また、調査の概要は、令和5年12月10日の「令和5年度宮城県遺跡調査成果発表会」（宮城県考古学会主催）、令和6年2月23・24日の『第50回古代城柵官衙遺跡検討会』で、いずれも紙上報告した。

**〔調査記録の作成方法〕** 平面図・断面図は縮尺1/20で図面用紙に手書きで作成した。平面図は、丸山地区の「丸山」と「丸山N」を基準に、トータルステーション（ソキア製CX-107F）を用いて、測量点を図面用紙に落とす形で作成した。断面図は遣り方測量により作成した。

遺構の写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon製D7000：1,690万画素）を用いた。画像の保存形式はRAWとJPEGで、撮影時には色調補正のためグレーカードを使用した。空中写真撮影にはドローン（DJI製AIR2S：2,000万画素）を使用し、保存形式はJPEGで、7月5・6日に撮影を行った。

**〔遺構・遺物の整理〕** 遺構平面図・断面図、遺物実測図のトレースにはドローソフト（Adobe Illustrator）を用いた。遺物の写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon製D7000：1,690万画素）を用いた。画像の保存形式はRAWとJPEGで、色調補正のためスパイダーチェッカーを使用した。遺構・遺物写真は画像編集ソフト（Adobe Photoshop）で補正・調整を行い、TIFF形式で保存した。

**〔遺構・遺物の登録〕** 第98次調査で再検出した遺構は、第10・47次調査で遺構登録台帳に登録して

いる221・1513・1530番をそのまま使用し、新たに検出した遺構は3414番を使用した（第3表）。遺物は土器・瓦・丸太材・近世以降の陶器など整理用平箱で4箱分出土しており、水洗後に、遺構・層の年代を示す遺物や特徴的な遺物6点を抽出して登録番号R1～R6を付した。

撮影した写真はデジタル写真台帳に登録して管理している。登録番号は、遺構写真がZ10261～10304、空中写真がZ10305～10324、遺物写真がZ10454～10466、その他の写真（調査の様子など）がZ10325～10335である。本書に掲載した遺構・遺物写真については、登録番号を掲載写真の脇に記載した。

## 2. 調査成果

### (1) 層序

第98次調査区が位置する新西久保地区は、北・東・南を丘陵に囲まれた低湿地となっている。現地表面は標高3.9～4.4mで、西半部は第10次調査後の昭和45年に厚さ60cm以上の盛土がなされているが、盛土以前の耕作面は東から西に向かってわずかに下る。基本層序は第47次調査で第1～9層および地山に分けており、今回もそれに対応させる形で第Ⅰ～Ⅹ層に分け、地山を第Ⅹ層とした。なお、今回の調査区南壁断面（図版3断面A）は、第10次北区南壁断面（『年報1984』で一部公表）とほぼ同位置で再検討を加えたものである。変更内容も含めて記述する。

**第Ⅰ層**：現代の盛土・耕作土。耕作土は全体に厚さ30cm程度である。

**第Ⅱ層**：暗褐色（10YR2/3）ないし黒褐色（10YR3/1）のスクモ層で、厚さは最大56cmである。近世以降の陶器片が1点出土している。調査区西端部では第Ⅱ層下に溝状の落ち込みがみられ、粘土・スクモ層が堆積する。

**第Ⅲ層**：灰オリーブ色（5Y5/3）・黒褐色（10YR2/2）・暗褐色（10YR3/3）を呈する粘土・スクモ層で、厚さは最大51cmである。a～dに細分し、a・b層は、第10次ではSF220C築地積土とした層だが、積土中にスクモが用いられている点などから、第47次で築地塀とは断定できないとした。今回改めて観察した結果、均質な粘土・スクモ層であり、自然堆積と判断した。

**第Ⅳ層**：暗灰黄色（2.5Y4/2）を基調とする粘土層で、一部に灰白色火山灰ブロックを含み、下層は部分的にグライ化している。厚さ最大22cmである。第10次でSF220C築地積土とした層も含まれるが、これも自然堆積と判断した。

**第Ⅴ層**：灰白色火山灰を含む堆積層。厚さ最大12cmでa・bに細分した。上層の第Ⅴa層は暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土層で、ブロック状の火山灰を多く含み、調査区西端を除く広範に分布する。下層の第Ⅴb層は、一次堆積とみられる均質な火山灰層で、調査区西半部で明瞭に観察されるほか、東端でも部分的に認められる。第Ⅴb層は第10次では「灰白色土」として、SF220C築地に伴う盛土整地層と考えたが、第47次で火山灰の自然堆積層と位置づけた。

**第Ⅵ層**：グライ化した粘土の自然堆積層で、オリーブ黒色（5Y3/2）や灰色（10Y4/1）を呈する。調査区西半部W515～528付近では、第Ⅹ・Ⅹ層を削るように厚く堆積し、厚さ34cm以上ある。a～cに細分し、a層は調査区全体、b層は西端のみ、c層は東半の一部に分布する。

**第Ⅶ層**：SA1513材木堀に伴う盛土・整地層で、調査区西端部のみに分布する。第47次の第7層は

SA1513C構築に伴う盛土整地層として報告したもののだが、今回はSA1513A～Cに伴う盛土整地層を確認しており、それぞれSX3414A～Cとした(図版3-1・3・6層)。第10次のSF220A築地、SX219盛土整地層を含む。

**第Ⅷ・Ⅸ層：**SA1513材木堀が構築される前の自然堆積層。第47次ではSA1513材木堀周辺で確認した第Ⅷ層と、東西両側の低地部分に堆積する第Ⅸ層に分かれる。今回は地山第Ⅹ層直上に分布する黒色(10YR2/1)を基調とする粘土層を、すべて第Ⅸ層とする。第10次の旧表土に対応し、厚さは最大23cmである。調査区西端と中央部に分布し、それ以外では第Ⅹ層の直上に第Ⅵ層が堆積する。

**第Ⅹ層：**灰色(10Y5/1)を基調とする粘土で、シルト～砂を層状に含み、水成堆積とみられる。第47次調査の地山に対応し、各次調査で0.5～1.0m程度掘り下げているが、遺構・遺物は検出されない。今回の調査区東端部で、ハンドオーガーによる簡易ボーリング調査の結果、標高1.0m付近に岩盤とみられる硬い層があることを確認した。

第Ⅹ層上面の旧地形としては、調査区東端の標高2.3mから西に向けて下る傾斜で、調査区中央部では標高1.7m前後でほぼ平坦となり、遺構の分布する西端部に向けて標高1.9m付近までわずかに上がる傾斜であることが確認された。

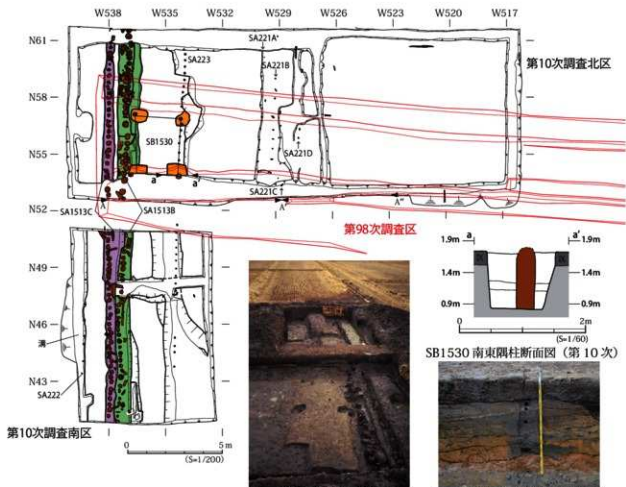
## (2) 発見遺構と出土遺物

検出した遺構は、掘立柱建物1棟(SB1530)、材木堀3条(SA1513A～C)、整地層3か所(SX3414A～C)、杭列4条(SA221A～D)である。調査区断面の検討により新たに設定したSX3414整地層以外の遺構は、第10次調査の再検出である。また、第10次のSA222杭列は今回の調査区外にあり、SA223杭列は再検出できなかった。第10次・第47次・第98次の遺構解釈については第3表にまとめた。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、丸太材、杭材、近世以降の陶器がある。遺構から取り上げた丸太材2点と杭材1点以外は、大部分が表土および第10次埋戻し土などの出土であり、集計作業は行っていない。

以下、各遺構について今回検出した部分の内容を中心に記述する。なお、先述の通り、第10次調査の座標と今回測量した座標では南北方向に約1mのずれがあり、本報告の図版では今回の座標値に合わせて第10次調査区の位置を補正している。

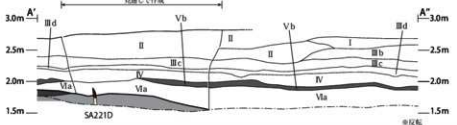
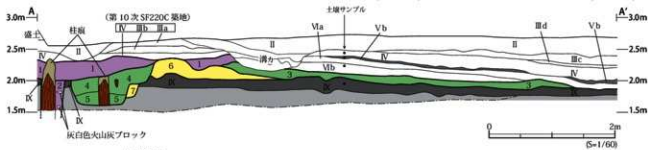
第10次：『年報1970』	第47次：『年報1984』	第98次
SX219基礎整地	SA1513Bに伴う一連の基礎地葉	SX3414A・B整地層および第Ⅵ層
SF220A築地堀		
SF220A丸太材列	SA1513B材木堀	SA1513B材木堀
SF220B築地堀寄柱穴	SB1530掘立柱建物	SB1530掘立柱建物
SF220C築地堀	築地堀とは断言できない	第Ⅲ～Ⅳ層(自然堆積)
SF220C丸太材列	SA1513C材木堀	SA1513C材木堀
SF220C整地(灰白色土)	第5層(灰白色火山灰)	第Ⅴ層(灰白色火山灰)
SA221A～D杭列		SA221A～D杭列
SA222杭列		SA222杭列(調査区外)
SA223杭列		SA223杭列(再検出できず)

第3表 第10・47・98次調査における遺構解釈の変更点



1. 第10次調査 (北から) [Z10304]

2. 土壌サンプル箇所 (北から) [Z10331]



SA1513A・SX3414A	木材
SA1513B	第V層
SX3414B	第IV層
SA1513C・SX3414C	第IV層
SB1530	● 土壌サンプル

遺構・層	土色	土性	含有物など	備考
SX3414C	1 灰オリーブ色(SY4/2)	粘土	砂混り、灰白色火山灰ブロック(径3cm以下)を含む	竈地
SA1513C	2 灰色(10Y4/1)	粘土	黒色粘土・オリーブ色砂との混り、灰白色火山灰ブロック(径5cm大)を含む	竈方埋土
SX3414B	3 オリーブ黒色(10Y3/2)	粘土	黒色粘土主體、ガラス化した砂を多量、炭力明にオリーブ色粘土をまだらに含む	竈地
SA1513B	4 灰色(10Y4/1)	粘土	オリーブ色砂粒・黒色粘土の混り、炭化物をわずかに含む	竈方埋土
SA1513B	5 オリーブ黒色(7.5Y3/2)	粘土	3層より暗い粘土主體、炭化物をわずかに含む	竈方埋土
SX3414A	6 灰オリーブ色(7.5Y3/2)	粘土	砂を多量含む	竈地
SA1513A	7 褐色(10Y4/2)	粘土	V層のブロック主體、黒色粘土を少量含む	竈方埋土

図版3 第10・98次調査区

## ① 掘立柱建物

### 【SB1530掘立柱建物】(図版3・4)

〔検出〕調査区西端部のN53～58・W533～537で検出した東西1間、南北1間の建物である。第10次ではSF220B築地の寄柱としていたもので、第47次の際に掘立柱建物に改めた。西側柱列の掘方はSA1513A・B材木堀掘方と重複し、東側柱列掘方はSA223杭列と重複する。今回は十分な確認ができなかったが、第10次ではSA1513掘方→SB1530掘方→SA223杭列の順としている。また、南西隅を除く3か所で柱材が残っており、第10次で取り上げている。

〔掘方〕南側柱列で掘方埋土を再確認した。最も残りの良い南東隅柱で幅108cm以上、深さ28cm以上で、湧水のため底面まで確認できなかったが、第10次で作成した柱穴断面図(図版3断面a)では、深さ約90cmで、埋土は3層に分かれる。今回は上層の1層のみ確認し、灰色と黒色の粘土がブロック状に混ざった層で、砂を少量含む。観察した限りで灰白色火山灰は含まれない。なお、今回の調査では埋土からの遺物は出土していない。

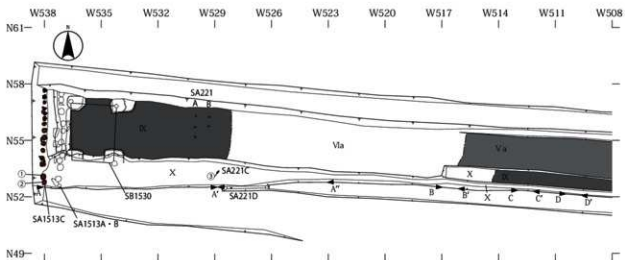
## ② 材木堀

### 【SA1513A～C材木堀】(図版3・4)

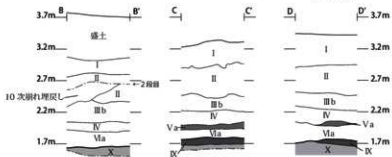
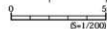
〔検出〕調査区西端部のN52～58・W536～539で検出し、南北方向に丸太材を密に立て並べた材木堀である。3段階の変遷を確認し、古い方からA～Cとする。検出面は第IX層上面で、Aは大部分が重複するBにより失われ、南壁断面で掘方の一部を確認したにとどまる。BとCは平面・断面で掘方と丸太材を確認し、両者は10～52cmの間隔がある。今回の検出長はBが約5.2m、Cが約5.1mで、方向はいずれも北で東に約1°偏する。なお、Bの材の大部分は第47次調査の際に取り上げて室内で保管しており、Cの材は現地にビニールシートをかけた状態で遺存している。

〔掘方〕Aは南壁断面で幅20cm以上、深さ22cmで、上部と西側はB掘方により切られる。埋土は1層確認した。Bは南壁断面で幅131cm、深さ67cmで、上部は後述するSX3414C整地層に切られる。断面形は東壁に段が付く逆台形状で、位置的にAの材を抜き取りながら、わずかに西側にずれる位置にBを掘ったことにより段が生じたとみられる。埋土は2層確認した。Cは南壁断面で幅37cm、深さ47cm以上で、底面は未検出である。埋土は1層確認し、灰白色火山灰ブロックを複数含む。なお、今回の調査でA～C埋土から材以外の遺物は出土していない。

〔丸太材〕Bの材は第10次で取り上げたもの以外に、調査区南壁断面で新たに1本検出した。直径18cm以上、長さ41cmである。Cの材は第10次で検出したもの(16本)を再検出した。南壁断面では直径22cm、長さ56cm以上(底面未検出)で、上部はSX3414C整地層内で腐食しており、痕跡も含めた長さは80cm以上である。また、調査区排水溝部分にあったCの材2本を取り上げた(図版4-①・②=図版6-2・3)。いずれも芯持材で、下端周縁に斫り痕がみられるほか、下半部には運搬用に縄などをかけたとみられる方形の潜り穴1対がある。2本の樹種同定は今後行う予定である。



※A断面は図版3に掲載  
 ※①～③は材の取り上げ番号



※1・2層目の断面図を見直し合成 (断面B～D) ※いずれも断面を反転



1. 調査区遠景 (西から) [Z10311]



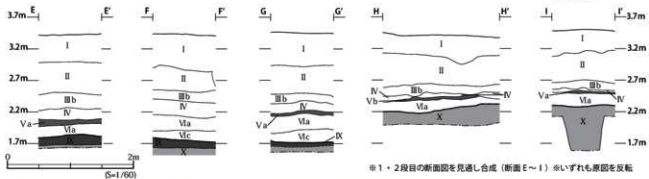
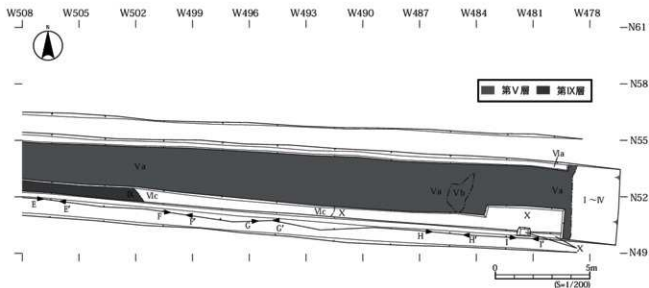
2. 調査区全景 (上が北) [Z10319]



3. 調査区全景 (東から) [Z10281]

図版4 第98次調査区 平面・断面図・写真(1)





1. SA1513・SB1530 再検出(南から) [Z10271]



2. 南壁断面西端(北から) [Z10297]



3. SA1513 断面(北から) [Z10301]



4. SA1513C 掘方に含まれる灰白色火山灰(北から) [Z10302]

図版5 第98次調査区 平面・断面図・写真(2)

### ③ 整地層

#### 【SX3414A～C整地層】(図版3・4)

【検出】SA1513A～C材木堀の主に東側(城内側)において、砂・粘土等がブロック状に混ざる層を断面で複数確認し、堆積順序や色調等の類似から、SA1513A～Cに伴う整地層と認定した。

【層】南壁断面でA・B・C各1層確認した。A整地(6層)は幅約2.1m、厚さ最大29cmで、西端は掘方Bに切れ、東端は徐々に薄くなる。B整地(3層)は幅約5.6m、厚さ最大16cmで、西端は整地Cに切れ、東端は徐々に薄くなる。C整地(1層)は幅約3.2m、厚さ最大30cmで、西側はC材木堀を挟んで調査区外へ続き、東端は第Ⅱ層下部の溝により切られる。C整地にはSA1513C掘方と同様に灰白色火山灰ブロックが含まれ、SA1513Bの掘方上部を切るように堆積する。SA1513Bの柱を切り取り、西側にSA1513Cの掘方と材を構築した後に、C整地が行われたとみられる。

### ④ 杭列

#### 【SA221杭列】(図版3・4)

【検出】調査区西端部のN52～57・W533～537で検出した南北方向の杭列である。検出面は第Ⅸ・Ⅹ層で、第10次ではA～Dの4条検出しているが、再検出できた杭はA3本、B2本、C1本で、Dは調査区南壁断面で新たに1本を検出した。

【規模】杭は直径5～8cmで、南北方向はA・Bともに40～50cm間隔、東西方向はAとBが約60cmである。Cは調査区排水溝部分で検出した1本を取り上げた(図版6・4)。樹種はコナラ属コナラ節である(次項参照)。

### ⑤ 出土遺物

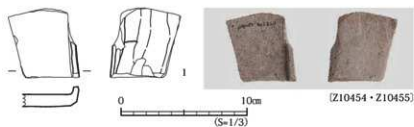
帰属が明確な基本層出土遺物として、第Ⅱ層から近世以降の陶器片1点、第Ⅵ層からロクロ調整の土師器片1点が出土した。また、第10次の埋戻し土中で、風字碇の破片1点(図版6・1)が出土した。

## (3) まとめ

外郭西辺低地部の区画施設については、第47次調査で第10次調査の再検討を行い、対応関係を示している(『年報1984』)。今回の調査により、改めて第47次との対応関係を整理したものが図版7・8および第3表である。

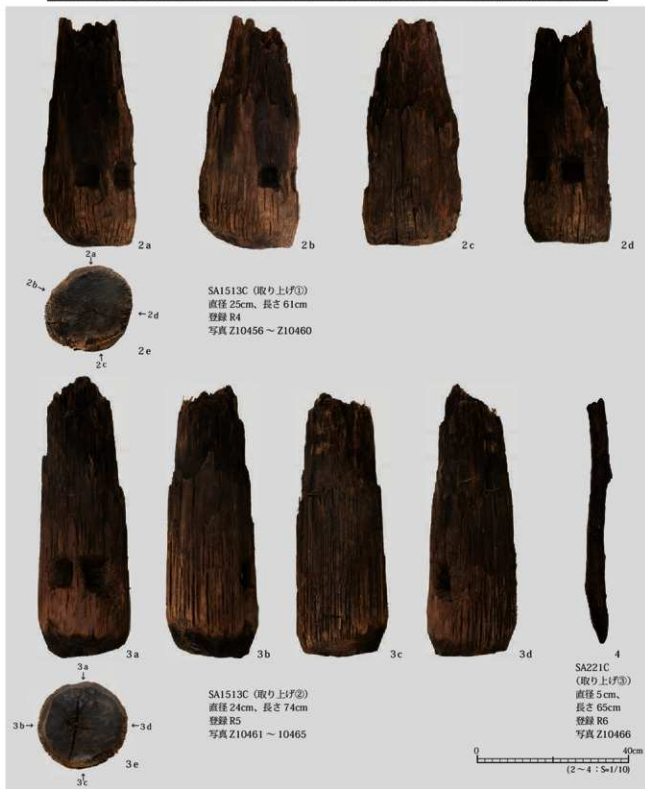
### ① SA1513材木堀・SX3414整地層

SA1513材木堀は、掘方の位置や材の遺存状況等からみて、第47次SA1513A～Cと第98次SA1513A～Cが基本的に対応すると考える。ただし、第47次ではCのみに整地(第7層)が伴うのに対し、第98次ではA～Cそれぞれに伴うSX3414A～C整地層を確認した。また、第47次SA1513Cは、灰白色火山灰降下前の構築、降下後の切り取りであるのに対し、第98次では第10次の見解と同様、火山灰降下後の構築であることを再確認した(註2)。Cの丸太材検出面の標高で見ると、第98次が2.1～2.3m、第47次が2.3～2.5m(東日本大震災による補正込み)で、第98次のほうがわずかに低いものの大きな差はなく、火山灰の堆積状況が異なっていたとは考えにくい。なお、検出面は第10・98次で南から北へ、第47次で北から南へわずかに傾斜しており、両者の間が最も低いと推定される。

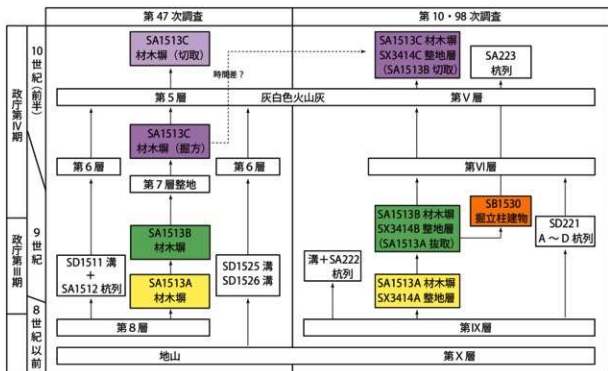


No.	層	種類	残存	法量	特徴	登録	船番号
1	第10次埋戻し土	黒字硯	側部～側辺部の一部	部高 (1.6)	外：ヘラケズリ～側部接合後ナデ 内：ヘラケズリ 使用痕跡著	R 1	B16345

(単位:cm)



図版6 第98次調査 出土遺物・写真



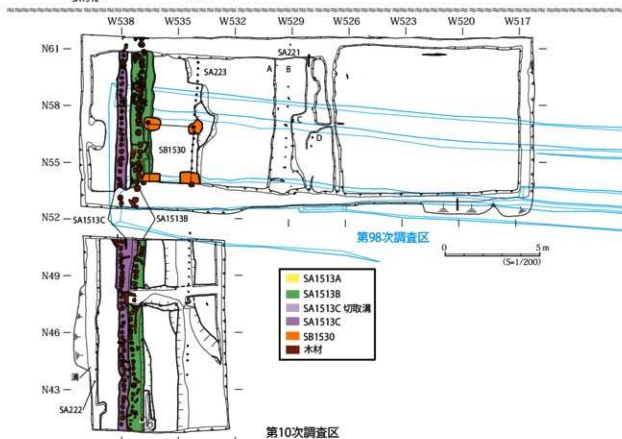
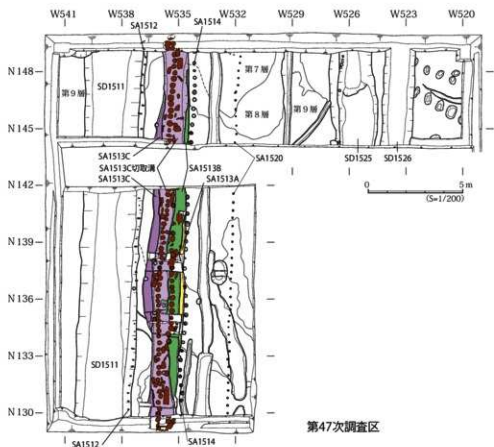
図版7 第47次と第10・98次調査の比較

## ② SB1530掘立柱建物

SB1530の柱穴掘方は、第10次で確認した重複関係ではSA1513B材木堀掘方よりも新しく、掘方埋土に灰白色火山灰が確認されない状況から判断すると、B材木堀構築後にその内側に接して建てられたと考えられる。材木堀の内側に接して設けられた1間×1間の建物の例として、外郭東辺南端部のSB224建物（『年報1970』）があり、櫓と推定される（古川1979）。

## ③ 材木堀より城内側の溝・杭列

第47次ではSA1513B材木堀から東側に8.7～10.9mのところ、SD1525・1526溝を検出した（図版8上）。溝の上幅は1.8～2.0mで、第6層より古いことから、SA1513AまたはBに伴い、材木堀と溝の間が通路として機能していた可能性を指摘している。第98次では対応する溝は検出していないが、材木堀の東側に整地が広がることから、同様に通路として機能していたとみられる。また、B材木堀から東側に7～10mのところSA223A～D杭列を検出し、それより東側で第VI層が幅約12mにわたって第IX・X層を削るように深く落ち込むことを確認した（図版3・4）。杭列の場所まで及んでいる整地はSX3414Bのみであり、第VI層に覆われている点からも、Bに伴う土留めの杭列の可能性が高いと考える。このほかに、SB1530より新しいSA223があり、第10次南区では灰白色火山灰より新しいとしている。位置や新旧関係からSA223はSX3414C整地層に伴うと考えた場合、C材木堀からSA223までの距離は3.8～4.0mであり、位置的には第47次のSA1520杭列に対応する。



図版 8 第 10・47・98 次調査の主な遺構

#### ④ 材木堀より城外側の溝・杭列

第47次ではSA1513B材木堀の約1.6m西側で、SD1511溝とSA1512杭列を検出した(図版8上)。SD1511は上幅約3.1mで、東壁に並ぶSA1512は、しがらみ杭列による護岸とみられる。これらも第6層より古いことから、SA1513AまたはBに伴うと考えられる。第98次では材木堀の西側は調査できなかったが、第10次南区で材木堀に並行する溝(遺構番号なし)とSA222杭列を検出している(図版8下)。

以上、第10・47・98次調査の共通点を整理すると、外郭西辺低地部では区画施設としてSA1513材木堀を検出し、A～Cの3時期の変遷を確認した。各時期とも材木堀の城内側は通路として利用していたとみられ、B期には堀の内側に接して櫓とみられるSB1530掘立柱建物が伴う。城外側は、A・B期に材木堀に沿って杭列で護岸された溝が走る。A～Cの年代は、これまで同様に9世紀～10世紀前半頃(第Ⅲ期～第Ⅳ期)とみられ、第Ⅰ期・第Ⅱ期にさかのぼる区画施設は未検出である。

一方、第10・98次と第47次の相違点として、SA1513A・Bに伴うSX3414A・B整地層の有無、城内側における溝(SD1525・1526)の有無、SA1513Cの構築と灰白色火山灰降下との前後関係が挙げられる。特にSA1513Cについては、同じ材木堀の地点による構築の時間差と解釈するのが妥当かどうか、検討の余地がある。第Ⅰ期・第Ⅱ期にさかのぼる区画施設の確認も含めて、今後の課題としたい。

#### 註

- 1) この分析結果により、十和田カルデラの噴火が西暦920年以降の可能性を示唆する、という説も示されている(木村・箱崎2021など)。
- 2) 今回の調査地点ではCの構築が灰白色火山灰の降下後と確認されたことで、降下年代が西暦915年でも年代測定結果とは矛盾しないこととなる。

#### 参考文献

- 木村勝彦・箱崎真隆2021「第三節 年代決定への応用—東日本」『気候変動から読みなおす日本史2 古気候の復元と年代論の構築』pp.247-255 臨川書店
- 古川雅清1979「東北地方古代城柵官衙の外郭施設—所謂「櫓」跡について—」『研究紀要VI』pp.29-81宮城県多賀城跡調査研究所

### 3. 多賀城跡第98次調査の花粉化石群と樹種同定

吉川昌伸・吉川純子（古代の森研究所）

#### (1) はじめに

多賀城跡第98次調査区は、外郭西門と西北門のほぼ中間で低湿地部分にあり、多賀城外郭周辺を区画する材木塚と、それに伴う整地層や杭列などが検出されている。これらの遺構は9世紀後半から10世紀前半頃と推定されている。ここでは遺構の形成による環境変化を明らかにすることを目的に花粉分析を行った。また、多賀城外郭を区画する材木塚に使用した樹種がほぼクリであったことがわかっており、外郭区画施設における木材資源利用を明らかにするために杭列の樹種同定を行った。

#### (2) 試料と方法

##### ① 花粉分析と細粒微粒炭分析

花粉分析試料は、第98次調査区のIX層(No.4試料)とVI層(No.3)、V層(No.1)より採取された3試料である。IX層は8世紀以前の区画施設構築前の表土、VI層は9世紀後半頃で整地層間の自然堆積層、IV層はTo-aより上位の10世紀代の自然堆積層とされている。各試料の堆積物は、IX層No.4が褐色有機質シルト、VI層No.3が灰褐色細粒砂質シルト、IV層No.1が褐色極細粒砂質シルトであった。

花粉化石の抽出は、試料約1.3～1.7gを秤量し体積を測定後に10%KOH、傾斜法により砂を除去、48%HF、重液分離(比重2.15の臭化亜鉛)、アセトリス処理の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分攪拌後、マイクロピペットで取り重量を測定(感量0.1mg)シグリスンで封入した。同定と計数はプレパラート1枚の全面を検鏡した。花粉化石の出現率は、樹木は樹木花粉数を基数とし、草本とシダ植物は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。

分析試料の堆積物の特徴にかかわる有機物量、砂分量、シルト以下の細粒成分量、および生業の指標となる細粒微粒炭量を求めた。有機物量については強熱減量を測定し、電気マッフル炉により750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。細粒微粒炭量は、プレパラートの顕微鏡画像をデジタルカメラで取り込み、画像解析ソフトのImageJで75μm2より大きいサイズの微粒炭の積算面積を求めた。

##### ② 樹種同定

試料はSA221杭列に使用した材である。杭材からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を切り取り、封入剤ガムクロラルでプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。

#### (3) 結果

##### ① 花粉分析と細粒微粒炭分析

No.	層	推定年代	堆積物の特徴	砂	シルト 粘土	強熱減量 (有機物量)
1	IV	10世紀代	褐色極細粒砂質シルト	16.5	72.7	10.8
3	VI	9世紀後半頃	灰褐色細粒砂質シルト	28.0	57.4	14.6
4	IX	8世紀以前	褐色有機質シルト	8.1	76.6	15.3

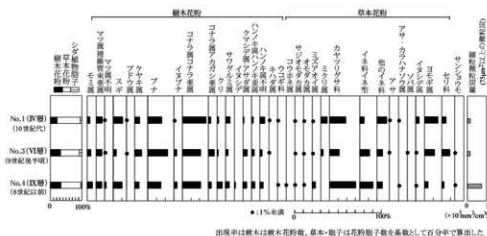
第4表 分析試料の堆積物の特性(重量%)

和名	学名	No.1	No.3	No.4
		IV層	VI層	IX層
樹	木			
モミ属	<i>Abies</i>	5	6	13
ツガ属	<i>Tsuga</i>	2	-	1
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	2	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>	-	1	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyton</i>	11	10	14
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	1	3
コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> (Thunb.) Sieb. et Zucc.	2	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.fil.) D. Don	16	5	22
他のイチイ科-ヒノキ科(ヒノキ型)	other Taxaceae - Cupressaceae ( <i>Chamaecyparis</i> type)	-	1	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	1	1	-
ニレ属	<i>Ulmus</i>	1	2	-
ケヤキ属	<i>Zelkova</i>	9	12	11
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis - Aphanthe</i>	-	-	1
フナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	24	34	32
イヌフナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	1	5	8
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Leptlobalanus</i>	41	31	45
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	4	10	8
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	3	2	13
サワグルミ属	<i>Pterocarya</i>	8	4	9
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	1
イヌシデ	<i>Carpinus tschonoskii</i> Maxim.	-	-	3
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	2	7	9
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	1	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	2	4	4
ハンノキ属ハンノキ亜属	<i>Alnus</i> subgen. <i>Alnus</i>	3	4	8
ハンノキ属(不明)	<i>Alnus</i> (Unknown)	8	3	7
ヤナギ属	<i>Salix</i>	1	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	1	-
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	1	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	1	1	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	1
モチノキ属	<i>Ilex</i>	1	-	-
タニツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	1
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	1	-	2
草	本			
コウホネ属	<i>Nuphar</i>	-	-	1
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	2	2	1
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	1	1	3
ツククサ属	<i>Comnelia</i>	2	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	3	2	25
ミクリ属	<i>Sparagnum</i>	50	12	-
カヤツリガサ科	Cyperaceae	130	51	200
イネ科(イネ型)	Poaceae ( <i>Oryza</i> type)	35	61	101
他のイネ科	other Poaceae	77	30	41
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	3	-	-
アリノトウグサ属	<i>Gonolobus</i>	1	-	-
バラ科	Rosaceae	2	-	-
アサ	<i>Cannabis sativa</i> L.	1	1	-
アサ-カラハナソウ属	<i>Cannabis sativa - Humulus</i>	3	-	2
フウロソウ属	<i>Geranium</i>	-	1	-
キカシタサ属	<i>Rotala</i>	-	-	1
チョウジタデ属	<i>Ludwigia</i>	-	-	1
アブラナ科	Brassicaceae	1	3	1
イブキトラノオ属	<i>Bistorta</i>	1	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	1	-
イヌタデ属	<i>Persicaria</i>	27	4	6
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	2	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	4	2	-
アカザ亜科	Chenopodiaceae	2	1	3
他のヒユ科	other Amaranthaceae	10	6	2
シソ科	Lamiaceae	-	-	2
キクニガナ亜科	Cichorioideae	2	1	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	109	52	22
他のキク科(キクニガナ亜科除く)	other Asteraceae (excluding Cichorioideae)	8	5	4
セリ科	Apiaceae	32	42	17
シダ植物				
ゼンマイ科	Osmundaceae	-	1	2
サンショウモ	<i>Savinia natans</i> (L.) All.	-	2	1
単葉型胞子	Monolete spore	32	34	14
三葉型胞子	Trilete spore	3	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	150	147	216
草本花粉	Nonarboreal pollen	509	277	432
シダ植物胞子	Fern spores	35	37	17
花粉・胞子数	Pollen and Spores	694	461	665
不明花粉	Unknown pollen	28	5	10
樹木花粉量(粒/cm <sup>3</sup> )		4760	1260	7780
微粒微粒炭量(mm <sup>3</sup> /cm <sup>3</sup> )		159	164	724

第5表 多賀城跡第98次調査から産出した花粉化石の一覧表 (APG III分類体系に準拠)



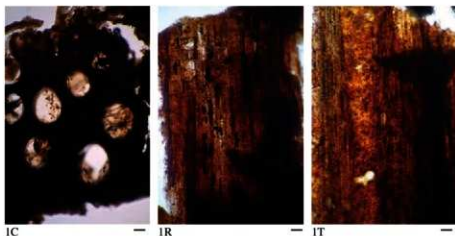
No.1とNo.3、No.4試料から産出した樹木花粉はほぼ同様な組成を示した(第5表、図版9)。つまり、コナラ属コナラ亜属とブナが比較的高率で産出し、針葉樹のスギやマツ属複雑維管束亜属、モミ属、落葉広葉樹のケヤキ属、サワグルミ属、クリ、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属などや常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属などであった。草本花粉の組成は下部のNo.4と上部のNo.1・3で異なっていた。No.4ではカヤツリグサ科が高率で産出してイネ科イネ型が比較的多く占め、水生植物のミズアオイ属やコウホネ属、オモダカ属などが検出された。上部のNo.1・3では、優占する分類群は無くカヤツリグサ科やイネ科イネ型、その他のイネ科、ヨモギ属、セリ科がいく分多く占め、水生植物のミクリ属やミズアオイ属、サジオモダカ属、オモダカ属、サンショウモなどが検出された。他にアサヤソバ属が僅かに検出された。細粒微粒炭は、No.4では $724\text{mm}^2/\text{cm}^3$ と比較的多かったが、No.1とNo.3は $159\sim 164\text{mm}^2/\text{cm}^3$ と少なかった。



図版9 多賀城跡第98次調査区の主要花粉分布図

## ② 樹種同定

樹種同定の結果、杭材はコナラ属コナラ節であった。以下に出土した炭化材の細胞構造学的記載をおこなう。



1.コナラ属コナラ節(杭材) C: 横断面, R: 放射断面, T: 接線断面, スケールは0.1mm

図版10 多賀城跡出土杭材の顕微鏡写真

コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Prinus*): 年輪最初に大きな道管が数個配列しその後急に径を減じて波状にやや角張った薄壁の小道管が配列する環孔材で道管の穿孔板は単一。放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

#### (4) 考察

多賀城跡西側の丘陵には、IX層No.4で散布範囲の狭いクリ花粉が6%を占めており、第98次調査区が陸地から45～105m離れていることからクリが分布していたのは明らかである。クリ花粉は、クリ林内では落下樹木花粉の30%以上を占めるのに対し、クリ林の林縁から約20m離れたコナラを主とする落葉広葉樹林内で5%以下(吉川2011)、1年間の落下花粉量はクリ林内で5000粒/cm<sup>2</sup>/yr以上であるのに対し、樹冠縁から約20m離れると約300～600粒/cm<sup>2</sup>/yrになり、クリ花粉の散布範囲は狭く林縁から約20m以内にほとんどが落下している(吉川2018)。分析地点が陸地から西側に45m以上離れ、加えて出現率6%がいく分高いことや材木堀がほぼクリ材が利用されているため、クリを多く含む林が周辺に分布していたと考えられる。また、樹木花粉の比率が22～32%と低く、多賀城跡南側の鴻ノ池地区でも樹木比率が低いことから(吉田・鈴木2013)、丘陵の植生は疎林や小規模の森林であったとも考えられるが、クリなどの虫媒花は散布範囲が狭いため仮にこれら樹種が多く生えていても分析地点が陸地から離れているため樹木比率は低くなる。一方で、鴻池地区の1250 cal BC～700 cal ADでは花粉化石群はコナラ属コナラ亜属とクマシデ属が優勢でブナ型やニレ属一ケヤキ属、モミ属などからなり、第1期(724 AD～8世紀中頃)の護岸・土留め施設から出土した樹種がコナラ属コナラ節とクリが多くモミやケヤキ、ブナなど多種の樹種が出土し調和的である(吉田・鈴木2013)。多種の木材が出土している状況からは周辺の樹木が利用された可能性が高く、コナラ属コナラ節やブナなど多くの分類群は周辺に分布していたと考えられる。したがって、周辺の丘陵の植生は、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属やブナ、ケヤキ、サワグルミ属、クリ、クマシデ属一アサダ属、キハダ属など、針葉樹のモミ、スギ、マツ属複雑管束亜属、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属などの植物相からなり、クリを多く混生していたと推定される。

8世紀前から10世紀頃における樹木花粉の組成に大きな変化は認められないが、クリの出現率が8世紀以前の6%から9世紀後半～10世紀代には1.4～2%に低下している。9世紀前半から10世紀前半頃と推定される多賀城外郭西辺を区画する材木堀にクリ材が多用されており、クリ花粉の出現率の減少がクリ材の利用と関係している可能性がある。

低地では、各試料からイネ科イネ型が比較的多く産出し、抽水植物のサジモダカ属やオモダカ属などや浮水植物のサンショウモなどの水生植物が検出されたことから、周辺で水田耕作が行われていたと考えられる。また、セリ科やイヌシデ属は出現率がいく分高く、多種の水生植物が検出されているため湿地などに分布するセリやミソソバなどであった可能性がある。他に栽培植物としてはアサとソバ属が僅かに検出されており、調査区が陸地から45m以上離れているため周辺の陸地で栽培されていた可能性が推定される。また、IX層No.4には比較的多くの細粒微炭粒が含まれており、区画施設構築前から丘陵の緑では植物燃焼を伴う生業が行われていた。

引用文献

- 吉田明弘・鈴木三男 2013「宮城県多賀城跡の高精度植生復元からみた古代の森林伐採と地形形成への影響」『季刊地理学』64：pp155-172  
 吉川昌伸 2011「クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況」『植生史研究』18：pp65-76  
 吉川昌伸 2018「花粉散布距離の推定からわかったこと」『季刊考古学』145：pp36-39  
 吉川昌伸・工藤雄一郎 2014「アサ花粉の同定とその散布」『国立歴史民俗博物館研究報告』187：pp441-456



図版11 多賀城跡第98次調査区から産出した花粉化石

- 1: ブナ, No.4, AFR.MY3583 2-3: ハンノキ属ハンノキ亜属, No.4, AFR.MY3580 4: アサ, No.1, AFR.MY3586 5-6: オモダカ属, No.4, AFR.MY3584 7-8: サジオモダカ属, No.4, AFR.MY3577 9-10: セリ科, No.3, AFR.MY3587 11: チョウジタデ属, No.4, AFR.MY3585 12: コウホネ属, No.4, AFR.MY3578 13: イネ科イネ型, No.4, AFR.MY3582 14: ミズアオイ属, No.4, AFR.MY3579  
 スケール=10 μ m

### Ⅲ. 第99次調査

#### 1. 調査の目的と経過

##### (1) 目的

第99次調査は、前年度に引き続き政庁北側の調査資料の蓄積を目的として、政庁地区北方を調査対象とした(第2表、図版1・12～14)。これまでに、第19・31・32・76・94・95・96次で調査を行っており、丘陵尾根部と丘陵斜面ないし沢状地形の範囲を調査対象としている(図版12・13)。

政庁北辺築地塀北側の丘陵尾根上では、第19・31・32・76次調査において、大型の掘立柱建物4棟が「コ」字形に配置された「政庁北方建物」(『補遺編』)と竪穴建物2棟(SI2806・2813)を検出した。政庁北方建物は、第IV期のもので、政庁と密接な関連を持つ施設であり、地形上の制約によって政庁中軸線より西寄りに位置している(『本文編』)。また、SI2806は第III期の中でも前半段階とみられることから、第II期末の火災後の一時的な施設と推定した(『年報2004』・『補遺編』)。

政庁より北西側に続く丘陵尾根では、第94・95次調査で大型の掘立柱建物2棟(SB3415・3450)を検出し(『年報2020・2021』)、第96次調査では、竪穴建物2棟(SI3460・3464)、掘立柱建物(SB3465)の一部などを検出した(『年報2022』)。SB3415は桁行6間、梁行3間の北・東に廂が付く南北棟で、年代は第III期以降の9世紀中葉から後半頃と推定した。西側柱列は、政庁西辺築地塀の西裾延長線上に柱筋を揃えて位置しており、計画的に配置された建物と考えられる。SB3450は桁行6間、梁行2間の東西棟で、方向は東で北にやや偏り、等高線に平行する。年代は第III期以降の9世紀代と推定した。SB3465には切土(SX3466)と整地層(SX3467)が伴い、SX3466の埋土・堆積土には鍛冶関連遺物・漆紙文書・漆付着土器が含まれており、調査区近辺に鍛冶・漆工房が存在していた可能性が高い。年代はSB3465、SX3466・3467が第III期、SI3460・3464は第III期以降である。

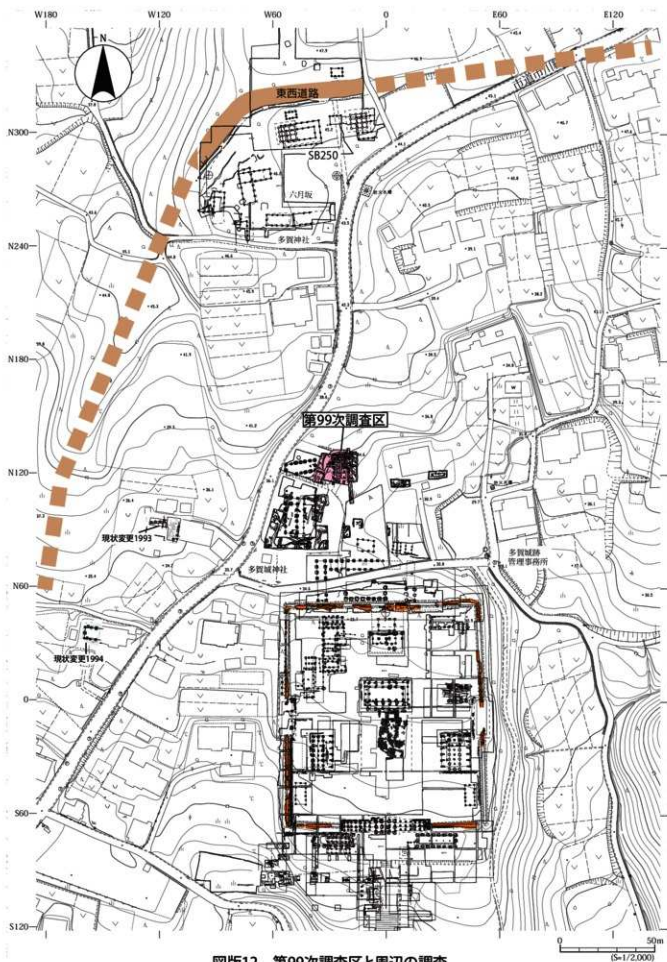
政庁の北～北東側にかけて広がる丘陵斜面および沢状地形内部では、第31・32次調査において、沢状地形の南側の斜面で第III期以降の掘立柱建物4棟(SB1017・1022・1023・1026)(『年報1977』)、沢状地形内で第III期の竪穴建物3棟(SI1024・1063・1065)(『年報1978』)、第94次調査B区において、沢状地形の北側の斜面で掘立柱建物を構成する可能性のある柱穴や竪穴建物1棟(SI3439)を検出した(『年報2020』)。

この他に、平成5・6年度には市道市川線(塩竈街道)西側で特別史跡の現状変更に伴う発掘調査を行い、調査面積は狭いながらも複数の掘立柱建物を検出した(『年報1993・1994』)(図版12)。

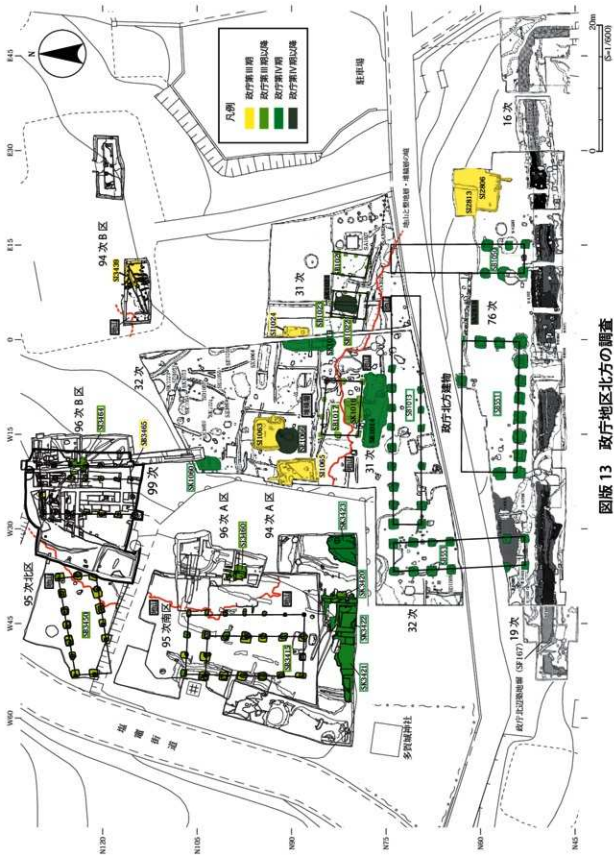
これまでの調査で、政庁地区北方では、①第III期以降の遺構が分布すること、②丘陵尾根上に大型の掘立柱建物群である政庁北方建物や竪穴建物、丘陵斜面や沢状地形に小型の掘立柱建物や竪穴建物が分布すること、さらに、③政庁北方建物以北の丘陵尾根上にも計画的に配置された大型の建物が分布することが明らかとなった。そこで、第99次調査では、第96次調査で検出したSB3465の規模と構造を把握することを主な目的とした。

##### (2) 調査の経過と方法

〔調査区の設定と表土除去〕対象地は多賀城跡政庁北側隣接地に所在し、政庁正殿の測量原点から北へ114～132m、西へ17～39mの範囲に位置する(図版12)。第95次調査北区と第96次調査B区



図版12 第99次調査区と周辺の調査



図版 13 政府地区北方の調査

の間に両者を一部重複する形で調査区を設定した（図版13）。

調査は7月3・4日に重機による表土除去を行った（図版15）。調査区東半では第96次調査B区の埋戻し土を確認した後、人力でこれを除去し、SB3465掘立柱建物とSX3466切土を再検出した。

【調査】7月13日から人力による遺構検出に着手した。調査区西半部では黒褐色層上面で、第96次調査A区から続くSD3455溝を検出し、一部掘り下げ等を行った。

東半部の調査区北端では、地山面でSX3466が西に続き、W29付近で南に屈曲することが判明し、切土の範囲が確定した。掘立柱建物は切土内に取まると考えたことから、第96次調査で明らかになった柱間から、東西3間の南北棟である可能性が高いと判断した。そこで切土西辺より東側の柱穴想定位置に、南北方向に長い土層観察用畔を2本設定しながら掘り下げ、掘立柱建物の柱穴の検出を行った。切土北半部では、黒褐色の堆積層を掘り下げながら遺構確認を行い、切土の底面付近で第96次SX3466の4層ないし7層（ともに廃棄層）を検出し、ここで掘削を一旦停止した。第96次調査の見解では、廃棄層は切土の北側から廃棄されたものと判断していたため、当初は小グリッドを設定せず、掘り下げをおこなった。しかし、第96次調査を上回る量の鉄滓が出土したこと、鍛冶炉を確認したこと、鍛造剥片等の微細遺物を回収するため、急速長辺90～100cm、短辺70～100cmの小グリッドを設定し、土壌の全量回収を行いながら、部分的に地山面まで掘り下げて柱穴の検出を行った。

第96次調査で検出していた東側1間分の柱列については、第96次調査B区の第VIa層ないしSX3467整地層上面検出であることから、その柱列南側延長部分は、第VIa層上面ないしSX3467上面まで掘り下げ、柱穴を南側に向かって順次検出していった。

その結果、柱穴を15個検出し、第96次調査で検出した柱穴と合わせて23個の柱穴を確認し、SB3465が東に廂がつく南北6間、東西3間の南北棟であること判明した。

【撤収・埋め戻し】10月31日から、図面の作成と並行して遺構の養生と器材の撤収を行い、11月27・28日に埋め戻して、野外調査を終了した。

【調査成果の検討・公開等】調査期間中の10月4・5日には、多賀城跡調査研究委員会による現場視察を受けるとともに調査内容を報告し、その審議を経て成果に関する指導と承認を受けた。それを踏まえて12日に調査成果を報道機関に公開し、14日に現地説明会を開催した。参加者は約80人である。また、9月11～21日には東北大学考古学実習の一環として、学生6名が調査に参加した。

調査後の令和5年12月10日には、宮城県考古学会主催の「令和5年度宮城県遺跡調査成果発表会」で成果を報告するとともに、主な出土遺物を展示し、調査に関する助言を受けた。令和6年2月には『第50回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』で調査概要を紙上報告した。

【調査記録の作成方法】平面図・断面図は遺り方測量により、縮尺1/20で図面用紙に手書きで作成した。また、図面作成や遺物取上げに使用するため、政庁内に埋設された「内城」と「内城W」を基に、トータルステーション（ソキア製CX-107F）を用いて調査区内に3m四方のグリッドを設定した。

遺構の写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon製D7000：1,690万画素）を用いた。画像の保存形式はRAWとJPEGで、撮影時には色調補正のためグレーカードを使用した。空中写真撮影にはドローン（DJI製AIR2S：2,000万画素）を使用し、8月1日、9月25日に全景、10月19日に掘立柱建物部分について撮影を行った。空中写真の保存形式はJPEGである。

〔遺構・遺物の整理〕 第98次調査と並行して同じ方法で行なったため、ここでは省略する。

〔遺構・遺物の登録〕 第99次調査で新たに検出した遺構については、遺構登録台帳の3481～3503番に登録した（第7表）。遺物は整理用平箱で50箱分出土しており、水洗、接合の後に種類・器種・数量・特徴等を調書としてまとめ、遺構・層の年代を示す遺物や特徴的な遺物111点を抽出して登録番号を付した。登録番号は、土器・陶磁器・瓦・土製品・漆紙・石製品・石器についてはR1～R111を使用し、施釉陶磁器については『施釉陶磁器』の登録方法にならない、R番号に加えて灰釉陶器に99-1・2、青磁・白磁にNo.340～346を付した。

撮影した写真についてはデジタル写真台帳に登録して管理している。登録番号は、遺構写真がZ10336～10431、空中写真がZ10432～10440、遺物写真がZ10467～10551、その他の写真（調査の様子など）がZ10441～10453である。本書に掲載した遺構写真については、登録番号を掲載写真の右下に記載し、遺物写真については掲載写真との対応関係を第6表に示した。

図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号										
30	1	Z10475	32	7右	Z10468	5a左	Z10491	1上	Z10503	36	1	Z10517	6	Z10529	12左	Z10541							
	2	Z10476		5左	Z10469		5a右		Z10492		1下	Z10504		2		Z10518	7	Z10530	12右	Z10542			
	3左	Z10477		5右	Z10470		5b左		Z10493		2	Z10505		1		Z10519	8a左	Z10531	13左	Z10543			
	3右	Z10478		6左	Z10471		5b右		Z10494		3上	Z10506		2上		Z10520	8a右	Z10532	13右	Z10544			
31	1左	Z10479	33	6右	Z10472	5c左	Z10495	3左	Z10507	2左	Z10521	8b左	Z10533	14	Z10545								
	1右	Z10480		7左	Z10473		5c右		Z10496		3右		Z10508		2右	Z10522	8b右	Z10534	15左	Z10546			
	1底均	Z10481		7右	Z10474		34		6左		Z10497		35		4左	Z10509	3左	Z10523	37	9左	Z10535	15右	Z10547
	2上	Z10482		1	Z10486				6右		Z10498				4右	Z10510	3右	Z10524		9右	Z10536	16左	Z10548
2下	Z10483	2上	Z10487	7左	Z10499	5左		Z10511	4左	Z10525	10左	Z10537		16右	Z10549								
3上	Z10484	34	2下	Z10488	7右	Z10500		5右	Z10512	4右	Z10526	10右		Z10538	17	Z10550							
3下	Z10485		3	Z10489	8左	Z10501	6左	Z10513	5左	Z10527	11左	Z10539											
32	7左	Z10467	4	Z10490	8右	Z10502	6右	Z10514	5右	Z10528	11右	Z10540											

第6表 第99次調査遺物写真の登録番号一覧



1. 政庁と第99次調査区（南から）[Z10432]



2. 政庁と第99次調査区（北から）[Z10434]

図版14 第99次調査区遠景写真





1. 調査地点近景（南西から） [Z10441]



2. 重機による表土除去（北から） [Z10442]



3. 調査風景（南西から） [Z10444]



4. 考古学実習（遺構検出） [Z10445]



5. 考古学実習（遺構精査） [Z10446]



6. 多賀城跡調査研究委員会の現地指導 [Z10447]



7. 現地説明会 [Z10448]



8. 調査区の埋め戻し（南東から） [Z10452]

図版 15 第99次調査・公開の様子

番号	記号	種類	次数	本文	平面図	断面図	番号	記号	種類	次数	本文	平面図	断面図
3447	SK	土坑	95・99	-	図版17	-	3485	SD	溝	99	34p	図版23	図版24
3455	SD	溝	95・96・99	42p	図版17	図版20・21・24	3486	SK	土坑	99	40p	図版23	図版24
3464	SI	竪立建物	96・99	-	図版19	-	3487	SK	土坑	99	40p	図版23	図版24
3465	SB	竪立柱建物	96・99	32p	図版19	図版20～22	3488	SK	土坑	99	40p	図版23	図版20・24
3466	SX	切土	96・99	32p	図版19	図版20・21	3489	SK	土坑	99	41p	図版23	図版24
3467	SX	惣地割	96・99	32p	図版19	図版20・21	3490	SD	溝	99	41p	図版23	図版24
3468	SD	溝	96・99	-	図版19	-	3491	SD	溝	99	41p	図版23	-
3469	SD	溝	96・99	41p	図版19・23	-	3492	SD	溝	99	41p	図版23	-
3470	SD	溝	96・99	-	図版19	-	3493	SD	溝	99	41p	図版23	図版24
3471	SK	土坑	96・99	-	図版19	-	3494	SD	溝	99	41p	図版23	図版24
3472	SK	土坑	96・99	42p	図版19	-	3495	SX	竪	99	40p	図版23	図版24
3473	SD	溝	96・99	-	図版19	-	3496	SX	竪	99	40p	図版23	-
3474	SD	溝	96・99	-	図版19	-	3497	SX	竪	99	40p	図版23	図版24
3475	SD	溝	96・99	-	図版19	-	3498	SX	竪	99	40p	図版23	図版24
3477	SD	溝	96・99	-	図版19	-	3499	SX	竪	99	40p	図版23	図版24
3481	SD	溝	99	42p	図版19	図版20	3500	SX	竪穴遺構	99	35p	図版19・23	図版20・21・24
3482	SD	溝	99	50p	図版19	-	3501	SD	溝	99	34p	図版19・23	図版20
3483	SX	竪	99	42p	図版19	-	3502	SX	竪	99	34p	図版23	図版24
3484	SX	竪	99	31p	図版19	図版20	3503	SD	溝	99	42p	図版19・23	図版20

第7表 第99次調査 検出遺構・登録遺構番号一覧



1. 全景 (上が北)

[Z10436]

図版16 第99次調査区全景

## 2. 調査成果

### (1) 地形と調査区

政庁地区北方の地形は、外郭東門付近から西に延び、六月坂地区で南方向に分岐して政庁と城前官衙へ至る丘陵尾根に対し、政庁と作貫地区を分かち深い谷が、政庁北側で東から西方向へ陥入する沢状地形となる（図版1・12・13）。第99次調査区は、政庁北側に入る沢状地形の北側に位置し、現況は北西から南東へ下る緩斜面で、現地表面の標高は33.5～36.3mである。第95次調査北区と第96次調査B区に一部重複する形で、東西約22m、南北18mの範囲を調査した。

### (2) 層序

基本層序は第Ⅰ～Ⅹ層に分け、第95・96次調査との対応関係を第8表に示した。各層の説明は第95・96次（『年報2021・2022』）に準じ、以下には今年度観察・変更した点を中心に記述する。

- 第Ⅰ層**：現代の表土・盛土。厚さは調査区北西隅で約70cmである。北西部では地山を直接覆う。
- 第Ⅱ層**：黄褐色ないし暗褐色を基調とするシルト層で、第Ⅲ層上の遺構面を覆う堆積層である。これまでの出土遺物から近世以降と推定している。
- 第Ⅲ層**：黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト層で、地山粒と炭化物粒をわずかに、須恵系土器小片を多く含む。調査区北端以外のほぼ全域に分布し、厚さは最大45cmである。上面でSD3455溝を検出した。
- 第Ⅳ層**：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルト層で、地山ブロックを多く含む。第95次調査ではⅣa・bに細分し、今回の調査区では西半部に第Ⅳa層が分布することを確認した。
- 第Ⅴ層**：灰黄褐色（10YR4/2）シルト層で、地山粒と炭化物粒をわずかに含む。調査区内に広く分布し、厚さは最大40cmである。
- 第Ⅵ層**：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト層で、地山粒と炭化物粒をわずかに含む。調査区南東部の断面（図版19 - E断面）で部分的に確認し、下層に粘土質の強い部分があり、a・b層に細分した。上面でSD3481溝を検出した。
- 第Ⅶ層**：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト層で、地山ブロックをやや多く含み、酸化鉄がやや多く混ざる。第96次B区南端に分布し、今回の調査区では確認していない。
- 第Ⅷ層**：第Ⅵ・Ⅶ層下に分布する褐色でやや硬くしまった堆積層である。第96次調査ではB区中央部（N114～124付近）で検出した第Ⅵa層と、B区南端部（N111以南）で検出した第Ⅵb層に細分したが、今回の調査では第Ⅵa層をSX3467整地層の2層とし、第Ⅵb層のみを第Ⅷ層とする見解に改めた。褐色（10YR4/4）粘土質シルトで、地山粒・炭化物を含み、酸化鉄が多く混ざる。

第95次	第99次	第96次B区	備考
I	I	I	表土
II	II		
III	III	II	
IVa	IV		
V	V	III	
	VI	IV	
	VII	V	
	SX3467・2層	Ⅵa	新旧は不明
Ⅵb	VIII	Ⅵb	
VII	IX		地山漸移層
VIII	X	VII	地山

第8表 第99次と第95・96次の層序の対応



図版 17 遺構配置図

第IX層：褐色ないし黄褐色を基調とするシルト層で、風化した地山を主体とする。

第X層：主に明黄褐色(10YR6/7)の岩盤からなる地山。

### (3) 発見遺構と出土遺物

新たに検出した遺構は、竪穴遺構1基(SX3500)、土坑4基(SK3486～3489)、溝10条(SD3481・3482・3485・3490～3494・3501・3503)、炉8基(SX3483・3484・3495～3499・3502)で、このほかに第95・96次で検出していたSI3464竪穴建物、SB3465掘立柱建物、SX3466切土、SX3467整地層、SK3447・3471・3472土坑、SD3455・3468～3470・3473～3475・3477溝の再検出および延長の検出等を行った(図版17・19・23、第7表)。

出土遺物は、土器(土師器、須恵器、須恵系土器)、施釉陶磁器(青磁、白磁、灰釉陶器)、瓦(軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦)、土製品(土玉、羽口)、漆紙、石製品(紡錘車、砥石、碁石)、石器(石鏃)、鉄製品、鉄滓、近世以降の陶器がある。このうち鉄製品は、錆落とし終了後に報告する予定である。また、微細な鍛冶関連遺物の検出を目的として土壌回収を行っており、水洗選別終了後に改めて報告する予定である。ここでは、野外調査時に現場で回収し、洗浄済みの遺物の概略を報告する。

第99次調査で新たに検出した遺構および延長を確認した遺構については、SB3465掘立柱建物の構築に伴うSX3466切土とSX3467整地層による造成と、その前後で大きく3つの面に分けて捉えられる。以下、面ごとに報告する。

検出面	該当遺構
A面：SX3466切土とSX3467整地層よりも古い面	SX3484炉
B面：SX3466切土とSX3467整地層の面	SB3465掘立柱建物、SX3466切土、SX3467整地層、SX3502炉、SD3485・3501溝
C面：SX3500竪穴遺構の面(鍛冶工房)	SX3500竪穴遺構、SX3495～3499炉、SK3486～3489土坑、SD3469・3490～3494・3503溝
その他の遺構	SX3483炉、SK3472土坑、SD3455・3481・3482溝

第9表 第99次調査の検出面と遺構

#### ① A面の遺構

SB3465掘立柱建物に伴うSX3466切土・SX3467整地層の造成が行われる前の遺構である。SX3467整地層の下でSX3484炉を検出した。

**【SX3484炉】**(平面図：図版19、断面図：図版20)

調査区南半のN120・W25付近に位置する。確認面は第IX層で、SX3467整地層に覆われる。第IX層が被熱により赤変・硬化しており、規模は東西26cm、南北27cmで、楕円形と推定される。鉄滓等が認められないことから、地床炉と判断した。

## ② B面の遺構

SB3465掘立柱建物の構築に伴い、SX3466切土・SX3467整地層の造成が行われる。SX3466底面ではSX3502戸、SD3485・3501溝を検出し、SX3467上面でSX3483戸を検出した。

【SX3466切土】（平面図：図版19、断面図：図版20・21）

【検出】調査区北半のN123～131・W20～29付近で検出した。確認面は第X層で、SB3465掘立柱建物の構築にあたり、標高の高い北半部で斜面を切土した遺構で、南半部のSX3467整地層と合わせて平坦面を造成したとみられる。西壁と北壁の一部を検出した。

【重複】SX3500竪穴遺構とそれに伴うC面の各遺構、SD3455溝と重複し、これより古い。

【規模】南北約6.1m、東西約10.3mにわたって検出し、壁の高さは最大36cmである。地山第X層を底面とし、W27付近の南北方向でみると、N129では標高34.5m、N123では標高34.1mで、北から南へわずかに傾斜する。東西方向はどちらもほぼ平坦である。

【堆積土】西辺裾部で1層確認し、自然堆積である。

【SX3467整地層】（平面図：図版19、断面図：図版20・21）

【検出】調査区中央から南東部のN114～125・W18～28の範囲で検出した。確認面は第IX層で、SB3465掘立柱建物の構築にあたり、標高の低い南半部を盛土整地した遺構で、北半部のSX3466切土と合わせて平坦面を造成したとみられる。SB3465の柱穴検出のために掘り下げた範囲で検出し、部分的に断ち割りを行った。

【重複】SX3484戸と重複し、これより新しい。SI3464竪穴建物、SX3500竪穴遺構とそれに伴うC面の各遺構、SX3483戸、SD3481・3482溝と重複し、これより古い。

【規模】検出範囲は東西14.0m、南北11.3mで、東・西・南の範囲は未検出であるが、西端は断面で一部確認している（図版21-K断面）。厚さは最大38cmである。

【埋土】2層確認し、ともに黄褐色基調で地山ブロックないし地山粒を含む。N118・W25付近では瓦が多く出土した。

【出土遺物】2層からは土師器の坏、須恵器の甕・壺または瓶、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、平瓦ⅡB類にはaタイプ1・2があり、aタイプ1には「矢」Aの刻印がみられる（図版31-1）。また、平瓦ⅡB類には焼瓦を含む。

1層からは土師器の甕、須恵器の坏・甕、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。軒平瓦には偏行唐草文621（2）・単弧文640（3）があり、2の凸面には赤色顔料の付着、3の凹面には「物」Aの刻印がみられる。平瓦ⅡB類にはaタイプ2がある。

【SB3465掘立柱建物】（平面図：図版19、断面図：図版20～22）

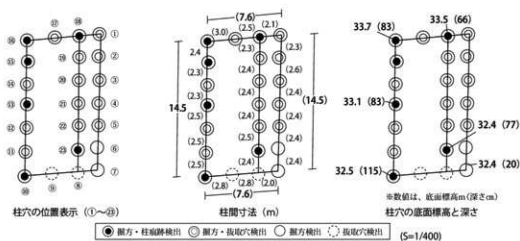
【検出】N114～131・W19～28の範囲で、第96次調査で確認したものを含めて23個の柱穴を検出した。東側に廂がつく南北6間、東西3間の南北棟である。確認面は、北半部がSX3466切土底面の第X層、南半部がSX3467整地層の1層または2層である。ここでは、北東隅の柱穴を基準とし、①～③の柱穴番号を付した（図版18）。第96次では柱穴⑧、今回の調査では柱穴⑦・⑨・⑩・⑬・⑳

の東半部を底面まで半載して調査した。

〔重複〕 SI3464竪穴建物、SX3500竪穴遺構とそれに伴うC面の各遺構、SD3455・3481・3482溝と重複し、これより古い。

〔規模〕 桁行は西側柱列で総長14.5m、柱間は北から2.4 - (2.3) - (2.3) - (2.5) - (2.5) - (2.5)m、梁行は北妻で総長約7.6m、柱間は西から(3.0) - (2.5)mで、廂の出は(2.1)mである。

〔方向〕 西側柱列は、南北基準線より北で東に2°偏する。北妻は、東西基準線より東で北へ4°偏する。



図版 18 SB3465 掘立柱建物 模式図

柱穴	検出面 標高m	底面 標高m	掘方cm		柱扱 取・切取穴	備考
			南北	東西		
①	34.3	-	707	60	●	採取穴が大きく、掘方南半部未検出
②	34.0	-	82	73	●	
③	33.4	-	50	59	○	SI3464竪穴建物床下で検出
④	33.2	-	62 ~	89 ~	○	SI3464竪穴建物床下で一部検出
⑤	33.1	-	68	44	○	SX3467整地層上面で検出
⑥	33.0	-	49	44 ~	-	西半部未検出、SX3467整地層上面で検出
⑦	32.6	32.4	48	-	-	断面で確認、深さ20cm
⑧	33.0	-	-	-	○	掘方は採取穴に填される、SX3467整地層上面で検出
⑨	33.3	32.7	-	-	○	掘方は採取穴に填される、東半部はSX3467整地層上面で検出
⑩	33.6	32.5	101	92	○	SX3467整地層上面で検出、東半部半載、深さ115cm
⑪	33.8	-	98	87	○	SX3467整地層上面で検出
⑫	33.9	-	104	82	○	SX3467整地層上面で検出
⑬	34.1	33.1	102	96	○	南西部未検出、東半部半載、深さ83cm、柱跡径24cm
⑭	34.2	-	88	66	●	北東と南東部未検出
⑮	34.3	-	54 ~	36 ~	●	一部検出
⑯	34.5	33.7	36 ~	21 ~	●	南と東半部未検出、柱跡径西半載、深さ83cm
⑰	34.4	-	84 ~	84	●	南端部未検出
⑱	34.2	33.5	89	30 ~	●	西半部未検出、東半部半載、深さ66cm、柱跡径24cm
⑲	34.1	-	82	73	●	
⑳	33.9	-	97	80	●	南半部はSX3467整地層上面で検出
㉑	33.6	-	72	87	○	SX3467整地層上面で検出
㉒	33.4	-	86	73	○	SX3467整地層上面で検出
㉓	33.2	32.4	97	51	○	SX3467整地層上面で検出、東半部半載、深さ77cm、柱跡径22cm

塗り：第99次調査検出 ○は採取穴・切取穴検出 ○は地山ブロックを多く含む (SX3500・9層対応) ●は炭を多く含む (SX3500・10層対応)

第10表 SB3465掘立柱建物柱穴一覧

桁行と梁行の柱列が直交せず、建物全体の平面形は平行四辺形を呈する。

〔柱穴〕柱穴検出面は、北西部が高く、南東部が低い傾斜面となっている。標高値は、最も高い⑥が34.5m、最も低い南東隅の⑦が32.6mで、両者の間には約1.9mの差があるが、建物の南東部分は上部が第Ⅵ層などにより削られており、本来の高低差はそれより小さかったと考えられる。

身舎の柱穴は、掘方平面形が長辺（長径）82～104cm、短辺（短径）51～96cmの隅丸方形、楕円形で、②以外は南北方向が東西方向より長い。深さを確認したものでは、柱穴⑥が検出面から115cm、③が83cm、⑩が83cm、⑪が66cm、⑫が77cmである。柱穴⑬⑭⑮で、直径22～24cm程度の円形の柱痕跡を確認した。

廂の柱穴は、掘方平面形が長辺（長径）48～89cm、短辺（短径）44～73cmの隅丸方形、楕円形である。深さは柱穴⑦で検出面から20cmで、上部は大きく削られている。

掘方埋土は、検出面では地山ブロックを多く含む黄褐色・褐色シルトを基調とする。廂の柱穴⑥⑦を除く21個で、抜取穴または切取穴を検出した。これらのうち9個（①・②・⑬～⑰）の抜取穴・切取穴には炭を多く含む層が堆積しており、後述するSX3500の埋土10層と一連の堆積である。また、4個（⑤・⑩～⑫）の抜取穴・切取穴には、地山ブロックを極めて多く含む層が堆積しており、SX3500の埋土9層と一連の堆積で、窪地を埋め戻している。

〔出土遺物〕掘方埋土から、平瓦ⅡB類aタイプ1の焼瓦（図版30-3）が出土した。柱抜取穴からは、土師器の環・甕、須恵器の環（1・2）・甕・壺または瓶、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類、鉄滓が出土した。平瓦ⅡB類にはaタイプ2がある。鉄滓は11g出土している。

#### 〔SX3502炉〕（平面図：図版23、断面図：図版24）

調査区北半のN126・W25付近に位置する。確認面はSX3466切土底面の第X層で、SX3500竪穴遺構の9層に覆われる。規模は長さ72cm、幅17cmの長楕円形で、深さは7cmである。北壁は東西10cmにわたって被熱し、赤褐色（5YR3/2）に酸化している。埋土は1層確認し、地山粒・炭化物粒を多量、焼土粒を微量含む。鉄滓が12g出土しているため鍛冶炉の可能性があるが、被熱の度合いが弱い点から断定しがたい。

#### 〔SD3485溝〕（平面図：図版23、断面図：図版24）

調査区中央のN124～127・W28に位置する南北方向の溝である。確認面はSX3466切土底面の第X層で、西辺に沿って設けられる。南北両端は未検出で、規模は検出長2.4m、幅20cm、深さ5cmである。方向は南北基準線にほぼ沿う。堆積土は2層確認した。南半部のN125付近は、SX3466の11層が自然堆積し、北半部のN127付近はSX3500の10層で埋め戻されている。

#### 〔SD3501溝〕（平面図：図版19・23、断面図：図版20）

調査区北半のN129・W25～27の範囲で部分的に検出した。確認面はSX3466切土底面の第X層で、東西方向の溝状掘方に壁材痕が認められる。規模は長さ2.0m以上、幅20cm、深さ22cmで、西端はSB3465掘立柱建物の柱穴⑩切取穴に切られる。堆積土・埋土は2層確認し、1層は黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトの壁材痕、2層は地山ブロックを含む掘方埋土である。



### ③ C面の遺構

SB3465掘立柱建物の柱を抜き取った後、SX3466切土北辺を拡張し、底面を埋め戻す形でSX3500竪穴遺構がつくられる。SX3500床面および掘方でSX3495～3499炉、SK3486～3489土坑、SD3469・3490～3494・3503溝を検出した。これらは鍛冶炉とそれに伴う土坑・溝で、SX3500は鍛冶工房と考えられる。

【SX3500竪穴遺構】（平面図：図版19・23、断面図：図版20・21・24）

【検出】調査区北半のN123～131・W18～29付近で検出した。確認面は第X層で、SB3465掘立柱建物の柱の抜き取り・切取りを行った後、SX3466切土の北辺を拡張し、底面を埋め戻して床面を造成した遺構である。床面でSX3495～3499炉などを検出しており、鍛冶工房と考えられる。

【重複】SB3465、SX3466などB面の遺構と重複し、これらより新しい。SD3455・3473・3474溝と重複し、これらより古い。

【規模】東西方向は10.6m、南北方向は南端が明確でないが、鍛冶遺構・遺物の分布から、北辺から約7.0mの範囲と推定される。北辺は、W27付近ではSX3466の北辺を北側に約60cm拡張し、W25以東では、SX3466の北辺とほぼ同じ位置とみられ、東端はW18付近で南へ屈曲する。北壁の立ち上がりは、N130・W22付近で最大60cmを測る。西辺は、N128付近においてSX3466西辺を西側に15cmほど拡張していることを確認した（図版21-G断面）。N124～125付近の西辺裾部には、SX3466の11層が堆積し、SX3500の機能時にはほぼ埋まっている（図版21-J・K断面）。

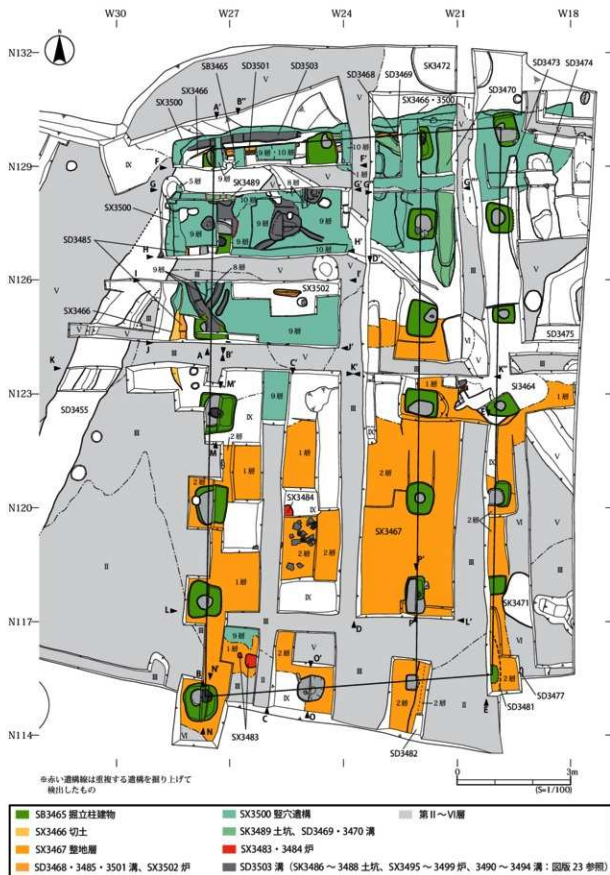
【方向】北辺でみると、東西基準線より東で北へ約5°偏する。

【埋土・堆積土】10層確認した。1・7～10層が人為的な埋戻し土・整地層・廃滓層で、2～6層が自然堆積である。10層は整地層で、N124～北辺裾部、W24～西辺裾部の範囲で検出した。規模は東西約4.5m、南北約5.5mで、SD3469・3470・3485溝、SK3489土坑、SB3465の抜き取り・切取穴内（第10表）にも認められる。9層は整地層でN116～北辺裾部、W24～西辺裾部の範囲で検出した。規模は東西約4.5m、南北約13.5mで、SB3465の抜き取り・切取穴内（第10表）にも認められる。8層は鉄滓を極めて多く含む廃滓層で、N123～129・W24～西辺裾部にかけて分布するほか、SD3492～3494溝内にも分布する。7層は図版20-G断面でのみ確認した整地層である。2～6層が切土の東・西・北辺裾部に自然堆積した後に、最終的に地山粒を多く含む1層で埋め戻されている。

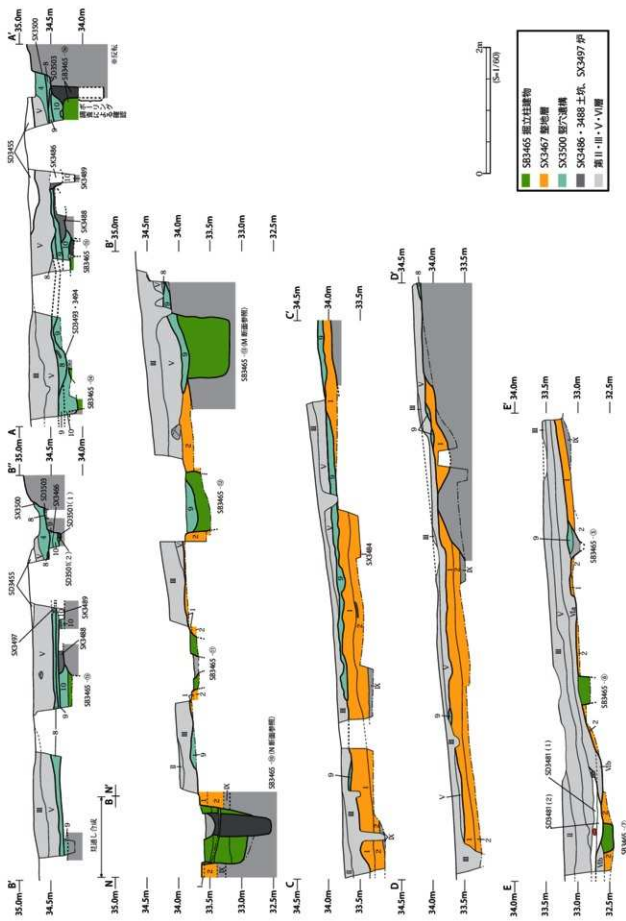
【出土遺物】10層から土師器の環・甕、須恵器の環（図版32-1～4）・蓋・稜塊・甕・壺または瓶、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類（5・6）、輪の羽口（7）、鉄滓、漆紙（図版34-5a～c）、石製紡錘車（図版34-8）が出土した。平瓦ⅡB類には、aタイプ3（図版32-6）とbタイプがみられる。鉄滓は2.093g出土しており、椀形滓を含む。漆紙は赤外線カメラで観察したが、墨痕等は確認されない。

9層からは土師器の環・甕、須恵器の環（図版32-8・9）、須恵系土器の環または皿、丸瓦、平瓦ⅠA類・ⅡB類、羽口、鉄滓が出土した。平瓦ⅡB類には、aタイプ3がみられる。鉄滓は1.631g出土しており、椀形滓を含む。

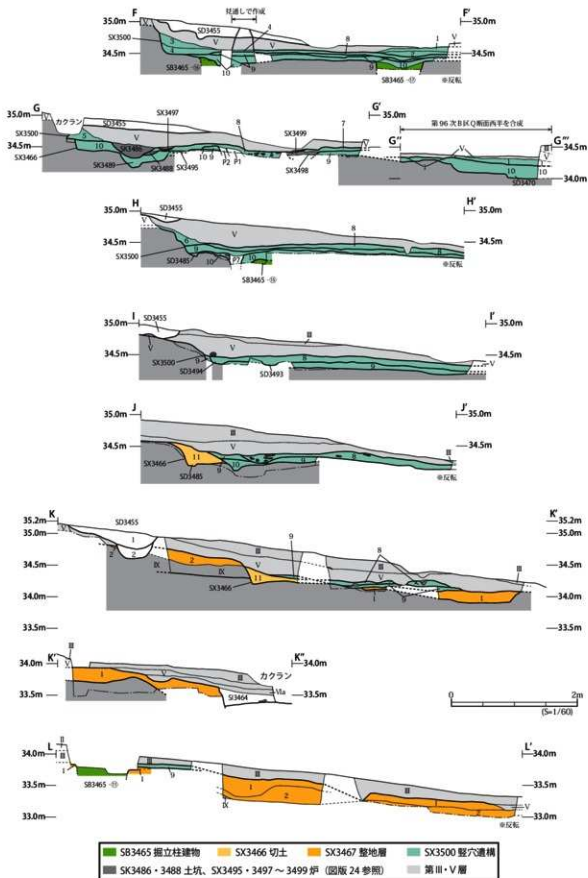
8層からは土師器の環・甕、須恵器の環・蓋・稜塊・甕・壺・瓶、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅠC・ⅡB類、輪の羽口（図版33-5～7）、土玉、鉄滓が出土した。軒平瓦は単瓦文640（1）である。平瓦ⅡB類にはaタイプ1（2）、aタイプ3（3）、aタイプ2もしくはbタイプ（4）があり、



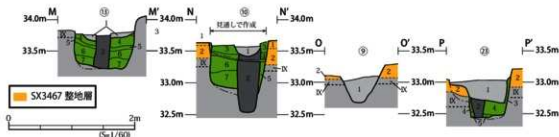
図版19 第99次調査区東半 平面図



断面図  
 3500 階地層・3467 獨立柱建物、SB3466 切土・3468 壓地層・3500 壓穴遺構ほか



図版 21 SB3465 掘立柱建物、SX3466 切土・3467 整地層・3500 竪穴遺構ほか 断面図



図版 22 SB3465 掘立柱建物柱穴 断面図

遺構・層	土色	土質	含有物など	備考
SD3455B	1 にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	明褐色(7.5YR5/8)砂と地山粒をブロック状に含む	自然
SD3455A	2 褐色(10YR4/6)	砂質シルト	明褐色(7.5YR5/8)砂を層状に含む、地山粒を含む	自然
SX3500	1 褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒を多量、地山ブロックを少量、炭化物粒を微量含む	人為
	2 黒褐色(10YR2/3)	シルト	径1~2cmの地山ブロックを少量含む	自然
	3 褐色(10YR4/4)	シルト	径1~3cmの地山ブロックを多量含む	自然
	4 褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多量含む	自然
	5 にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	径1~2cmの地山ブロック含む	自然
	6 にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	径1~3cmの地山ブロック含む	自然
	7 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒を極多量、炭化物粒を多量、鉄滓を少量含む	整地
SX3500 SD3493 SD3494 SD3503	8 黒褐色(10YR2/2)	シルト	径1~2cmの地山ブロック・炭化材・炭化物粒・鉄滓を極多量、地山粒・焼土粒を多量含む	崩岸
SX3500	9 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	径1~5cmの地山ブロックを極多量含む、焼土粒を多量、炭化物粒・鉄滓を含む	整地
SX3500 SK3489 SD3485	10 暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を極多量、炭化材・径1~3cmの地山ブロックを多量、炭化物粒・鉄滓を少量含む	整地
SX3466 SD3485	11 暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを含む、炭化物粒わずかに含む	自然
SX3467	1 灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	径1~3cmの地山ブロックをまばらに含む	整地
	2 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒を少量含む(凹窪でしまりあり)	整地
SD3481	1 黒色(10YR2/1)	炭		自然
SD3501	2 灰黄褐色(10YR4/2)	砂質シルト	炭化物粒・土器小片を含む	自然
	1 暗褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒・炭化物を少量含む	壁方土
	2 暗褐色(10YR3/4)	シルト	径2cmの地山ブロックを多量含む	掘方土

SB3465

柱穴・層	土色	土質	含有物など	備考		
掘	⑤ 1 黒褐色(10YR3/2)	シルト	径1cmの地山ブロックをやや多く含む	掘取穴		
	⑥ 1 暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量含む(大きいものは20cm大)	掘方埋土		
	⑦ 1 暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	径1~3cmの地山ブロックを多量含む	掘方埋土		
⑨ (O断面)	1 暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	径1cmの地山ブロック・地山粒を微量含む	掘取穴		
	2 褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒を少量、径2~3cmの地山ブロック・炭化物粒を微量含む	切取穴		
	3 暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を微量、径2~3cmの地山ブロック・炭化物粒を微量含む	柱痕跡		
	4 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	径1~2cmの地山ブロックを少量、地山粒を微量、炭化物粒を極微量含む			
	5 暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を微量含む			
	6 にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	地山粒を少量含む			
	7 にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	径1~4cmの地山ブロック・地山粒を多量含む			
⑩ (M断面)	1 褐色(10YR4/4)	シルト	径1~3cmの地山ブロックを含む	掘取穴		
	2 暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	径1~5cmの地山ブロックを多量含む	掘方埋土		
	⑪ 1 暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	径1~10cmの地山ブロックをやや多く含む	掘方埋土		
	1 褐色(10YR4/6)	シルト	径1cmの地山ブロック・地山粒を多量、炭化物粒を微量含む	切取穴		
	2 黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	地山粒を微量、径2~3cmの地山ブロックを微量含む	柱痕跡		
	3 暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・炭化物粒を微量含む			
	4 暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を少量、径1cmの地山ブロックを微量、炭化物粒を微量含む			
	5 褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒を少量、炭化物粒を微量含む			
	6 暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山粒を少量、径2~3cmの地山ブロックを微量、炭化物粒を微量含む			
	⑫ (P断面)	1 暗褐色(10YR3/3)	シルト	径3cmの地山ブロック・地山粒を微量、炭化物粒を微量含む	柱痕跡	
		2 暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	径1~4cmの地山ブロック・地山粒を極多量、炭化物粒を微量含む		
		⑬ 1 褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒を極多量、径2~3cmの地山ブロックを少量、炭化物粒を微量含む		掘方埋土
		⑭ 1 褐色(10YR4/6)	シルト	径1~10cmの地山ブロックを多量含む		掘方埋土
		⑮ 1 褐色(10YR4/6)	シルト	径1~10cmの地山ブロックを多量含む		掘方埋土
1 褐色(10YR4/4)		シルト	地山粒を多量、径2~3cmの地山ブロックを少量、炭化物粒を微量含む	掘取穴		
2 暗褐色(10YR3/4)		粘土	地山粒を微量、炭化物粒を微量含む	柱痕跡		
3 暗褐色(10YR3/4)		シルト	地山粒を微量、炭化物粒を微量含む			
4 にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒を少量、地山粒を微量含む				
5 褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒を少量、地山粒を微量含む				

aタイプ1には焼瓦を含む。また、鉄滓は75.195g出土しており、椀形滓を含む。

**【SX3495・3496・3497・3498・3499炉】**（平面図：図版23、断面図：図版24）

調査区北半のN128・W25～28付近で5基の炉を検出した。確認面はSX3500竪穴遺構の7～10層で、各層を掘りくぼめて炉床としている。炉床は被熱により赤変・硬化し、一部が明青灰色に還元していること、内部に鉄滓や炭化物が多量に含まれるものがあることから、鍛冶炉と判断した。それぞれの形状・規模等は一覧表にまとめたとおりである。

遺構番号	確認面	規模・形状	重複等
SX3495	10層	東西21cm、南北4cm（南端部のみ）	SX3495→SX3497
SX3496	9層	長さ37cm、幅35cmの不整形	被熱面のみ、堆積土なし
SX3497	8層	東西24cm（G断面で確認）、深さ6cm	SX3495→SX3497
SX3498	8・9層	東西48cm、南北38cm（南半部のみ）	SX3498→SX3499
SX3499	7層	東西24cm、南北28cm（南半部のみ）、深さ4cm	SX3498→SX3499

第11表 SX3495～3499炉一覧

**【SK3486土坑】**（平面図：図版23、断面図：図版24）

調査区北半のN127～128・W26～27付近に位置する。確認面はSX3500竪穴遺構の9層で、第V層に覆われる。南半部のみ検出し、土層観察用畔に沿うサブトレンチ内では、底面まで掘り下げた。SK3488・3489土坑と重複し、これらより新しい。平面形は、東西64cm以上、南北34cm以上の楕円形と推定される。深さは21cmで、断面形は浅い「U」字状である。埋土は1層確認し、地山粒を多量、炭化物粒・鉄滓を少量含むにふい黄褐色(10YR5/3)シルトで、埋め戻される。

**【SK3487土坑】**（平面図：図版23、断面図：図版24）

調査区北半のN127・W26付近に位置する。確認面はSX3500竪穴遺構の9層で、同8層に覆われる。一部を底面まで掘り下げた。土坑内には、炭主体の層の間に地山ブロック主体の埋戻しとみられる層があり、大別3層に分かれ、古い方からA→B→C段階とする。SD3490・3491溝と重複しており、SD3490溝はB段階より古く、A段階に伴う可能性があり、SD3491溝はB段階より新しく、C段階に伴う可能性がある。平面形は長さ82cm、幅76cmの不整形を呈する。深さは24cmで、断面形は浅い「U」字状と推定される。埋土は6層に分かれ、1層（C段階）、3層（B段階）、5・6層（A段階）が炭主体で鉄滓や焼土を多く含む層で、中間の2層と4層が地山ブロックを主体とする層である。遺物は、土師器の坏、丸瓦Ⅱ類、鉄滓が出土した。鉄滓は860g出土しており、椀形滓を含む。

**【SK3488土坑】**（平面図：図版23、断面図：図版20・24）

調査区北半のN127・W27付近に位置する。確認面はSX3500竪穴遺構の10層で、同9層に覆われる。南半の検出を行い、土層観察用畔に沿うサブトレンチ内とSB3465掘立柱建物調査のため一部を底面まで掘り下げた。SB3465の柱穴⑩、SK3489土坑と重複し、これらより新しい。SK3486土坑、

SX3496炉と重複し、これらより古い。平面形は長さ118cm以上、幅55cm以上の不整形を呈する。深さは18cmで、断面形は浅い「U」字状である。埋土は1層確認し、鉄滓・炭化物粒を極めて多量に含み、非常に硬くしまっている。

**【SK3489土坑】**（平面図：図版23、断面図：図版24）

調査区北半のN128・W27付近に位置する。確認面はSX3500竪穴遺構の西辺底面（第X層）である。南半部のみ検出し、土層観察用畔に沿うサブレンチ内で底面まで掘り下げた。SK3486・3488土坑、SX3497炉と重複し、これらより古い。規模は東西76cm以上、南北20cm以上、深さ24cmで、断面形は逆台形状で、底部に段差を有する。埋土は1層確認し、SX3500の10層で埋め戻されている。

**【SD3469溝】**（平面図：図版19・23）

調査区北半のN129・W22～24付近に位置する。確認面はSX3500竪穴遺構の北辺底面（第X層）である。今回の調査では東西方向の溝の一部を確認して底面まで掘り下げ、規模・堆積土の特徴から第96次SD3469溝の西側延長と判断した。SB3465掘立柱建物の柱穴⑥およびSD3468溝と重複し、これらより新しい。規模は、検出長1.9m、幅35cm、深さ6cmで、断面形は浅い「U」字状を呈する。底面は西から東、北西から南東方向にわずかに下る。方向は、W23～24付近では東西基準線にほぼ沿うと推定され、W23より東で南東方向へ屈曲し、東西基準線より東で南に約30°偏する。埋土は1層確認し、SX3500の10層と一連の堆積で埋め戻されている。今回の調査では、新たな遺物は出土していない。

**【SD3490・3491・3492・3493・3494溝】**（平面図：図版23、断面図：図版24）

調査区北半のN124～128・W24～28に位置する溝群である。確認面はSX3500竪穴遺構の9層で、SD3492～3494溝内には鉄滓を多量に含む同8層が堆積すること、SD3490・3491溝は、SK3487土坑に伴うことから、鍛冶作業に伴う溝と判断した。それぞれの規模・方向等は一覧表にまとめたとおりである。

遺物は、SD3494から土師器の甕、須恵器の坏・壺または瓶、丸瓦、平瓦IA・II B類、羽口、鉄滓が出土した。平瓦IA類にはaタイプ、II B類にはbタイプがあり、II B類には焼瓦を含む。鉄滓は9,860g出土しており、椀形滓を含む。

遺構番号	規模	方向	高→低	重複等
SD3490	検出長67cm、幅14cm、深さ4cm	E-20°-S	北西→南東	SK3487Bより古い（Aに伴うか）
SD3491	検出長46cm、幅21cm、深さ2cm	E-20°-N	ほぼ水平	SK3487Cに伴う
SD3492	検出長72cm、幅20cm、深さ5cm	N-16°-E	北東→南西	
SD3493	検出長72cm、幅20cm、深さ5cm	N-20°-E	北東→南西	SD3494と同時にみられる
SD3494	検出長144cm、幅48cm、深さ15cm	N-17°-W	北西→南東	SD3493と同時にみられる

方向「N-17°-W」は「南北基準線より北で西に17°偏する」

第12表 SD3490～3494溝一覧

**【SD3503溝】**（平面図：図版19・23、断面図：図版20）

調査区北半のN129・W25～28付近に位置する。確認面は、SX3500竪穴遺構の底面（第X層）で、北辺に沿って東西方向に延びる。一部を底面まで掘り下げた。SB3465掘立柱建物の柱穴⑥と重複し、これより新しい。規模は、検出長5.7m、幅35cmで、深さ8cmで、断面形は浅い「U」字状を呈する。底面は西から東へ傾斜する。方向は、東西基準線より西で南に約5°偏する。埋土は1層確認し、SX3500の8層で埋め戻されている。遺物は、土師器の甕、羽口、鉄製品、鉄滓が出土した。鉄製品はサビ落とし後に報告する予定である。鉄滓は160g出土している。

**④ その他の遺構**

**【SX3483炉】**（平面図：図版19）

調査区南端のN116・W27付近に位置する。確認面はSX3467整地層の1層で、第Ⅲ層に覆われる。SX3467の1層が被熱により赤変・硬化しており、大小2か所認められる。大きい被熱面は長さ36cm、幅30cm以上の隅丸方形、小さい被熱面は長さ13cm、幅10cmの不整形である。鉄滓等が認められないことから、地床炉と判断した。

**【SK3472土坑】**（平面図：図版19）

調査区北端のN132・W21に位置し、確認面は第X層である。第96次調査で一部確認した土坑で、西半延長部分を検出し、北半は調査区外に延びる。平面検出のみを行い、規模は東西2.1m、南北1.3m以上の円形と推定される。検出面で、地山ブロックを少し含む暗褐色(10YR3/4)シルトが自然堆積している。

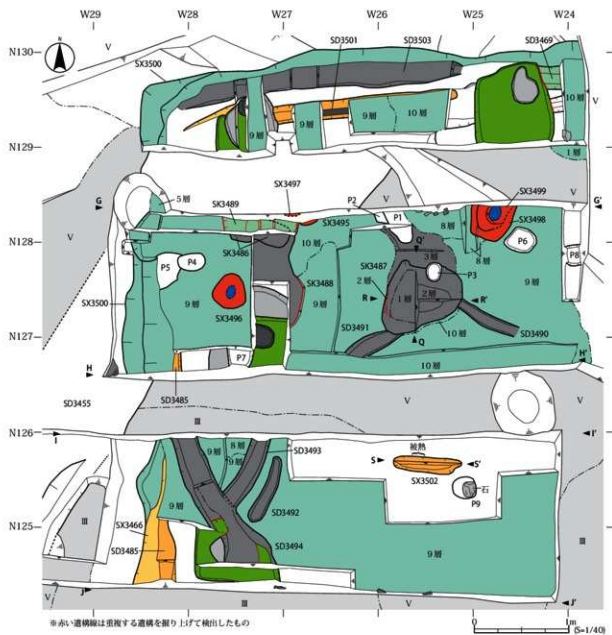
**【SD3455溝】**（平面図：図版17、断面図：図版20・21・24）

調査区西半のN116～129・W26～33に位置する。確認面は第Ⅲ層である。第96次A区で確認した溝（図版17）で、今回その北側延長部分を検出し、部分的に底面まで掘り下げた。1度掘り直されており、古い方からA→Bとする。SB3465掘立柱建物、SX3500竪穴遺構、SX3466切土などと重複し、これらより新しい。B溝の規模は、今回の検出した範囲で長さ約14.0m、上幅最大2.6m、深さ26cm、断面形は上部が開く「U」字状で、北側ほど浅くなる。第96次調査および未調査部分を含めると、全長31.5mとなる。A溝はB溝の下で部分的に確認し、幅25cm、深さ26cm、断面形は上部が開く「U」字形である。A・Bともに底面は北から南へ下る傾斜である。方向は、南北基準線より北で東に約36°偏る。堆積土はA・Bともに1層確認し、自然堆積である。遺物は、土師器の高台杯、須恵器の甕、須恵系土器の坏または皿、平瓦IA・II類が出土した。

**【SD3481溝】**（平面図：図版19、断面図：図版20）

調査区東半のN115～116・W20に位置する、南北方向の溝である。確認面は第Ⅵ層で、第Ⅴ層に覆われる。溝の東半部を調査し、西半部と南側は未検出である。SB3465掘立柱建物の柱穴⑦、SX3467整地層と重複し、これらより新しい。規模は検出長約1.7m、深さ16cmである。堆積土は2層確認し、1層は炭を主体とする廃棄層、2層は自然堆積とみられる。遺物は、土師器の坏・高台杯・





SB3465 竪立柱建物
  SX3466 切土
  SD3485・3501溝、SX3502 炉
  第III・V層
  SX3500 竪穴遺構
  SX3489 土坑、SD3469 溝
  SX3495～3499 炉
  SX3486～3488 土坑、3490～3494・3501・3503 溝

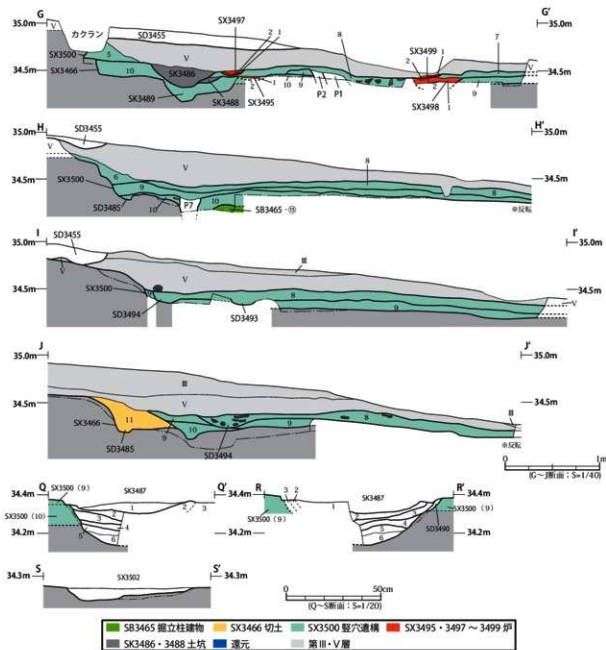


1. SX3500 - 9層上面遺構検出 (東から) (Z10429)



2. SX3498・3499、SX3487 検出 (西から) (Z10409)

図版 23 SX3495～3500・3502 炉、SX3486～3489 土坑、  
SD3485・3490～3494・3501・3503 溝 平面図・写真



遺構・層	土色	土性	含有物など	備考
SK3486	1 にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山酸を多量、炭化物粒・鉄洋を少量含む	人為
SK3487C	1 黒色(10YR2/1)	炭	鉄洋を極多量、焼土粒を多量含む	人為
	2 明褐色(7.5YR5/8)	シルト	赤褐色(5YR4/6)シルトとの混土で地山ブロック主体、鉄洋・炭化物粒・焼土粒を少量含む	惣地
SK3487B	3 黒色(10YR2/1)	炭	鉄洋を多量、焼土粒を少量含む	人為
	4 明褐色(7.5YR5/8)	シルト	赤褐色(5YR4/6)シルトとの混土で地山酸主体、鉄洋を多量、炭化物粒・焼土粒を少量含む	惣地
SK3487A	5 黒色(10YR2/1)	炭	褐色(10YR2/2)シルトとの混土、鉄洋を多量、焼土粒を少量含む	人為
SK3487A	6 暗赤褐色(10YR2/1)	鉄洋	微細な鉄洋主体、炭化物を極多量、焼土粒を多量含む	人為
SK3488	1 黒褐色(10YR2/2)	シルト	鉄洋・炭化物粒を極めて多量含む、非常に硬くしめる	人為
SK3490	1 暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒を極多量、焼土粒・鉄洋を少量含む	人為
SK3495	1 黒色(10YR1.7/1)	鉄洋	炭化物粒を極多量含む	人為
	2 にぶい赤褐色(5YR4/4)	シルト	被熱、炭化物粒を少量含む	が床
SK3497	1 黒色(10YR1.7/1)	鉄洋	炭化物粒を極多量含む	人為
	2 明赤褐色(5YR5/6)	シルト	被熱・還元、炭化物粒を微量含む	が床
SK3498	1 黒色(10YR1.7/1)	鉄洋	炭化物粒を極多量含む	人為
	2 明黄褐色(10YR6/8)	シルト	被熱・還元、炭化物粒を微量含む	が床
SK3499	1 黒色(10YR1.7/1)	鉄洋	炭化物粒を極多量含む	人為
	2 にぶい赤褐色(5YR4/3)	シルト	被熱、炭化物粒・微細な鉄洋を含む	が床
SK3502	1 灰オリーブ色(10YR4/3)	シルト	地山酸・炭化物を多量、焼土粒を微量含む、径1cmの鉄洋2点出土	人為

図版 24 SK3495・3497～3499・3502 炉、SK3486～3489 土坑、  
 SK3490・3493・3494 溝 断面図



1. 全景（上が北）

[Z10438]



2. 全景（南東から）

[Z10439]

図版 25 第 99 次調査区東半 全景写真



1. SX3466、SD3501 検出、SX3500 断面 (Z10354) (F - F') 西半 (北東から)



2. SX3500 断面 (G - G') (南東から) (Z10356)



3. SX3466・3500 断面 (H - H') (北西から) (Z10366)



4. SX3466・3500 断面 (I - I') (南東から) (Z10371)



5. SX3466・3500 断面 (J - J') (北西から) (Z10376)



6. SX3466・3500 断面 (K - K')W28 付近 (南から) (Z10381)



7. SB3465 柱穴⑤検出 (南東から) (Z10395)



8. SB3465 柱穴⑥検出 (南東から) (Z10401)

図版 26 SB3465 掘立柱建物、SX3466 切土・3500 竪穴遺構、SD3501 溝 写真



1. 柱穴㉗断面（東から） [Z10407]



2. 柱穴㉘断面（東から） [Z10406]



3. 柱穴㉙断面（東から） [Z10403]



4. 柱穴㉚検出（東から） [Z10396]



5. 柱穴㉛断面（東から） [Z10393]



6. 柱穴㉜断面（東から） [Z10390]



7. 柱穴㉝検出（北から） [Z10377]



8. 柱穴㉞検出（南から） [Z10388]

図版 27 SB3465 掘立柱建物柱穴 写真



1. 柱穴㊦断面 (A-A') (西から) [Z10338]



2. 柱穴㊦検出 (北西から) [Z10387]



3. 柱穴㊦検出 (西から) [Z10394]



4. 柱穴㊦断面 (東から) [Z10399]



5. SK3486・3488・3489 検出 (南から) [Z10417]



6. SK3487 検出 (南から) [Z10410]



7. SK3487 調査状況 (南から) [Z10412]



8. SK3487 断面 (Q-Q') (東から) [Z10413]

図版 28 SB3465 掘立柱建物柱穴、SK3486～3489 土坑 写真



1. SK3487 断面 (R・R') (南から) [Z10415]



2. SD3492～3494 検出 (南から)[Z10372]



3. SX3495 検出 (南から) [Z10422]



4. SX3496 検出 (北から) [Z10423]



5. SX3497 断面 (南から) [Z10424]



6. SX3498・3499 検出 (南東から) [Z10425]



7. SX3502 検出 (南から) [Z10420]



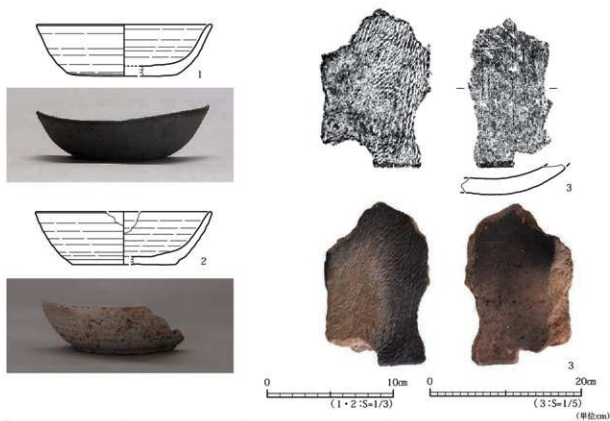
8. SX3502 断面 (南から) [Z10421]

図版 29 SK3487 土坑、SD3492～3494 溝、SX3495～3499・3502 炉 写真

裏、須恵系土器の坏または皿、高台皿（図版36-1・2）、高台坏または高台皿、平瓦ⅡB類が出土した。

【SD3482溝】（平面図：図版19）

調査区南東端のN114～117・W22に位置する、南北方向の溝である。確認面はSX3467整地層2層で、第Ⅲ層に覆われる。溝の西半部を調査し、南北両端と東半は未検出である。SB3465掘立柱建物の柱穴⑥と重複し、これより新しい。規模は検出長約2.1m、幅42cm、深さ20cmである。堆積土は1層確認し、自然堆積である。

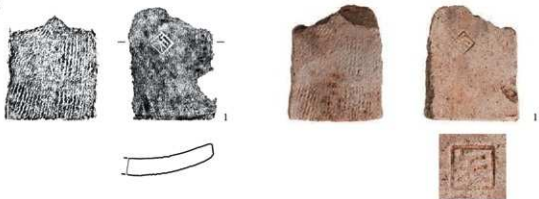


No.	遺構・層	種類	残存	寸法	特徴	登録	調査号
1	柱穴⑥ 掘取穴	須恵系 坪	口～底部1/2	口径(14.0) 底径(8.0) 器高4.1	内外：ロクロナデ 底：10輪ヘラ切り	R16	B16350
2	柱穴⑥ 掘取穴	須恵系 坪	口1/4～底部1/3	口径(14.0) 底径(8.0) 器高4.2	内外：ロクロナデ 底：10輪ヘラ切り	B24	B16350
3	柱穴⑥ 掘方埋土	平瓦	破片	厚さ2.1	ⅡB類a1 焼熟	R19	B16347

図版 30 SB3465 掘立柱建物 出土遺物

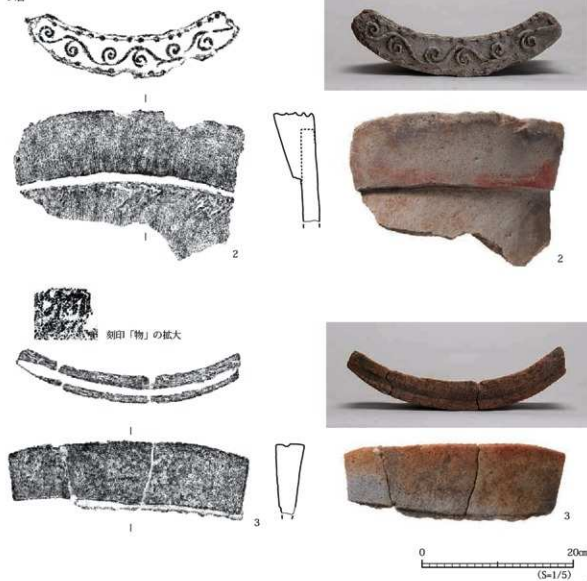


2層



刻印「矢」の拡大

1層

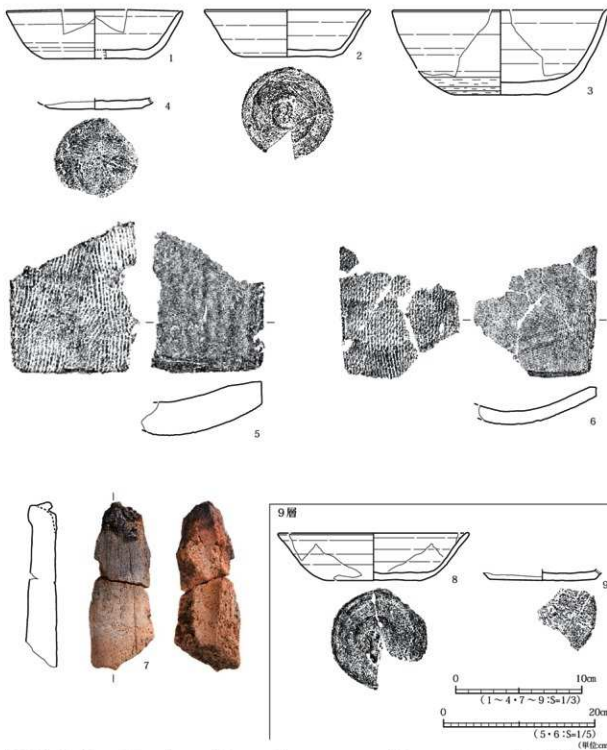


刻印「物」の拡大

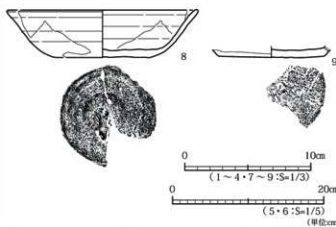
No.	層	種類	保存	法量	特徴	登録	番号
1	2層	平瓦	破片	厚2.23	B110a1 内面に刻印文字「矢」A. 焼熟	B15	B16347
2	1層	軒平瓦	瓦当部球状突起部	瓦当部厚さ5.3	編行番号文B21 凸面に赤色顔料付着	BK3	B16348
3	1層	軒平瓦	瓦当部突起部	瓦当部厚さ3.3	甲風文640 凸面に刻印文字「物」A. 焼熟により焼滅	B48・49・94	B16349

図版 31 SX3467 整地層 出土遺物

## 10層

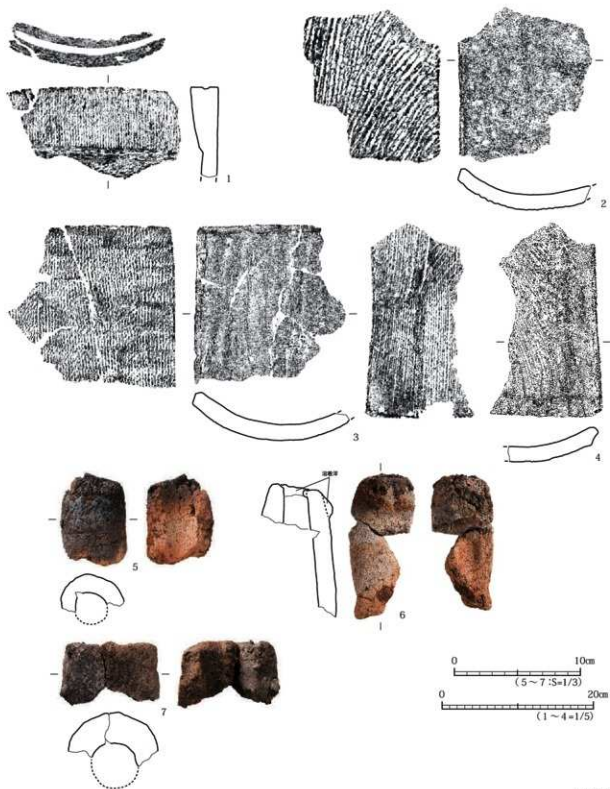


## 9層



No.	層	種類	残存	法量	特徴	写真図	登録	番号
1	10層	深底器	環	口径14.0 底径8.0 器高3.9	内外:ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	34-1	R67	B16351
2	10層	深底器	環	口径13.2 底径7.0 器高3.7	内外:ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	34-2	R68	B16351
3	10層	深底器	環	口径17.0 底径7.2 器高6.7	外:ロクロナデ(膝下回転ヘラナズリ) 内:ロクロナデ 底:回転ヘラナズリ	34-4	R69	B16351
4	10層	深底器	環	底径17.3 底径(7.4)	底:回転ヘラ切り→転削「×」	34-3	R66	B16351
5	10層	平瓦	破片	厚さ4.6	器底部3ヶ所 凸部:部分的に斜行の網甲き 凹部:端部付近にナズリ	34-6	R25	B16347
6	10層	平瓦	破片	厚さ1.8	器底部3	34-7	R26	B16347
7	10層	環	先端部一部→側部一部	長(13.1) 幅(5.0) 厚1.9~2.4	外:ナズリ 内:ナズリ 先端部内面に波線状 部分的にガラス質化	-	R10	B16352
8	9層	深底器	環	口径15.2 底径7.4 器高3.9	内外:ロクロナデ 底:回転ヘラ切り→転削「×」	35-1	R21	B16350
9	9層	深底器	環	底径(8.4)	底:回転ヘラ切り→二本輪で転削「×」	35-2	R28	B16350

図版 32 SX3500 竪穴遺構 出土遺物 (1)



(単位:cm)

No.	層	種類	残存	法量	特徴	写取機	径種	箱番号
1	8層	料平瓦	瓦当部1/2	瓦当部厚さ3.6	半瓦文640 平瓦部目皿 被焼 跡付着	35-3	R33	B16347
2	8層	平瓦	破片	厚さ2.1	目皿類a1 被焼 凸・凹面に鉄滓少量付着	35-4	R52	B16348
3	8層	平瓦	破片	厚さ2.4	目皿類a3 凹面に鉄滓付着	35-5	R53	B16348
4	8層	平瓦	破片	厚さ2.4	目皿類a2orb 凹型台の膨隆部正瓦か	35-6	R34	B16348
5	8層	引口	先端部1/3～胴部1/2	長(7.5) 幅(5.4) 厚1.2～1.4	外:クズリ 内:ナデ 先端部外内面に滑着滓	-	R108	B16352
6	8層	引口	先端一部～胴部一部	長(10.5) 幅(5.5) 厚1.5～1.9	外:クズリ 内:ナデ 先端部外内面に滑着滓 部分的にガラス質化	-	R109	B16352
7	8層	引口	先端一部～胴部一部	長(13.1) 幅(5.1) 厚1.9～2.4	外:クズリ 内:ナデ 先端部内面・破面に滑着滓	-	R111	B16352

図版 33 SX3500 竪穴遺構 出土遺物 (2)



(1~4: S=1/3, 5: 1/1, 6·7: S=1/5, 8: 2/3)

图版 34 SX3500 竖穴遺構 出土遺物 写真 (1)



(1・2 : S=1/3, 3~6 : S=1/5)

図版 35 SX3500 竪穴遺構 出土遺物 写真 (2)

## ⑤ 基本層出土遺物

第Ⅵ層から、土師器の甕、須恵器の環・壺または瓶、須恵系土器の環・環または皿、平瓦ⅠA類、鉄滓が出土した。鉄滓は195g出土しており、椀形滓を含む。

第Ⅴ層から、土師器の環・高台環・甕、須恵器の環・高台環・蓋・甕・長頸瓶・壺または瓶、須恵系土器の環・皿・環または皿・高台環または高台皿、灰軸陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅡB・ⅡC類、羽口、鉄滓、石製品が出土した。須恵器の長頸瓶（図版36-3）は、食膳具から何らかの容器に転用する際に、頸部を取り去ったと考えられる。軒丸瓦は重弁蓮花文130（4）、軒平瓦は二重弧文511a（5）、平瓦ⅡB類にはaタイプ1・2があり、aタイプ1には「矢」Aの刻印がある（図版37-3）。鉄滓は18,628g出土しており、椀形滓を含む。大部分はSX3500-8層上部からの出土である。

第Ⅳ層からは、土師器の環、須恵器の環、須恵系土器の環または皿、平瓦が出土しており、平瓦には焼瓦を含む。

第Ⅲ層からは、土師器の環・高台環・甕、須恵器の環・高台環・蓋・甕・瓶・壺もしくは瓶（図版37-14・15）・風字硯（図版36-9）、須恵系土器の環・皿（6）・環または皿・高台皿（7）・高台環または高台皿、白磁の碗（図版36-8、図版37-8～11）、灰軸陶器の皿（図37-12）・青磁の碗とみられるもの（13）、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠC・Ⅱ・ⅡA・ⅡB・ⅡC類、羽口、土玉（17）、砥石、鉄滓が出土した。軒丸瓦には細弁蓮花文軒丸瓦311（図版36-10）、軒平瓦には単弧文640があり、平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1～3とbタイプがある。鉄滓は1,057g出土しており、椀形滓を含む。

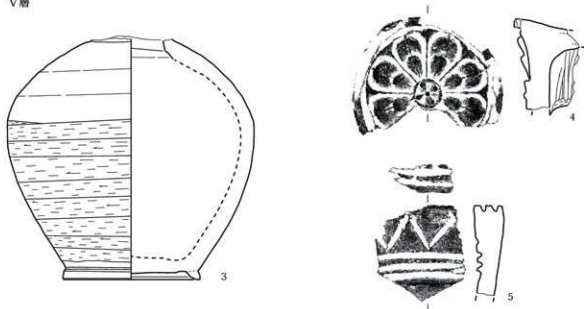
第Ⅱ層からは、須恵器の壺または瓶、須恵系土器の環または皿・高台環または高台皿、近世以降の陶磁器、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡC類が出土している。

第Ⅰ層からは、土師器の環・甕、須恵器の環・高台環・甕・壺または瓶、須恵系土器の皿・環または皿・高台環または高台皿、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅡB・ⅡC類、鉄滓が出土している。平瓦ⅡB類にはaタイプ2があり、焼瓦を含む。鉄滓は124g出土している。

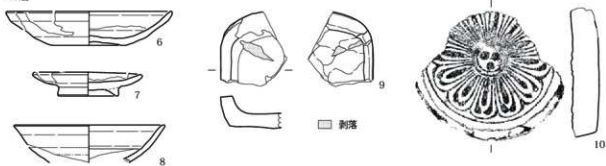
SD3481



V層



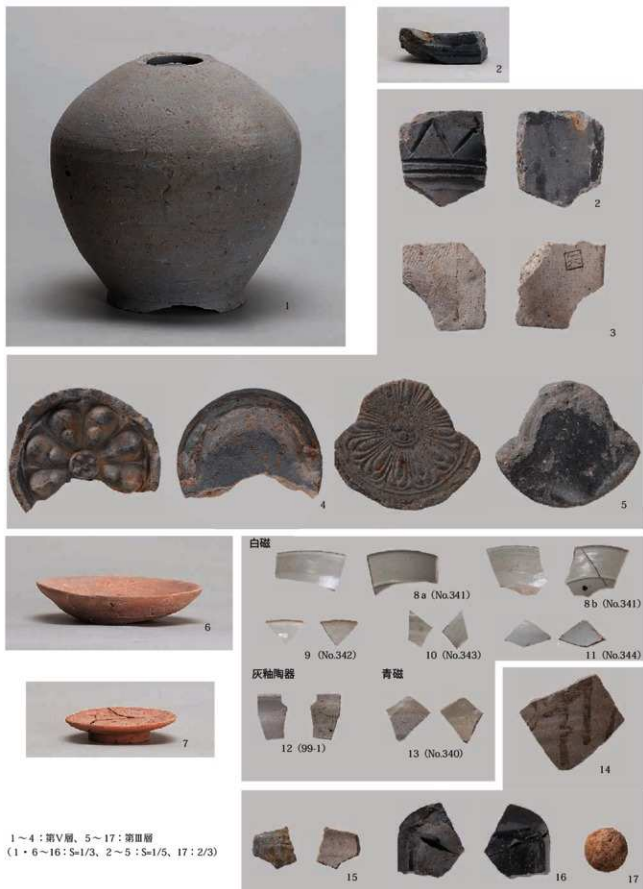
III層



(単位:cm)

No.	遺物・層	種類	形状	法量	特徴	写真図	図録	番号
1	SD3481 埴	加磨系土器 高台皿	ほぼ丸形	口径9.2 底径4.5 器高2.1	外内:ロクロナデ 底:目触糸切り→高台部分→ロクロナデ	-	B36	B16350
2	SD3481 埴	加磨系土器 高台皿	ほぼ丸形	口径9.3 底径4.6 器高2.6	外内:ロクロナデ 底:目触糸切り→高台部分→ロクロナデ	-	B37	B16350
3	V層	加磨系 長頸瓶	胴部以下丸形	最大径1.96 底径10.9 器高019.3	外:ロクロナデ→胴下部目触ヘラケズリ 内:ロクロナデ 底:高台部分→ロクロナデ 二段階合 食器具から転用する際、 胴部を削りさる。	37-1	B106	B16352
4	V層	軒丸瓦	瓦当部2/3	瓦当直径:19.3 瓦当部厚さ3.5	番号番号文130 丸瓦部四角:ケズリ→折ナデ	37-4	B100	B16349
5	V層	軒平瓦	瓦当部2/3	瓦当部厚さ3.9	二番風文11a 彫部:彫部文と前風文2本	37-2	B82	B16348
6	III層	加磨系土器 皿	口一帯→底部丸形	口径13.2 底径5.8 器高2.7	外内:ロクロナデ 底:目触糸切り	37-6	B55	B16350
7	III層	加磨系土器 高台皿	口径4→底部丸形	口径8.7 底径4.8 器高1.9	外:ロクロナデ 内:器面の風化が著しい 底:高台部分	37-7	B88	B16351
8	III層	白磁 蓋	口1/4	口径02.0 器高0.0	外内:ロクロナデ 外:体部平断面 太字形部分無さ 1a類	37-8a	R72	B16352
9	III層	磁字刷	胴部→裏面の一部	器高(2.6)	外:ヘラケズリ 内:ヘラケズリ→ナデ 使用後は磨削ではない	37-16	B85	B16351
10	III層	軒丸瓦	瓦当部2/3	瓦当直径:(20.4) 瓦当部厚さ3.7	番号番号文311 瓦当部に粘付着	37-5	B84	B16349

図版 36 SD3481 溝、基本層 出土遺物



图版 37 基本層 出土遺物 写真



遺構	層	土師器				須恵器				須恵系土器		青磁			白磁			灰輪陶器			土製品		漆紙		石製品			石器	近世以降陶器	計
		供懸具	煮沸具	供懸具	貯蔵具	碗	碗	不明	碗	皿	瓶	土玉	漆鉢	漆鉢	砥石	碇石	碇石	石鏃	石鏃											
SB3465	抜取穴	2	3	8	5																								18	
SB3465	確認面		9	2		1																							12	
SD3455	堆積土	2			2	5																					1	10		
SD3469	4層		1																									1		
SD3481	堆積土	7	2			35																						44		
SD3494	8層		1	3	1																							5		
SK3487	埋土	1																										1		
SX3500	8層	11	68	44	26						1																	150		
SX3500	9層	2	5	14	1	5																						27		
SX3500	10層	9	16	34	11							1	1															72		
SX3467	1層		2	11	3	3																						19		
SX3467	2層	1			3																							4		
	第VI層		4	1	1	5																						11		
	第V層	19	47	65	54	69					1														1			256		
	第IV層	1		1		1																						3		
	第III層	102	108	23	85	1	567	1	4			1	1	1									2	1				897		
	第II層	5	1		4	13																					2	25		
	第I層	22	34	29	32	45					1															1	1	165		
	合計	184	301	235	229	749	1	4	1	1	1	1	2	1	1	1	2	2	1	4								1,720		

※概ね長さ2cm以上のものを集計の対象とした

※供懸具：小皿、皿、高台皿、杯、高台杯、高杯、埴、台付鉢、蓋

貯蔵具：須恵器鉢・短頸壺・長頸瓶・甕

煮沸具：土師器甕

第13表 第99次調査出土土器・陶磁器類の破片集計

遺構	層	羽口g	鉄滓g (検形率)
SB3465	抜取穴		11
SD3469	4層		160
SD3492	8層	219	9,860 (++)
SK3487	埋土		860 (+)
SX3500	4層	34	
SX3500	8層	831	75,217 (+++)
SX3500	9層	44	2,291 (++)
SX3500	10層	106	2,093 (+)
SX3499	埋土		9
SX3502	埋土		12
	第VI層		230 (+)
	第V層	145	18,628 (++)
	第III層	96	1,147 (+)
	第I層		124
	その他		621 (+)
	合計	1,475	111,263

+ 1-9点

++ 10-99点

+++ 100点～

第14表 第99次調査出土鍛冶関連  
遺物重量集計

【点数】

分類 遺構・層	軒丸瓦			軒平瓦			
	重弁蓮花文 130	細弁蓮花文 311	不明	二重弧文 511a	単弧文 640	雁行唐草文 621	不明
第V層	1			1			
第III層		1	1		1	2	1
SX3467・1層						1	1
SX3500・8層						1	1
	1	1	1	1	1	4	2

【重量(g)】

分類 遺構・層	軒丸瓦			軒平瓦			
	重弁蓮花文 130	細弁蓮花文 311	不明	二重弧文 511a	単弧文 640	雁行唐草文 621	不明
第V層	1,720			680			120
第III層		1,230	120		1,050	710	70
SX3467・1層						610	2,280
SX3500・8層						1,150	100
	1,720	1,230	120	680	1,050	2,470	2,280

第15表 第99次調査出土軒丸・軒平瓦の集計

## ①【点数】

遺構・層\瓦分類	丸瓦				平瓦														不明	計							
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅰ	ⅠA	ⅠAa	ⅠB?	ⅠC	Ⅱ	ⅡA	ⅡB	ⅡB a1	ⅡB a2	ⅡB a3	ⅡBb	ⅡC	平瓦			不明						
SR3465	腹方埋土														1									1			
	瓦取穴	1	2	1		3									1								1	9			
	確認面		1			2																		3			
SR3464	埋土					1									1									2			
SR3487	埋土	1																						1			
SD3455	埴積土					1					1													2			
SD3481	埴積土										2										1			3			
SD3494	8層			1			1				2	1				1					1			7			
SX3467	2層	3	1			5	3				3	1	3		1						3			23			
	1層	1	1			1					3				2						2			10			
	10層	2		1		3					1					1	1				3			12			
SX3500	9層			1		3					3					1								8			
	8層	4	2	7		6		1			14	1	6	1	3	2	1				5			53			
	第VI層																				1			2			
第V層		12	2	8	15	1	21				31	1	3		1					5	11	2	2	115			
第IV層																						1	1	2			
第III層		25	7	2	52	2	29	2		3	1	1	62	1	3		11	2	3	17	36	2	5	266			
第II層		1	2	1																	1	1		6			
第I層		15	4	4	11		15		1			13	1			1				2	4			2	69		
その他		7	4	4	11	1	6			1	1	16									11	1	6	65			
小計		72	2	32	2	101	1	3	97	6	1	5	2	1	151	6	15	2	21	6	6	25	79	6	15	2	659

## ②【重量(g)】

遺構・層\瓦分類	丸瓦				平瓦														不明	計							
	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅰ	ⅠA	ⅠAa	ⅠB?	ⅠC	Ⅱ	ⅡA	ⅡB	ⅡB a1	ⅡB a2	ⅡB a3	ⅡBb	ⅡC	平瓦			不明						
SR3465	腹方埋土																							740			
SR3465	瓦取穴	90	1,020	40		1,000										380							30	2,560			
SR3465	確認面		230			50																			780		
SR3464	埋土					1,340										990									2,330		
SR3487	埋土	40																							40		
SD3455	埴積土					80					70														150		
SD3481	埴積土										120										70				190		
SD3494	8層			30			430				360	220					190				20				1,250		
SX3467	2層	830	140			5,190	3,220				1,430	200	2,210								170				14,290		
	1層	1,240	1,170			520					400				2,130						70				5,530		
	10層	320		60		580					500					1,800	520				290				4,190		
SX3500	9層			50		980					200					250									1,480		
	8層	740	1,770	290		1,540		280		4,510	170	2,270	980	2,050	1,800	220					280				17,010		
	第VI層					40															40				80		
第V層		1,430	220	1,960	750	80	3,990				7,000	140	620		220						670	670	510	100	18,420		
第IV層																									60	30	
第III層		3,410	1,930	150	2,710	360	3,850	860		790	150	700	9,380	60	2,340	4,020	500	540	3,140	2,050	130	170				37,210	
第II層		160	160	60																	180	50			610		
第I層		1,750	660	790		2,720	170				2,210	100			340						170	330			150	9,300	
その他		960	1,410	500	130	650			80	290	4,020											520	190	130		9,280	
小計		10,970	220	10,450	150	5,280	130	440	23,000	4,510	170	1,120	440	700	30,250	890	7,440	1,720	11,030	4,510	1,470	4,190	4940	890	460	150	125,620

第16表 第99次調査出土丸・平瓦の点数・重量集計

### 3. 総括

第99次調査は、第96次調査で一部を確認したSB3465掘立柱建物の全体を把握することを主な目的とした。調査の結果、SB3465は東に廂の付く桁行6間、梁行3間の建物であることが判明した。また、鍛冶工房とみられるSX3500竪穴遺構も確認されるなどの成果があった。多数の遺構が重複しているため、ここではSB3465とSX3500を中心に、第96次調査の再検討も含めて、遺構の構造・変遷・年代等を整理しておきたい。

#### (1) SB3465掘立柱建物について

**〔遺構の概要〕** SB3465は北西から南東方向に下る斜面に立地し、斜面上方の北西部を切土(SX3466)し、斜面下方に盛土整地(SX3467)をして構築している。東に廂の付く桁行6間×梁行3間の南北棟で、東西両側および廂の柱列と、南北両妻の柱列が直交せず、平面形が平行四辺形を呈する。

**〔構築時の切土〕** SX3466切土の北辺は柱列掘方にほぼ沿う形で、西辺は西側柱列の50～70cm西側から切り出している。北辺ではSD3468・3501溝、西辺ではSD3485溝を断続的に検出しており、切土および建物に伴う溝の可能性はある。ただし、SD3501では部分的ではあるが壁材とみられる痕跡を確認しており、SB3465より古い竪穴建物等があり、その壁を東西方向に拡張する形でSX3466切土が行われた可能性も考えられる。

**〔造成面の勾配〕** SX3466は、北西隅の柱穴⑩周辺で底面標高34.5mと最も高く、南へ約7.5mの柱穴⑬周辺で標高34.1mまでと推定される。南北方向の傾斜は3°前後で、約5%の勾配である。

SX3467整地層は標高34.1mより斜面下方で検出している。検出面の標高は、南東隅の柱穴⑦付近が最も低く32.6mだが、柱穴の深さは20cmしかなく、SX3467の上部は第VI層以上の堆積の際に削平を受けたとみられる。西側柱列の南北方向の傾斜を模式図化したものが図版38であり、これに基づいて造成面について以下の2つの可能性を検討した。

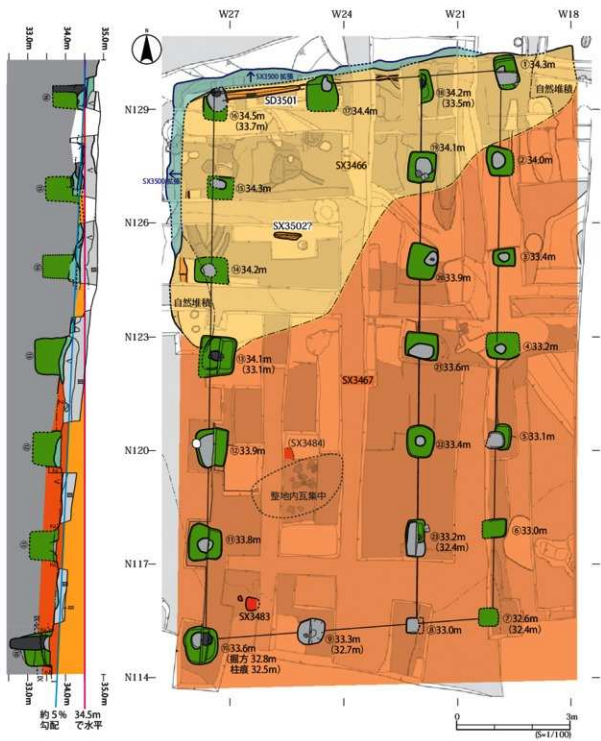
##### ① 最も高い北西隅柱検出面の標高34.5mで水平面を造成した場合

SX3466の上面にも盛土が必要となり、南東隅の柱穴⑩では盛土の厚さが最大1.2m程度になる。この面から柱穴⑩を掘ったとは考えにくく、柱を建てた後に盛土することは可能だが、その場合は抜取穴も深さ1m以上あったことにある。今回の調査でそのような大規模な盛土の痕跡は確認できない。また、切土との境目から標高34.1m付近で水平面を造成した可能性はあるが、切土部分の傾斜は残ることになる。

##### ② 切土の延長で約5%勾配の面を造成した場合

西側柱列では整地層上面が10cm前後の削平を受けた想定となり、盛土の厚さは最大50cm程度と推定される。柱穴の深さは北西隅の⑩、中央の⑬、南西隅の⑭でいずれも80～90cm程度に揃う。柱穴が掘りこまれた段階では、このような傾斜を持つ整地がなされたと考えるのが自然であろう。なお、南妻柱列では、東西約7.5mに対して、柱穴掘り底面の標高値の高低差が40cm程度あり、やはり5%程度の勾配があったと推定される。

**〔機能時の堆積土〕** 切土の壁際堆積土を、南西部(柱穴⑩西側=図版21の11層)と北東部(柱穴①東側=図版39のU断面)で確認した。それ以外は、後続するSX3500を構築する際の拡張・掘り下げによりほぼ残存しない。



図版 38 SB3465 掘立柱建物と SX3466 切土・3467 整地層

【切土・整地面の遺構と性格】SX3466切土底面でSX3502炉、SX3467整地層上面でSX3483炉を検出した。SX3502は鉄滓がわずかに出土しているが、被熱は弱く、鍛冶炉とは断定できない。SX3500の9層に覆われているため、SX3500に伴う可能性もある(図版39)。また、SX3483は地床炉で、11世紀後半以降に堆積した第Ⅲ層に覆われていることから、整地の直後から第Ⅲ層堆積までの比較的長い時間幅の中に位置づけられる(図版40)。いずれもSB3465に確実に伴う炉とはいえず、建物の規模の面からも、工房的な性格よりは城内の官衛的な性格の建物に対応するとみられる。

【廃絶】柱はすべて抜き取りまたは切取られており、北半部の柱穴ではSX3500構築に伴う10層で抜き取り・切取り穴が埋め戻されていることから、SB3465の廃絶とSX3500の構築が一連で行われたと考えられる。10層には一定量の鉄滓のほか、漆紙、紡錘車などの生産関連遺物が含まれていることから、建物周辺ではそうした活動が行われていたことが考えられる。

## (2) SX3500竪穴遺構と鍛冶関連遺構の変遷について

【遺構の概要】SX3500は内部で複数の鍛冶炉を検出しており、鍛冶工房と考えられる。鍛冶炉や関連する作業土坑・溝は、N123～129・W24～28の範囲に重複して分布し、保存のため掘り下げや下層遺構の把握はとどめたが、検出した遺構の変遷を整理しておく。

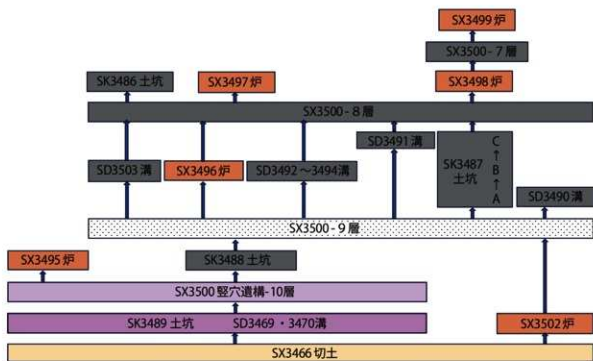
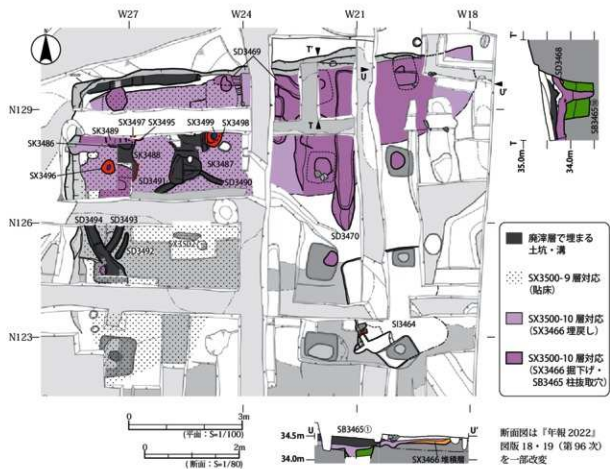
【構築】まずSB3465掘立柱建物の柱穴の抜き取り・切取りを行い、SX3466切土の北辺西部と西辺北部を外側に拡張して壁としている。あわせて、炭を多く含む10層によって、柱の抜き取り・切取り穴および切土底面を広く埋め戻し、床面とする。また、北東部では柱穴①⑧⑨の柱抜き取りに合わせて、切土底面を20cm程度掘り下げたとみられる(図版39上)(註1)。このほかにSD3469・3470溝、北西部のSK3489土坑も10層で埋め戻されており、掘方の一部と捉えている。

【機能面】10層上面、9層上面、8層上面の大きく3つに分かれ、このほかに部分的な補修として7層を確認した。

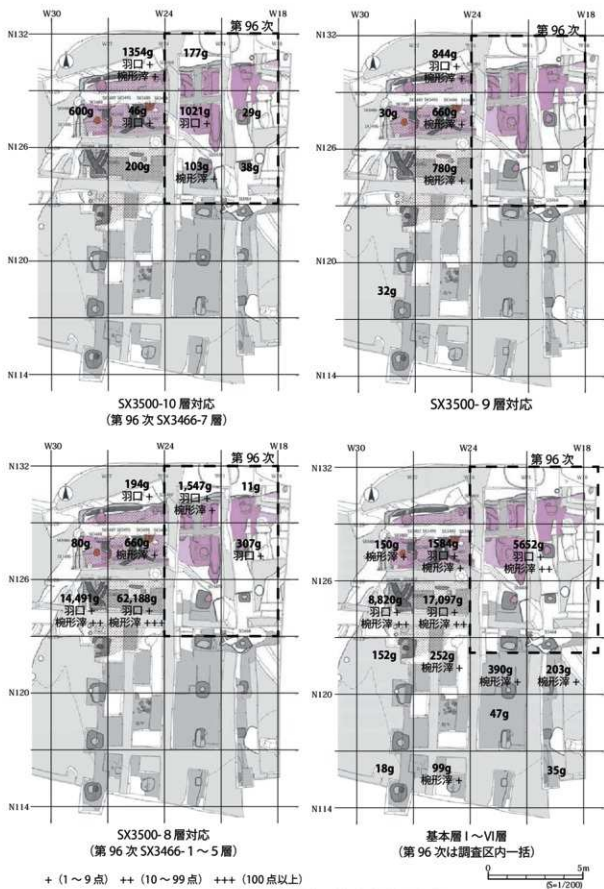
10層上面ではSX3495炉と、近接してSK3488土坑を検出した。SK3488は炭・鉄滓を主体とする層が硬くしまった状態であり、主に廃棄土坑として使用された後、貼床9層の下となって踏み固められたと考えられる。

9層は地山ブロックを含む貼床で、竪穴遺構西半部に広く分布するほか、SB3465柱穴①⑧⑨の抜き取り穴上部の窪地を埋め戻すなど南側にも広がる。鍛冶遺構・鉄滓の分布はN123以北に限られ、9層上面で検出した遺構は、SX3496炉のほか、SK3487土坑、SD3490～3494溝、北辺のSD3503溝がある。SX3496炉は中央部が強く還元しており、繰り返しの使用が想定される。また、炉より南側のN124～126・W24～28一帯の8層には多量の鉄滓が含まれており、SD3492～3494も8層で埋まっている状況が確認された。出土した椀形率は100以上に及ぶ。一方、東半部(第96次調査部分)には9層の面的な広がりや鍛冶遺構は検出されず、鉄滓も西半部ほど多くはないなど、明らかに使用状況に相違がみられる。

8層上面ではSX3497・3498炉を検出した。SX3498上には地山ブロックを主体とする7層を部分的に貼り直して、SX3499炉を構築している。SX3499炉内には鉄滓が取り残されており、最後はそのまま操業を終えたとみられる。SX3497～3499の操業に伴う廃棄場としては、引続き南側の区画を使用しており、最終的に捨てられたまま廃絶したところに、第V層以上が堆積したと考えられる。



図版 39 SX3500 竪穴遺構と鍛冶遺構の変遷



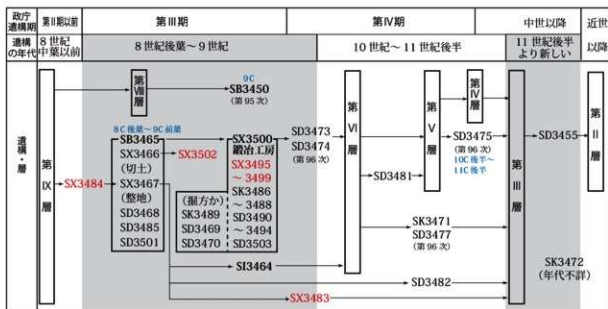
図版 40 鍛冶関連遺物の集計 (洗浄済み)

〔**鍛冶遺物の概要**〕 洗浄済みの鉄滓・羽口を3mグリッドごとに図版40に集計した（註2）。SX3496～3499の操業に伴う8層および第V層以上からの出土が圧倒的に多いが、特に炉の分布する区画よりも南隣の区画の方が多く、廃滓場として使用され続けたことがうかがえる。城内の鍛冶工房としては大畑地区SI2300・2305工房（『年報1995』）などがあるが、いずれも碗形滓の出土量は数点であり、今回のSX3500の鉄滓出土量は城内でも圧倒的に多い。

なお、第96次と第99次の土壌回収分を含めた鍛冶遺物については、次年度に土壌の水洗選別を行ったうえで、改めて報告したい。

### （3）遺構の年代と変遷について

SB3465掘立柱建物では、柱穴⑩の掘方埋土から平瓦ⅡB類の焼瓦（図版30-3）が出土している。また、SX3467整地層で瓦が多数出土している範囲があり、第Ⅱ期の偏行唐草文軒平瓦621、単弧文軒平瓦640、刻印瓦「矢」A（図版31-1～3）のほか、少数の焼瓦を含む。これらのことから、SB3465の構築は政庁第Ⅱ期末の火災（780年）以降と考えられる。一方、柱の抜取・切り取穴を埋めるSX3500竅穴遺構の10層は多数の須恵器を含み、特にまとめて出土した昨年度の第96次調査の成果から、8世紀後葉～9世紀前葉に位置づけられる（『年報2022』）。よって、SB3465廃絶の下限は9世紀前葉となり、SB3465は第Ⅲ期でも前半、780年以降～9世紀前葉頃に位置づけられる。なお、SX3467下の第Ⅸ層上面で検出したSX3484炉は、整地以前の遺構面があったことを示す遺構であり、第Ⅱ期以前にさかのぼる可能性がある（図版41）。



図版41 遺構・層の変遷

赤字は伊 青字は出土遺物から推定した年代



SX3500は、10層出土土器から8世紀後葉を上限とし、遺構を覆う第V層は10世紀～11世紀後半に位置づけられる（『年報2022』のB区第Ⅲ層）。1～9層は年代を絞りこめる土器・瓦の出土はないが、主体は8世紀後葉～9世紀前葉の土器、第Ⅲ期以前の瓦で、9世紀後半に下る土器や第Ⅳ期の瓦を含まないことから、SX3500も第Ⅲ期の範囲に収まると考えられる（註3）。なお、南東側にあるSI3464竪穴建物は、SB3465より新しく、第96次で9世紀代と推定したもので、SX3500とは重複しないため、同時に存在した可能性もある。

以上より、SB3465とSX3500はいずれも第Ⅲ期の中で変遷したものと位置づけられる。

註1) 第96次調査では、この掘下げを含めてSX3466切土と解釈したが、今回の調査結果も踏まえると、柱穴の検出面（地山）が⑦より約20cm低く、深さも⑧より約20cm浅いことから、柱の抜取りにあたって切土底面が掘り下げられたと解釈を改める。第96次SX3466-7層が、今回調査のSX3500-10層にあたりと考えられる。

註2) 第96次調査では、第V層（96次第Ⅲ層）上面でもSX3480鍛冶炉を検出していることから、第Ⅲ層（96次第Ⅱ層）以上にはこの鍛冶炉の鉄滓も含まれる可能性がある。

註3) SX3500-9層、SX3467-1層から数点の須恵系土器が出土している（第13表）が、直上の第V層などと比較すると割合的にはわずかであり、第Ⅳ期の瓦も共伴しないこと、第Ⅲ～V層から植生痕とみられる層が下層にも入り込んでいることから、今回は混入と判断した。

## IV. 第11次5カ年計画の総括

多賀城跡発掘調査の第11次5カ年計画は、令和元年度（平成31年度）を初年度とし、本年が最終年度である。各年度の実施状況は、年度ごとに刊行した年報に記したとおりだが、今年度が計画終了年度にあたることから、ここで第11次5カ年計画とその実施状況を総括しておきたい。

### （1）計画の目的

本計画に先行する第10次5カ年計画は、外郭南辺と西辺および北西隅の区画施設や付属施設を対象とし、課題の解明と正式報告書作成のための資料収集、環境整備と連動した政庁南大路の補足調査を主目的に立案された。外郭南辺と政庁南大路・南北大路については、その実施によって一定の成果を得ることができた。一方、外郭西辺の調査は、上記の調査に時間を要したことから、実施できなかった。そこで、本計画は外郭西辺を対象とした重点的な調査を実施し、未検出の第Ⅰ・Ⅱ期外郭西辺の確認、外郭北西隅における区画施設や付属施設の把握、丘陵部と沖積地の境における区画施設の取り付き部分の構造把握などの課題の解明と正式報告書作成のデータ収集を主目的として立案したものである。

### （2）計画の実施状況と変更

本計画に基づく令和元年度から今年度までの発掘調査の実施状況は、第17表のとおりである。調査計画は、多賀城市が計画する政庁地区北方の多目的広場整備に伴う周辺調査が必要となったことから変更し、また、多賀城創建1300年記念にあわせて環境整備を実施している政庁南面地区の第Ⅰ期外郭南門西側隣接地の公有地化が進展したことにより、南門の西脇に取り付け区画施設の調査が可能となったことから、令和元年度と3年度が多賀城跡調査指導委員会での了承のうえ、当初計画の政庁西方と外郭北西隅・西辺の調査は先に送ることとした。

### （3）計画の成果

#### ① 外郭西辺北方で西北門を確認（第93次）

第Ⅲ期～第Ⅳ期の門と区画施設を検出した。西北門SB3400は八脚門で、掘立式（第Ⅲ期）から礎石式（第Ⅳ期）の変遷があり、南北両側に築地塼を伴う。また、第Ⅲ期で門より古い材木塼も検出した。第Ⅲ期以降の外郭西辺には、西門と西北門の南北2か所に門が設置されていたのが明らかになった。

#### ② 外郭西辺の再検討（第98次）

第10次調査の再検討を行った結果、第47次調査と同様に材木塼が3時期の変遷があり、それらに伴う整地層も確認した。第47次調査では、最も新しいSA1513C材木塼は灰白色火山灰降灰前の構築で、降灰後の柱抜き取りとするが、第10次調査区部分では、掘方土に多くの灰白色火山灰ブロックが含まれており、降灰後の構築が明らかになった。

### ③ 第Ⅰ期外郭南門西側の旧地形の把握（第97次）

10世紀前葉～12世紀前葉頃にかけて削平を受けており、区画施設の検出には至らなかった。

### ④ 政庁地区北方の遺構分布・年代の把握（第94～96・99次）

政庁北西側の丘陵尾根と、東から西へ入り込む沢の沢頭周辺を調査した。結果、丘陵部分に大型の掘立柱建物、沢部分に竪穴建物が分布することが明らかとなった。このうちSB3415は、北と東に廂が付く大型の掘立柱建物で、平面形式・規模・配置の計画性から政庁と密接な関係を持った建物と考えられる。また、SB3450も規模の大きな掘立柱建物である。SB3465は東に廂が付く掘立柱建物で、第Ⅲ期でも古い段階（780年以降～9世紀前葉頃）と考えられる。ほかにSX3500は内部に鍛冶炉を有する鍛冶工房で、廃滓量は城内で確認されている鍛冶工房のなかで最も多い。これらの成果から、第Ⅲ期以降になると、この区域に政庁と関連する重要な建物が配置され、活発に利用されるようになる様相が明らかとなった。

以上、外郭については①・②で第Ⅲ期以降の西辺の門・区画施設の様相、③で第Ⅰ期南門西側の地形が明らかになってきた。また④の成果により、政庁地区北方の地形と遺構の様相をおおむね把握することができた。このほか正式報告書として政庁南大路・南北大路（『南面Ⅲ』）を刊行し、重点遺構保存活用地区である政庁南面地区・南門地区の整備活用の基本資料『外郭Ⅰ』・『南面Ⅰ～Ⅲ』が揃った。

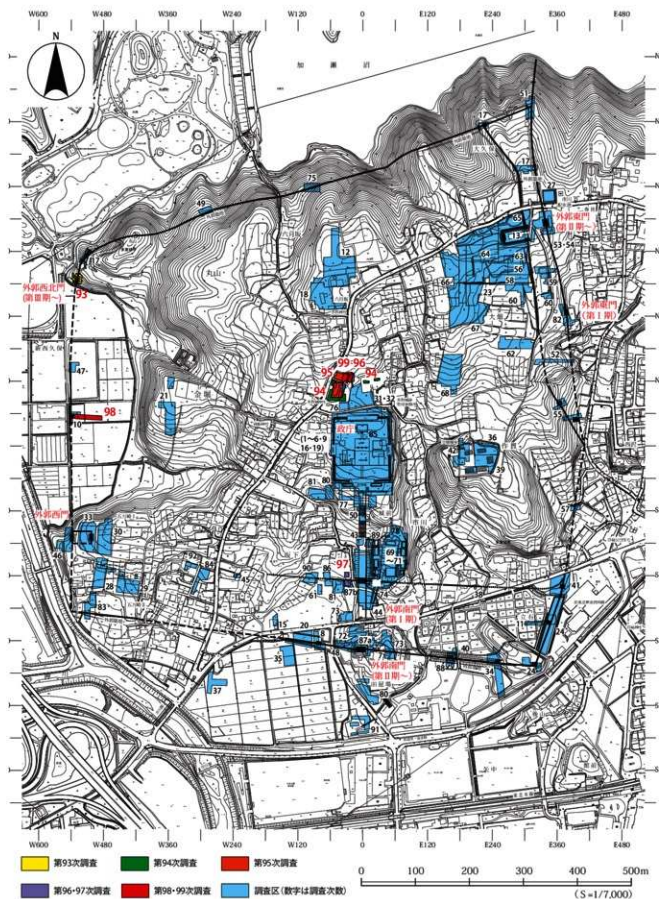
当初：平成30年10月30日 ※元号は変更

年度	回数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成31 / 令和元年	93次	外郭北西隅（西久保・丸山地区）	1,000㎡	外郭北西隅の検討
	94次	政庁北西隣接地（政庁西方地区）	150㎡	政庁西方地区の検討
令和2年	95次	外郭北西隅（西久保・丸山地区）	1,000㎡	外郭北西隅の検討
令和3年	96次	外郭西辺（新西久保・金堀地区）	1,400㎡	外郭西辺の検討
令和4年	97次	外郭西辺（五万崎地区）	1,000㎡	外郭西辺の検討
令和5年	98次	大畑官衙（大畑地区）	1,000㎡	大畑地区の検討

#### 実績

年度	回数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成31 / 令和元年	93次	外郭北西隅（丸山・新西久保地区）	300㎡	外郭北西隅の区画施設と付属施設の確認
令和2年	94次	政庁地区北方	600㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和3年	95次	政庁地区北方	700㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和4年	96次	政庁地区北方	280㎡	政庁北・北西側の沢状地形における遺構の確認
	97次	外郭南辺（坂下地区）	150㎡	第Ⅰ期外郭南門西側の区画施設の確認
令和5年	98次	外郭西辺中央部（新西久保地区）	330㎡	外郭西辺区画施設の確認
	99次	政庁地区北方	300㎡	政庁北・北西側の沢状地形における遺構の確認

第17表 多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画



図版 42 多賀城跡発掘調査事業第 11 次 5 カ年計画発掘調査区的位置

## V. 付 章

### 1. 関連研究・普及活動

#### (1) 多賀城跡環境整備事業

多賀城跡環境整備事業は昭和45年度から5ヵ年計画を積み重ねる形で実施しており、平成27年度を初年次とする第10次5ヵ年計画から、政庁南面地区を対象に整備工事を進めている（第18表）。これは当地区に位置する政庁南大路や城前官衝の遺構表示を中心としたもので、多賀城創建1300年の記念の年に当たる令和6年の供用開始をめざしている。

令和5年度は、令和5年度整備工のほか、地下遺構保護のために一部設計変更が生じて事業を繰り越した令和4年度整備工を実施した。このうち令和4年度分は遺構表示工や張芝工等を実施し、令和5年12月15日に完了した。令和5年度分は説明板・便益施設（ベンチ等）の設置や張芝工等を実施し、工事の一部を令和6年度へ繰り越すこととなった。

	年 度	整備地区	計画内容	対象面積
第10次5ヵ年計画	平成27(2015)	政庁南面地区	政庁南大路復元舗装、総合解説広場補修	24,000㎡
	平成28(2016)		政庁南大路復元舗装、地形測量	
	平成29(2017)		基盤整備工、実施設計	
	平成30(2018)		造成工、法面工、擁壁工、雨水排水工	
	令和元(2019)		雨水排水工、災害復旧、張芝工	
第11次5ヵ年計画	令和2(2020)	政庁南面地区	政庁南大路石垣復元・路面復元舗装、大路関連遺構表示	—
	令和3(2021)		政庁南大路復元舗装、城前官衝床張建物表示、建物構造復元	
	令和4(2022)		城前官衝床張建物表示、土間建物表示、掘立柱榭表示	
	令和5(2023)		園路工、解説広場工、便益施設工、張芝工	
	令和6(2024)		城前官衝土間建物表示、掘立柱榭表示、張芝工	
	令和6(2024)	作賀地区	解説板、張芝、便益施設	
		空堀露出展示再整備に向けた調査・設計		

第18表 多賀城跡環境整備事業第10・11次5ヵ年計画（令和4年度までは実績）

#### (2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更する際には、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡に影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査や工事に際する立会を行っている。令和5年度の現状変更は、令和4年度以前申請の1件（第19表1）と、今年度に申請があった5件（2～6）である。1・3・5は多賀城市が事業主体となり、史跡整備に伴い実施されている事業である。1は、南門周辺の地形修復に伴う擁壁撤去および階段設置工事に立会い、掘削が盛土内に取まるか、すでに削られた地山部分で最低限にとどまることを確認した。3は、ガイダンス施設建設工事に伴って確認調査を実施し（図版1）、古代の溝2条と井戸1基を検出し、土師器・須恵器・須恵系土器・瓦などが出土したため、建物基礎を遺構面より上にするよう調整をした。また、電気配線の設置に立会い、掘削が盛土・表土内に取まるのを確認した。そのほか、2は個人住宅の土留擁壁設置に伴い確認調査・工事立会を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。4は既存の建物解体に伴う基礎撤去工事に立会い、掘削が掘方内に取まるのを確認した。5・6は今後、施工に合わせて工事立会を実施する予定である。以上のほかに、現状変更許可の権限が市に移譲されている水道管・電柱等の工事

に伴い、7件の立会を実施（一部は予定）している。

番号	変更事項	申請者	変更箇所	申請	文化庁許可	対応
1	南門復元工事 (地形修復)	多賀城 市長	多賀城市市川字 坂下ほか	令和3年 10月7日	3文庁第1640号 令和3年11月19日	工事立会 令和5年9月5～7日 令和5年10月16日 令和6年1月12日
2	土留擁壁の設置等	個人	多賀城市市川字 五万崎	令和5年 3月30日	5文庁第678号 令和5年5月26日	確認調査・工事立会 令和5年6月30日
3	ガイダンス施設建設 工事等	多賀城 市長	多賀城市市川字 坂下ほか	令和5年 6月14日	5文庁第1892号 令和5年7月21日	確認調査 令和5年8月7日～9月20日 工事立会 令和5年11月21日
4	建物等解体	法人	多賀城市市川字 城前	令和5年 7月21日	5文庁第2667号 令和5年9月15日	工事立会 令和5年10月30日
5	サイン設置及び撤去	多賀城 市長	多賀城市市川字 城前	令和5年 10月27日	5文庁第4007号 令和5年12月15日	工事立会予定
6	建物解体	個人	多賀城市市川字 城前	令和5年 11月8日	5文庁第4383号 令和6年1月19日	工事立会予定

第19表 令和5年度現状変更一覧

### (3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続している。平成21年度からは多賀城創建期の窯跡群の発掘調査を実施し、造瓦体制とその社会的背景の解明を主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第8次5ヵ年計画を進めていた。平成23年度以降は、東日本大震災による復興事業に伴う発掘調査の支援を優先したため事業を休止していたが、令和3年度から再開した。今年度は、第8次5ヵ年計画の5年次目として、大崎市教育委員会の共催を得て大崎市大吉山瓦窯跡の第3次調査を実施した。調査面積は約380㎡で、総事業費は3,161千円（50%国庫補助）である。

今回は、窯跡全体の様相の把握を目的として、指定地の西部を調査し、窯3基と焼成土坑2基を確認した。3次に渡る調査により、本窯跡には7基の窯と焼成土坑2基が存在し、多賀城創建期の瓦が焼成され、木炭も脇で生産されていたことが判明した。創建期の瓦窯跡群で木炭窯が確認されるのは初めてで、窯場の構成や生産体制を考えるうえで重要な成果であり、その詳細を多賀城関連遺跡発掘調査報告書第39冊として刊行した。

### (4) 遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査で検出した遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら研究を行うものである。本年度は、県内の城柵官衙遺跡の発掘調査として赤井官衙遺跡（東松島市）、整備の実例確認として一乗谷朝倉氏遺跡（福井県福井市）に赴き多賀城との関係や調査・整備方法等について資料を得た。

## (5) 公開講座の開催

当研究所の研究員がそれぞれの専門分野の視点から、これまでの調査研究の蓄積を踏まえて、多賀城跡や古代東北地方に関する一般向けの講座を開催した。会場は東北歴史博物館の講堂を使用した。申込者・参加者は計134名であった。

第1回 11月4日(土) 13:30～15:45

- ①「製鉄技術導入—陸奥南部—」(鈴木貴生)
- ②「多賀城政庁第Ⅳ期の軒瓦と新羅系瓦」(矢内雅之)

第2回 11月19日(日) 13:30～15:00

「多賀城の創建」(吉野 武)

また、令和5年6月に多賀城跡出土木簡が重要文化財に指定されたことを記念して、渡辺晃宏氏を講師に招き特別講演会を開催した。申込者・参加者は111名であった。

多賀城歴史講座 特別講演会 11月12日(日) 13:30～15:15

「古代の木簡と多賀城」 講師：渡辺晃宏氏(奈良大学教授)

## (6) その他

### 1) 現地説明会の開催、見学会などへの対応

発掘調査の成果を一般に公開するため、調査の進捗状況をホームページで公開するとともに、下記の現地説明会を行った。

大古山瓦窯跡第3次発掘調査現地説明会	古田和誠・矢内雅之	令和5年7月22日
多賀城跡第99次発掘調査現地説明会	初鹿野博之・村田晃一・鈴木貴生	令和5年10月14日

また、以下の団体の史跡見学等に関して説明を行った。

七ヶ浜町歴史資料館歴史探訪	関口重樹	令和5年9月21日
日本考古学協会宮城大会エクスカーション	吉野武・鈴木貴生・矢内雅之	令和5年10月30日
塩竈市立浦戸小学校6年生社会科校外学習	古田和誠	令和5年11月25日
宮城県文化財所有者連絡協議会秋季研修会	関口重樹	令和5年11月28日
全国建設技術センター等協議会北海道・東北ブロック支部技術部会現地視察	関口重樹	令和5年12月8日

### 2) 資料の閲覧・貸出などに関する協力

以下の機関・団体等への資料の閲覧・貸出などに際し、準備・説明等をした。

大崎市教育委員会、学校法人河合塾、(株)朝日放送テレビ、(株)岩波書店、(株)河合出版、(株)敬文社、(株)ジェイアール東日本企画、(株)JTBパブリッシング、(株)雄山閣、(株)吉川弘文館、(公財)宮城県観光連盟、郡山市、古代交通研究会、仙台市教育委員会、相馬市教育委員会、多賀城市教育委員会、東北大学大学院文学研究科考古学研究室、日本考古学協会2023年度宮城大会実行委員会、宮城県考古学会、ほか個人3名

### 3) 各機関・委員会などへの協力

- 吉野 武 秋田市秋田城跡環境整備委員会委員、秋田城跡発掘調査事業指導、秋田県弘田柵跡環境整備審議会 委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、特別史跡多賀城跡附寺跡保存活用計画策定委員会委員、多賀城市文化財保護委員会委員、多賀城跡あやめまつり実行委員会顧問、栗原市史跡伊治城跡調査整備指導委員会委員、岩沼市原遺跡調査検討会委員、多賀城創建1300年記念事業実行委員会幹事幹事、古代柵官衙遺跡検討会世話人代表
- 関口重樹 亙理町三十三間堂遺跡整備委員会委員、塩竈市文化財保護審議会委員、塩竈市文化財保存活用地域計画作成調査部会委員、東松島市赤井官衙遺跡群保存活用計画策定検討委員会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、多賀城創建1300年記念事業実行委員会幹事幹事
- 初鹿野博之 東京大学総合研究博物館研究事業協力者
- 村田晃一 弘田柵跡調査指導委員会指導委員、堂後遺跡及び勝常寺境内調査指導委員会調査指導委員、名取市史編さん専門部会専門部員（原始・古代部会）

### 4) 講演会・研究会などへの協力・執筆

- 矢内雅之「2022年の考古学界的動向 古代 東北」『考古学ジャーナル』No.782 令和5年4月28日
- 村田晃一「陸奥国中部における古代の館と有力者居宅」『宮城考古学』第25号 令和5年5月19日
- 吉野 武「特別史跡多賀城跡の調査と整備について」令和5年度仙台地方行政連絡調整会議  
仙台合同庁舎 令和5年6月2日
- 古田和誠「古代多賀城と利府 ～遺跡から探る利府町の歴史～」利府町芸術文化協会  
文化交流センターリフノス 令和5年6月11日
- 村田晃一「陸奥国中部における支配領域の拡大と交通、社会 一飛鳥・奈良時代を中心に」  
古代交通研究会第22回大会 慶応義塾大学三田キャンパス 令和5年7月2日
- 吉野 武「古代の陸奥国府多賀城と玉前関 一竹駒神社と小野篁」令和5年度全国稲荷会記念講演  
竹駒神社 令和5年8月6日
- 関口重樹「多賀城南門復元について」仙台明治青年大学郷土史を学ぶ会  
仙台市生涯学習支援センター 令和5年8月17日
- 吉野 武「文字史料からみた古代の「いわき」と多賀城」いわき市考古資料館企画展講演会  
いわき市生涯学習プラザ 令和5年9月9日
- 吉野 武「特別史跡多賀城跡の調査と整備」第20回仙山交流連携促進会議 東北歴史博物館  
令和5年9月20日
- 古田和誠「沿岸北部南での復興調査成果」（共同発表）日本考古学協会2023年度宮城大会  
東北学院大学ホーイ記念館 令和5年10月29日
- 鈴木貴生「東辺における7世紀の須恵器・鉄生産」（共同発表） 同上
- 初鹿野博之・矢内雅之「多賀城跡軒瓦編年第四期の設定と新羅系の瓦」 同上
- 村田晃一「多賀城成立 一宮城郡北部と多賀城」(共同発表) 同上
- 村田晃一・吉野武「討論：東辺地域の境界と律令国家の形成一柵の成立から多賀城創建へ」  
同上



初鹿野博之「多賀城の最新調査成果」令和5年度歴史講座	多賀城市中央公民館	令和5年11月9日
吉野 武「福島市西久保遺跡と出土木簡」木簡学会第45回研究集会		
	奈良文化財研究所	令和5年12月2日
鈴木貴生「多賀城跡第98次・99次調査」令和5年度宮城県遺跡調査成果発表会報告		
	山元町中央公民館	令和5年12月10日
古田和誠「大吉山瓦窯跡 第3次発掘調査」	同上	
関口重樹「特別史跡多賀城跡附寺跡について」宮城大学事業構想学群「地域創生演習Ⅱ」(現地演習)		
	特別史跡多賀城跡附寺跡	令和6年2月6日
村田晃一「役所の違いからみた古代東北」いわき市考古資料館企画展講演会		
	いわき市生涯学習プラザ	令和6年2月12日
吉野 武「特集 城柵官衙遺跡研究の歩みと成果、次代への課題 討論」		
	第50回古代城柵官衙遺跡検討会 東北歴史博物館	令和5年2月24日
初鹿野博之「特集報告3・多賀城」	同上	
鈴木貴生「多賀城跡第98・99次調査」(紙上報告)	同上	
矢内雅之「大吉山瓦窯跡第3次発掘調査」(紙上報告)	同上	
関口重樹・初鹿野博之・古田和誠・村田晃一・鈴木貴生・矢内雅之 『古代東北の城柵・官衙遺跡』(共著)		
	古代城柵官衙遺跡検討会50周年記念大会実行委員会	令和6年2月22日
村田晃一「古墳時代の生活 ―カマドの出現と食生活―」第3回宮城講座		
	じょーもびあ宮城	令和6年3月3日

## 5) 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県教育委員会教育長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

吉野 武 (客員教授)	文化財科学研究演習
吉野 武 (客員教授)・初鹿野博之 (客員准教授)	文化財科学研究実習Ⅰ

## 2. 組織と職員

### 〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

(昭和41年4月26日教育委員会規則第4号 最終改正平成31年4月教育委員会第1号)

第13条の五 文化財課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城附寺跡(これに関連する遺跡を含む。以下同じ)の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

一 特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。

二 特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。

三 特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。

四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

### 〈職員〉

所 長	(兼博物館 管理部長)	(兼博物館 副参事兼総括次長)
吉野 武	千葉 胤継	加藤 広

#### 〈〈研究班〉〉

上席主任研究員(班長)	関口 重樹(兼博物館)
副主任研究員(副班長)	初鹿野 博之
副主任研究員	古田 和誠
研 究 員	村田 晃一
技 師	鈴木 貴生
技 師	矢内 雅之

#### 〈〈兼東北歴史博物館管理班〉〉

(兼博物館次長(班長))	門脇 秀実
(兼博物館主査(副班長))	齋藤 いずみ
(兼博物館主任主査)	鉄本 紀章
(兼博物館主事)	菅原 皓平

### 3. 沿革と実績

#### (1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年	事 項
大正11	【10月】多賀城跡が史蹟名勝天然記念物保存法により史蹟指定(10/12)。指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織し、5年計画による多賀城跡の発掘調査の初年度事業として多賀城跡と多賀城東寺跡の地形図を作成
36	【8月】多賀城東寺跡第1次発掘調査実施(県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査員長は伊東信雄東北大学教授)
37	【8月】多賀城東寺跡第2次発掘調査実施。主要伽藍配置が判明
38	【8月】多賀城跡政庁地区発掘調査(第1次)開始。以後40年8月(第3次)まで実施。政庁地区の祠堂院的な建物配置が判明
41	【4月】多賀城跡附寺跡特別史蹟に昇格指定(4/11)
43	【11月】多賀城跡が多賀城跡政庁地区の発掘調査(第4次)を再開
44	【4月】宮城県多賀城跡調査研究所設立 【7月】多賀城跡調査研究指導委員会設置(委員長伊東信雄)。研究所による多賀城跡調査研究事業開始 【10月】色麻村日目の出山跡跡の発掘調査実施
45	【3月】『多賀城跡調査報告1—多賀城東寺跡—』刊行 【4月】研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48	【10月】金瓶地区を対象とした第21次調査で計帳様文書断簡を発見
49	【2月】外郭西辺地区の追加指定が官報告示(2/18) 【4月】多賀城関連遺跡発掘調査事業開始 【8月】横生城跡の発掘調査に着手(昭和50年度まで継続) 【8月】プレハブ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
52	【7月】伊弉城跡の発掘調査に着手(昭和54年度まで継続(平成15年6月に史蹟指定))
53	【4月】研究第一科・第二科の2科制となる。遺構調査研究事業開始 【6月】漆紙文書の発見を報道発表。これにより研究所が山本社一部加事から表彰を受ける
54	【3月】多賀城跡調査研究所資料Ⅰ『多賀城漆紙文書』刊行
55	【3月】『多賀城跡 政庁跡 図録編』刊行 【3月】館前遺跡の追加指定が官報告示(3/24) 【7月】名生館遺跡の発掘調査に着手(昭和60年度まで継続(昭和62年8月に史蹟指定))。初年度の調査で8世紀初頭の官倉中扉部を出土
57	【3月】『多賀城跡 政庁跡 本文編』刊行
58	【11月】第43・44次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59	【3月】多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示(3/27)
60	【9月】名生館遺跡関連合戦館瓦葺跡発掘調査実施
61	【8月】東山遺跡の発掘調査に着手(平成4年度まで継続(平成11年1月に史蹟指定))
62	【11月】第53次調査で奈良時代の外郭東門を発見
平成2	【6月】柏木遺跡の追加指定が官報告示(6/28) 【11月】多賀城跡調査研究指導委員会に南門—政庁間整備活用専門部会を設置
4	【11月】日本古来の「かな」漆紙文書について報道発表
5	【8月】下野野郎跡跡の調査を実施し、3基の多賀城創建瓦葺跡を発見 【9月】山王遺跡千利田地区の追加指定が官報告示(9/22)
6	【8月】横生城跡の発掘調査を再開(平成13年度まで継続。政庁の全貌を解明)
7	【6月】第31回指導委員会において南門—政庁間整備活用計画案承認
9	【11月】多賀城碑屋原の解体修理および跡地部分の発掘調査を実施
10	【6月】多賀城碑の重要文化財(古文書)指定が官報告示(6/30)
11	【4月】2科制が廃され、研究科となる 【4月】東北歴史博物館の建物に移転
14	【1月】『多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績』により第51回河北文化賞を受賞 【8月】亀岡遺跡の発掘調査に着手(平成15年度まで継続)
15	【3月】『多賀城跡—発掘のあゆみ—』刊行
16	【4月】多賀城政庁跡の内整備に先立ち、政庁地区の調査に着手(平成20年度まで継続) 【5月】木戸跡跡の発掘調査に着手(平成18年度まで継続) 【7月】第74次調査で第1期外郭南門を新たに発見
17	【4月】多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県条例第13号により多賀城跡調査研究委員会を設置
19	【8月】日の出山跡跡の発掘調査に着手(平成22年度まで継続)
20	【4月】多賀城政庁跡の内整備に着手(平成26年度まで継続)
22	【3月】『多賀城跡 政庁跡 補遺編』刊行 【9月】多賀城跡発掘調査50周年記念事業を開催 【9月】木商学会多賀城特別研究会を開催 【10月】『多賀城跡—発掘のあゆみ2010—』刊行
23	【3月】多賀城跡調査研究所資料Ⅱ『多賀城跡本編Ⅰ』刊行
24	【5月】東日本大震災の復旧工事に伴い、政庁正殿跡を調査。宝龜11(780)年の火災による焼失と建替えを確認
25	【3月】多賀城跡調査研究所資料Ⅲ『多賀城跡本編Ⅱ』刊行
26	【2月】多賀城跡出土木簡と多賀城跡出土漆紙文書の県指定有形文化財(古文書)指定が官報告示(2/25) 【3月】多賀城跡調査研究所資料Ⅳ『多賀城跡本編Ⅲ』刊行
27	【4月】多賀城政庁南面地区の整備に着手(令和5年度まで継続)
28	【2月】鎮守府侍の文書について報道発表 【2月】特別史蹟多賀城跡附寺跡整備基本計画を策定
29	【3月】『多賀城跡 外郭跡Ⅰ—南門地区—』刊行
30	【3月】『多賀城跡 政庁南面地区—城前官衙遺構・遺物編—』刊行
31	【3月】『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ—城前官衙結核編—』刊行
令和2	【3月】多賀城跡調査研究所資料Ⅴ『多賀城跡補遺編』・『多賀城跡調査研究所沿革史—設立50周年記念誌—』・『多賀城跡—発掘のあゆみ2020—』刊行
3	【3月】『多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ—政庁南大路・南北大路—』刊行 【5月】大古山跡跡の発掘調査に着手(令和5年度まで継続)
4	【3月】多賀城跡出土漆紙文書の重要文化財(古文書)指定が官報告示(3/22)
5	【6月】多賀城跡出土木簡の重要文化財(古文書)指定が官報告示(6/27)

## (2) 事業実績

### 1) 多賀城跡発掘調査事業の実績

計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000
		6次	政庁地区北東部	2,079	
		7次	外郭南辺中央部(多賀城跡付近)	264	
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000
		9次	政庁地区南西部	2,046	
		10次	外郭西辺中央部	495	
	昭和46	11次	外郭東辺南部	660	12,000
		12次	外郭中央地区北部	3,795	
		13次	外郭東辺東門付近	1,600	
	昭和47	14次	外郭東地区北部	2,086	13,000
15次		湖の池周辺	112		
16次		大畑地区北半部	1,320		
17次		外郭北東部・北西隅	1,729		
18次		外郭中央地区北部	2,937		
昭和48	19次	政庁地区北西部	2,640	17,000	
	20次	外郭南辺中央部	990		
	21次	外郭西地区中央部	1,485		
	22次	城外南方面(平遷跡)	3,465		
昭和49	23次	外郭東地区北部(宇大堀)	3,300	17,000	
	24次	外郭南東隅	2,640		
第2次5カ年計画	昭和50	25次	多賀城慶寺跡南大門埋定地	2,310	22,000
		26次	多賀城慶寺跡中門前方地区	2,310	
	昭和51	27次	委社宮西隣市川久保地区	660	22,000
		28次	五万崎地区	2,310	
	昭和52	29次	五万崎地区	2,310	22,000
		30次	五万崎地区	1,980	
	昭和53	31次	政庁北方隣接地区	1,980	22,000
		32次	政庁北方隣接地区	1,000	
		33次	外郭西門地区	1,000	
	昭和54	34次	菰山地区南低湿地	1,300	30,000
35次		湖の池南地区	900		
昭和55	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800	30,000	
	37次	多賀城外南地方(御神川御釣地区)	700		
昭和56	38次	作貫南端低湿地(緊急調査)	50	35,000	
	39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500		
	40次	外郭南辺東部(立石地区・堀池)	80		
	41次	外郭東辺南端部(田屋場東端地区)	1,200		
昭和57	42次	外郭東地域中央部(作貫地区)	500	32,000	
	43次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800		
昭和58	44次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500	32,000	
	45次	坂下地区	70		
昭和59	46次	外郭西門地区	750	29,000	
	47次	外郭西辺中央部	1,000		
昭和60	48次	外郭南門地区	800	29,000	
	49次	外郭北門埋定地区	450		
昭和61	50次	政庁南地区	900	29,000	
	51次	外郭北東隅東地区	500		
昭和62	52次	大畑地区及び東辺外地区	500	29,000	
	53次	外郭東門北東地区	1,000		
昭和63	54次	外郭東門東地区	1,000	29,000	
	55次	外郭南辺中央部(作貫地区)	500		

計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第3次5カ年計画	平成元	56次	大畑地区北半部	1,550	29,000
		57次	外郭東辺南半部(西沢地区)	500	
	平成2	58次	大畑地区中央部	1,470	30,000
		59次	大畑地区中央部東側	900	
	平成3	60次	大畑地区中央部	1,450	30,000
		61次	湖の池地区	150	
	平成4	62次	大畑地区南半部	1,100	35,000
		63次	大畑地区北半部	1,700	
	平成5	64次	大畑地区北部	3,000	35,000
	第4次5カ年計画	平成6	65次	外郭東門北半部・現状変更に伴う調査	2,200
平成7		66次	大畑地区北西部	3,000	35,000
平成8		67次	大畑地区西部	3,000	39,000
平成9		68次	大畑地区西部・多賀城跡	2,650	36,000
平成10		69次	城前地区南部	2,000	36,000
第5次5カ年計画	平成11	70次	城前地区南部	2,000	37,700
	平成12	71次	城前地区南部	2,000	32,300
	平成13	72次	南門西側築地跡・南門一政庁間道路跡	1,000	28,900
	平成14	73次	南門東側築地跡・南門一政庁間道路跡	1,800	26,000
	平成15	74次	南門一政庁間道路跡	1,000	25,220
第6次5カ年計画	平成16	75次	外郭北辺中央部	500	
	平成16	76次	政庁東隣・税殿・北辺地区	1,640	24,463
	平成17	77次	政庁東棟・西脇堀・南南地区	970	23,730
	平成18	78次	政庁地区・政庁南南地区・城前地区	2,700	16,610
	平成19	79次	政庁・外郭南門間道路、城前・湖池地区	1,350	14,168
第7次5カ年計画	平成20	80次	田屋場地区・政庁南西地区	930	12,752
	平成21	81次	湖の池地区・政庁南西地区	900	12,064
	平成22	82次	外郭東辺伊保石地区	580	11,460
	平成23	83次	外郭南辺五万崎地区	960	11,447
	平成24	84次	外郭南辺五万崎地区	445	11,294
第8次5カ年計画	平成24	85次	政庁地区 正殿跡	415	
	平成25	86次	外郭南辺坂下地区	350	10,300
	平成26	87次	外郭南辺田屋場・坂下地区	910	9,901
	平成27	88次	外郭南辺立石地区	390	9,424
	平成27	89次	政庁南大堀・城前地区	280	
第9次5カ年計画	平成28	90次	外郭南辺坂下地区	430	9,224
	平成29	91次	外郭南門田屋場地区(南北大路)	720	10,347
	平成30	92次	外郭南辺五万崎地区	200	9,255
	令和元	93次	外郭西辺丸山地区	300	10,688
	令和2	94次	政庁地区北方	600	10,629
第10次5カ年計画	令和3	95次	政庁地区北方	700	8,742
	令和4	96次	政庁地区北方	280	
	令和4	97次	外郭南辺坂下地区	150	8,898
	令和5	98次	外郭西辺新西久保地区	330	
	令和5	99次	政庁地区北方	300	8,755

調査面積累計	121,433㎡
調査費用累計(千円)	1,207,271
指定地総面積	約1,070,000㎡
調査面積/総面積	約11%

## 2) 多賀城跡附古跡環境整備事業の実績

計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費 (千円)	計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和45	政庁地区	南門裏側・東脇廻表示	10,000	第7次5カ年計画	平成12	柏木遺跡	造成・排水・法面保護	14,400
	昭和46		正廻・築地堀表示	20,000		平成13		法面・開路・植栽・排水	19,700
	昭和47		西脇廻・築地堀表示	25,000		平成14		法面保護・開路	9,300
	昭和48		北西門・築地堀表示	20,000		平成15		法面・遺構表示・開路・植栽	9,020
	昭和49		外郭東門地区			東門・惣六住居表示		平成16	開路広場・排水・植栽・照明
昭和50	六月坂地区	掘立柱建物・倉庫・道路表示	20,000	第8次5カ年計画	平成17	案内板・標柱	案内板標柱・サイン再整備	15,738	
昭和51	外郭東南脚地	木質遺構保存施設	20,000		平成18	外郭北辺東北			基礎整備・広場・自然育成
昭和52	湯の池地区	南辺築地堀表示	16,000		平成19	隅(木道内整備)	構造物撤去・広場・便益施設・自然育成	9,462	
昭和53		多賀城碑周辺保護	16,000		平成20		築地堀舗装撤去	8,514	
昭和54	南門地区	南門・築地堀保護	20,000		平成21	築地堀舗装撤去	8,500		
昭和55	南門地区	南門周辺丘陵の地形修復・緑化修景		平成22	政庁地区再整備	追加遺構表示(西脇廻・西棟)	8,084		
昭和56	外郭南築地東半部	開路・便益施設・緑化修景	30,000	平成23		追加遺構表示(東脇廻・東棟)	8,104		
		緑化修景		平成24		追加遺構表示(後廻)	7,956		
	南門(資料館・南門)	開路・便益施設・緑化修景	28,000	平成25		敷地造成(北廻)	7,560		
昭和57	外郭南門地区東斜面	開路		平成26		追加遺構表示(北廻)	8,636		
昭和58	作真地区	遺構保護盛土・緑化修景	30,000	第9次5カ年計画	平成27	政庁南大路・説明板・休憩施設再整備	8,193		
昭和59	作真地区	建物表示・便益施設・緑化修景			27,000	平成28	政庁南大路側壁・地形測量	13,000	
昭和60	作真地区	土塁及び空堀表示・便益施設	27,000		平成29	構造物撤去・実施設計	15,000		
第4次5カ年計画	昭和61	政庁南地区	地形修復・道路復元・緑化修景		27,000	平成30	基礎整備(造成・排水)	76,708	
	作真地区	便益施設	令和元			政庁南大路復元・大路側壁遺構表示	163,833		
	畷山地区	緑化修景	令和2	床張建物表示、建物構造復元		211,238			
	昭和62	作真地区北部	開路・緑化修景・便益施設	27,000	令和3	床張建物表示、土間建物表示、掘立柱解体表示	132,293		
	政庁地区	便益施設・開路・緑化修景	令和4		土間建物表示、掘立柱解体表示、便益施設	63,083			
	畷山地区	便益施設・開路・緑化修景	令和5		説明板、便益施設、藁芝	35,641			
昭和63	作真地区北部・丘陵南西裾部	便益施設・開路・緑化修景	27,000	令和6	作真地区	空堀露出展示再整備に向け調査・設計			
平成元	北辺地区南半部	便益施設・開路・緑化修景	27,112	第5次5カ年計画	平成2	便益施設・開路・緑化修景	30,000		
平成2	北辺地区北半部	便益施設・開路・緑化修景	30,000		平成3	便益施設・開路・緑化修景	30,000		
平成3	東門・大堀地区東側部	便益施設	30,000		平成4	便益施設	30,000		
平成4		地形修復・開路・緑化修景			平成5	東門・大堀地区東側部	建物表示・便益施設	35,000	
平成5	東門・大堀地区東側部	建物表示・便益施設	35,000		平成6	便益施設	35,000		
平成6		便益施設			平成7	道路復元・築地堀表示・便益施設・緑化修景	30,000		
平成7	東門・大堀地区西側北半部	地形修復・道路復元・緑化修景	39,000		平成8	道路復元・道路復元・緑化修景	39,000		
平成8	南門地区	道路表示・便益施設	51,000		平成9	多賀城碑覆屋解体修理	51,000		
平成9		多賀城碑覆屋解体修理			平成10	東門・大堀地区西側北半部	道路表示・排水・緑化修景	35,000	
平成10	東門・大堀地区西側北半部	道路表示・排水・緑化修景	35,000		平成11	建物表示・便益施設・緑化修景	31,500		
平成11		建物表示・便益施設・緑化修景							

宮城県による整備面積(令和4年度末)	
多賀城跡	168,964㎡
政庁地区	18,725㎡
六月坂地区	9,335㎡
南辺東地区	18,462㎡
南門地区・南辺西地区	13,824㎡
作真地区・東辺地区	27,934㎡
北辺地区	33,947㎡
東門・大堀地区	25,299㎡
政庁南面地区	21,438㎡
柏木遺跡	3,759㎡

整備事業費総計 1,676,857千円

### 3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5カ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
第3次5カ年計画	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡 合戦炊屋敷跡	第6次発掘調査	範囲確認調査 関連遺跡調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
第4次5カ年計画	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官舎中核部の把握	1,200	7,000
	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
第5次5カ年計画	平成5	下伊場野宮跡	地形図作成・発掘調査	多賀城創建期遺跡調査	600	14,000
	平成6	桃生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官舎の調査	800	17,000
第6次5カ年計画	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	龜岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
第7次5カ年計画	平成15	龜岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
	平成16	木戸宮跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	平成17	木戸宮跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	木戸宮跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	六月坂遺跡 日の出山宮跡群	発掘調査 試掘調査	竊穴墓群の調査 A地点北側の調査	1,000 200	3,520
第8次5カ年計画	平成20	日の出山宮跡群	第1次調査	F地点南側の調査	490	3,168
	平成21	日の出山宮跡群	第2次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	平成22	日の出山宮跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	平成23	大古山丘宮跡	東日本大震災により中止		0	0
	平成24～令和2	事業休止			0	0
令和3	大古山丘宮跡	地形図作成・第1次発掘調査	遺構分布状況の把握	145	2,824	
	令和4	大古山丘宮跡	第2次発掘調査	指定地東部の調査	260	2,834
	令和5	大古山丘宮跡	第3次発掘調査	指定地西部の調査	380	3,161

調査面積累計	39,740㎡
調査費用累計	309,446千円

#### 4) 研究成果等刊行物

##### ①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『年報1969』(第5・6・7次調査)	昭和45年3月	『年報1996』(第67次調査)	平成9年3月
『年報1970』(第8・9・10・11次調査)	昭和46年3月	『年報1997』(第68次調査、 多賀城碑屋解体修理)	平成10年3月
『年報1971』(第12・13・14次調査)	昭和47年3月	『年報1998』(第69次調査)	平成11年3月
『年報1972』(第15・16・17・18次調査)	昭和48年3月	『年報1999』(第70次調査)	平成12年3月
『年報1973』(第19・20・21・22次調査)	昭和49年3月	『年報2000』(第71次調査)	平成13年3月
『年報1974』(第23・24次調査)	昭和50年3月	『年報2001』(第72次調査、 環境整備)	平成14年3月
『年報1975』(第25・26・27次調査、 東外郭線南端部)	昭和51年3月	『年報2002』(第73次調査)	平成15年3月
『年報1976』(第28・29次調査)	昭和52年3月	『年報2003』(第74・75次調査)	平成16年3月
『年報1977』(第30・31次調査)	昭和53年3月	『年報2004』(第76次調査)	平成17年3月
『年報1978』(第32・33次調査、 環境整備)	昭和54年3月	『年報2005』(第77次調査、 環境整備)	平成18年3月
『年報1979』(第34・35次調査、 環境整備)	昭和55年3月	『年報2006』(第78次調査)	平成19年3月
『年報1980』(第36・37次調査)	昭和56年3月	『年報2007』(第79次調査)	平成20年3月
『年報1981』(第38・39・40次調査)	昭和57年3月	『年報2008』(第80次調査)	平成21年3月
『年報1982』(第41・42次調査)	昭和58年3月	『年報2009』(第81次調査)	平成22年3月
『年報1983』(第43・44次調査)	昭和59年3月	『年報2010』(第82次調査、 環境整備)	平成23年3月
『年報1984』(第45・46・47次調査、 環境整備)	昭和60年3月	『年報2011』(第83次調査)	平成24年3月
『年報1985』(第46・48・49次調査)	昭和61年3月	『年報2012』(第84・85次調査)	平成25年3月
『年報1986』(第49・50・51次調査)	昭和62年3月	『年報2013』(第86次調査)	平成26年3月
『年報1987』(第50・52・53次調査)	昭和63年3月	『年報2014』(第87次調査)	平成27年3月
『年報1988』(第54・55次調査)	平成元年3月	『年報2015』(第88・89次調査、 環境整備)	平成28年3月
『年報1989』(第56・57次調査)	平成2年3月	『年報2016』(第90次調査)	平成29年3月
『年報1990』(第58・59次調査)	平成3年3月	『年報2017』(第91次調査)	平成30年3月
『年報1991』(第60・61次調査)	平成4年3月	『年報2018』(第92次調査)	平成31年3月
『年報1992』(第62・63次調査)	平成5年3月	『年報2019』(第93次調査)	令和2年6月
『年報1993』(第64次調査)	平成6年3月	『年報2020』(第94次調査)	令和3年3月
『年報1994』(第65次調査、 環境整備)	平成7年3月	『年報2021』(第95次調査)	令和4年3月
『年報1995』(第66次調査)	平成8年3月	『年報2022』(第96・97次調査)	令和5年3月

##### ②多賀城関連遺跡調査報告書

『続生成跡Ⅰ』(第1冊)	昭和50年3月	『続生成跡Ⅲ』(第20冊)	平成7年3月
『続生成跡Ⅱ』(第2冊)	昭和51年3月	『続生成跡Ⅳ』(第21冊)	平成8年3月
『伊治城跡Ⅰ』(第3冊)	昭和53年3月	『続生成跡Ⅴ』(第22冊)	平成9年3月
『伊治城跡Ⅱ』(第4冊)	昭和54年3月	『続生成跡Ⅵ』(第23冊)	平成10年3月
『伊治城跡Ⅲ』(第5冊)	昭和55年3月	『続生成跡Ⅶ』(第24冊)	平成11年3月
『名生館遺跡Ⅰ』(第6冊)	昭和56年3月	『続生成跡Ⅷ』(第25冊)	平成12年3月
『名生館遺跡Ⅱ』(第7冊)	昭和57年3月	『続生成跡Ⅷ』(第26冊)	平成13年3月
『名生館遺跡Ⅲ』(第8冊)	昭和58年3月	『続生成跡Ⅹ』(第27冊)	平成14年3月
『名生館遺跡Ⅳ』(第9冊)	昭和59年3月	『龜岡遺跡Ⅰ』(第28冊)	平成15年3月

『名生館遺跡Ⅴ』 (第10冊)	昭和60年3月	『亀岡遺跡Ⅱ』 (第29冊)	平成16年3月
『名生館遺跡Ⅵ』 (第11冊)	昭和61年3月	『木戸窯跡群Ⅰ』 (第30冊)	平成17年3月
『龜山遺跡Ⅰ』 (第12冊)	昭和62年3月	『木戸窯跡群Ⅱ』 (第31冊)	平成18年3月
『龜山遺跡Ⅱ』 (第13冊)	昭和63年3月	『木戸窯跡群Ⅲ』 (第32冊)	平成19年3月
『龜山遺跡Ⅲ』 (第14冊)	平成元年3月	『六月坂遺跡ほか』 (第33冊)	平成20年3月
『龜山遺跡Ⅳ』 (第15冊)	平成2年3月	『口の出山窯跡群Ⅰ』 (第34冊)	平成21年3月
『龜山遺跡Ⅴ』 (第16冊)	平成3年3月	『口の出山窯跡群Ⅱ』 (第35冊)	平成22年3月
『龜山遺跡Ⅵ』 (第17冊)	平成4年3月	『口の出山窯跡群Ⅲ』 (第36冊)	平成23年3月
『龜山遺跡Ⅶ』 (第18冊)	平成5年3月	『大古山瓦窯跡Ⅰ』 (第37冊)	令和4年3月
『下伊場野窯跡』 (第19冊)	平成6年3月	『大古山瓦窯跡Ⅱ』 (第38冊)	令和5年3月

### ③研究紀要

『研究紀要Ⅰ』	昭和49年3月	『研究紀要Ⅴ』	昭和53年3月
『研究紀要Ⅱ』	昭和50年3月	『研究紀要Ⅵ』	昭和54年3月
『研究紀要Ⅲ』	昭和51年3月	『研究紀要Ⅶ』	昭和55年3月
『研究紀要Ⅳ』	昭和52年3月		

### ④総括調査報告書・資料集

『多賀城跡 政庁跡 図録編』	昭和55年3月	『多賀城跡木簡Ⅱ』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ	平成25年3月
『多賀城跡 政庁跡 本文編』	昭和57年3月	『多賀城跡木簡Ⅲ』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅳ	平成26年3月
『多賀城跡 政庁跡 補遺編』	平成22年3月	『多賀城跡輪郭図鑑』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ	令和2年3月
『多賀城跡 外郭跡Ⅰ－南門地区－』	平成29年3月	『多賀城と古代日本』	昭和50年3月
『多賀城跡 政庁南面地区 －城前官衛遺構・遺物編－』	平成30年3月	『多賀城と古代東北』	昭和60年3月
『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ －城前官衛総括編－』	平成31年3月	『多賀城跡－発掘のあゆみ－』	平成15年3月
『多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ －政庁南大路・南北大路－』	令和3年3月	『多賀城跡－発掘のあゆみ2010－』	平成22年9月
『多賀城跡紙文書』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅰ	昭和54年3月	『多賀城跡－発掘のあゆみ2020－』	令和2年3月
『多賀城跡木簡Ⅰ』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅱ	平成23年3月		

### ⑤整備基本計画など

『特別史跡多賀城跡整備基本計画』	平成28年3月
『多賀城跡調査研究所沿革史』	令和2年3月
『特別史跡多賀城跡附寺跡緑化修景基本方針』	令和3年3月



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みやぎげんたがじょうあとちようさけんきゆうしょねんぼう2023 たがじょうあと							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2023 多賀城跡							
副書名	多賀城跡―第98・99次調査―							
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2023							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2023							
編著者名	関口重樹・初鹿野博之・鈴木貴生・吉川昌伸・吉川純子							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発行年月日	20240326							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	宮城県多賀城市 市川・浮島	04209	004	38° 18′ 24″	140° 59′ 18″	2023年5月15日 ～ 2023年11月30日	第98次調査 330㎡  第99次調査 300㎡	調査計画に 基づく学術 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	国府・城柵	奈良平安	掘立柱建物 切土 整地層 竪穴遺構 土坑 溝 炉	土師器・須恵器・須恵系土器・青磁・ 白磁・緑釉陶器・灰釉陶器、瓦、土製品、 石製品、鉄製品、鉄滓				
要約	<p>【第98次調査】第Ⅰ・Ⅱ期の外郭西辺区画施設の把握、第Ⅲ・Ⅳ期の区画施設の構造と年代の再検討を目的として実施し、以下の成果を得た。</p> <p>①外郭西辺区画施設として材木塚を検出し、A～Cの3時期の変遷を確認した。これらの年代は第Ⅲ～Ⅳ期で、B期の材木塚には楕とみられる掘立柱建物に伴う。第Ⅰ・Ⅱ期に遡る区画施設は確認できなかった。</p> <p>②C期の材木塚の掘方埋土が灰白色火山灰を含むことを確認し、今回の調査地点ではC期の構築が火山灰降下後であることが明らかとなった。</p> <p>【第99次調査】第96次調査で検出したSB3465掘立柱建物の規模と構造の把握を主な目的として実施し、以下の成果を得た。</p> <p>①建物は切土と整地層による造成を伴って構築されており、東に廊が付く南北6間、東西3間の南北棟であることが判明した。年代は780年以降～9世紀前葉頃の第Ⅲ期である。</p> <p>②竪穴遺構の内部で5基の鍛冶炉を確認した。年代は第Ⅲ期である。</p> <p>③過去の調査成果と合わせて、第Ⅲ期以降に政庁北側の区域が活発に利用される状況が明らかになった。</p>							







SX3500 出土遺物

---

---

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2023

多賀城跡

令和6年3月26日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所

多賀城市高崎一丁目22-1

T E L (022) 368-0102

F A X (022) 368-0104

印刷所 株式会社仙台紙工印刷

---

---